

Oracle® Hardware Installation Assistant 2.5
ユーザーズガイド x86 サーバー版



Part No: E22996
2011 年 4 月

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このマニュアルの使用方法	7
このドキュメントについて (PDF および HTML)	7
ドキュメントのコメント	7
ドキュメントの履歴	7
Oracle Hardware Installation Assistant ユーザーズガイドの概要	9
Oracle Hardware Installation Assistant の概要	11
Oracle Hardware Installation Assistant とは	11
機能とメリット	12
サポートされるプロビジョニングタスクの一覧	13
サポートされるサーバーとメディアの入手	15
サポートされているオペレーティングシステム	15
製品ドキュメントライブラリ	15
アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行	17
Sun Fire/Sun Blade サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション	17
プロビジョニングタスクの実行方法	21
RAID の設定	27
RAID サポート	27
RAID ボリュームを作成する方法	28
RAID ボリュームを削除する方法	31
Windows のインストール	35
ローカルまたはリモートメディアを使用して Windows をインストールする方法	35
Linux のインストール	43
ローカルまたはリモートメディアを使用して Linux をインストールする方法	43
システムおよびコンポーネントのファームウェアのアップデート	51
システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアのアップデート方法	51
エクスパンダファームウェアのアップデート方法	54
HBA ファームウェアのアップデート方法	56

サービスプロセッサの回復	59
サービスプロセッサの回復方法	59
サービスプロセッサの設定の構成	63
サービスプロセッサ識別情報の設定の構成方法	64
ネットワーク情報の設定の構成方法	67
Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理方法	70
システムクロックの設定方法	73
BIOS ブートデバイスの設定の構成	77
ブートデバイスの順序を設定する方法	77
次のブート時のブートデバイスを設定する方法	80
PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ	83
PXE インフラストラクチャのセットアップ方法	83
Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルの準備	84
PXE ベースの有人セッションの起動	89
PXE ベースの有人セッションの概要	89
PXE ベースセッションのイメージを作成する方法	89
PXE サーバーから有人インストールを実行する方法	90
PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行	93
PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの要件	93
無人インストール用の状態ファイルの作成	94
Linux の無人インストールを準備する方法	108
Windows Server の無人インストールを準備する方法	109
無人ファームウェアアップデートを準備する方法	109
アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法	110
PXE ベースのサーバーから無人セッションを起動する方法	111
PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの監視	115
仮想コンソールまたはセキュアシェル (SSH) 接続を使用した表示接続の確立 ..	115
root および VNC のパスワードの設定方法	116
VNC ビューアを使用して接続を確立する方法	117
シリアルコンソールを使用して接続を確立する方法	118
Oracle Hardware Installation Assistant のトラブルシューティング	119
Oracle Hardware Installation Assistant のエラーメッセージ	119
アプリケーションログファイルの表示方法	120
ブートしない PXE イメージのデバッグ方法	120
USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動	123
USB ドライブの要件	123

Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法	123
Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブの作成	124
USB フラッシュドライブをブートして Oracle Hardware Installation Assistant を起動 する方法	133
Service Tags のインストール	135
Linux に Service Tags をインストールする方法	136
Windows に Service Tags をインストールする方法	136
索引	139

このマニュアルの使用方法

ここでは、入手可能なドキュメントの形式、Oracleにフィードバックを送信する方法、およびドキュメントの履歴について説明します。

- 7ページの「このドキュメントについて (PDF および HTML)」
- 7ページの「ドキュメントのコメント」
- 7ページの「ドキュメントの履歴」

このドキュメントについて (PDF および HTML)

このドキュメントセットは、PDF (Portable Document Format) と HTML の両方で利用できます。情報は (オンラインヘルプと同様の) トピック単位の形式で提供されるので、章、付録、節などの番号はありません。

ドキュメントのコメント

マニュアルの品質改善のため、お客様からのご意見およびご要望をお待ちしております。コメントは下記よりお送りください。

<http://www.oracle-surveys.com/se.ashx?s=25113745587BE578>

ドキュメントの履歴

ドキュメントセットに対して以下の変更が行われました (書式およびテキスト編集上の小さな変更については記載されていません)。

- 2011年3月 - ドキュメントの初版発行 (E22996)。

Oracle Hardware Installation Assistant ユーザーズガイドの概要

『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』では、Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 を使用して Sun Fire サーバーおよび Sun Blade x86/x64 サーバーでプロビジョニングタスクを実行する方法について説明します。

説明	リンク
要件および Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションで実行できるタスクについて説明します。	11 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の概要」
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動し、ローカルメディアまたはリモートメディアからプロビジョニングまたは回復のタスクを行う準備をします。	17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」
内部ディスクドライブに、RAID 0/1 ボリュームを作成します。	27 ページの「RAID の設定」
Microsoft Windows の OS のインストールを補助します。	35 ページの「Windows のインストール」
Linux の OS のインストールを補助します。	43 ページの「Linux のインストール」
システムファームウェアのアップグレードを実行します(システム BIOS および Oracle Integrated Lights Out Manager、ディスクコントローラ HBA、またはディスクエクспанダ)。	51 ページの「システムおよびコンポーネントのファームウェアのアップデート」
破損しているかアクセスできないサービスプロセッサから回復します。	59 ページの「サービスプロセッサの回復」
Oracle ILOM の設定の特定のセットを構成および管理します。	63 ページの「サービスプロセッサの設定の構成」
BIOS の設定の特定のセットを構成および管理します。	77 ページの「BIOS ブートデバイスの設定の構成」

説明	リンク
有人モードで PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant イメージを使用して、プロビジョニングタスク (OS のインストールやファームウェアのアップグレード) を実行します。	89 ページの「PXE ベースの有人セッションの起動」
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの PXE ベースの起動をセットアップします。	83 ページの「PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ」
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの PXE ベースのセッションを有人モードで起動します。	89 ページの「PXE ベースの有人セッションの起動」
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの PXE ベースのセッションを無人モードで起動します。	93 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行」
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの無人モードでの PXE ベースのセッションを監視します。	115 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの監視」
Oracle Hardware Installation Assistant のインストールのトラブルシューティングを行います。	119 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant のトラブルシューティング」
Oracle Hardware Installation Assistant のブート可能な USB フラッシュドライブを作成して、アプリケーションを起動します。	123 ページの「USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動」
Service Tags をインストールします。	135 ページの「Service Tags のインストール」

Oracle Hardware Installation Assistant の概要

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの概要について説明します。このセクションを読むと、バージョン 2.5 の特長、要件および機能について理解できます。

- 11 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant とは」
- 12 ページの「機能とメリット」
- 13 ページの「サポートされるプロビジョニングタスクの一覧」
- 15 ページの「サポートされるサーバーとメディアの入手」
- 15 ページの「サポートされているオペレーティングシステム」
- 15 ページの「製品ドキュメントライブラリ」

Oracle Hardware Installation Assistant とは

注-2.5 より前のバージョンでは、Oracle Hardware Installation Assistant は Sun Installation Assistant という名前でした。

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、Sun Fire サーバーおよび Sun Blade x86 サーバー用のプロビジョニングツールです。このアプリケーションを使用すると、単一のインタフェースでサーバーのインストール、構成、保守、回復などのタスクを行うことができ、サーバーのセットアップと保守が容易になります。

たとえば、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して次の作業を行うことができます。

- RAID の構成
- OS のインストール
- システム BIOS および Oracle ILOM (ファームウェア) のアップデート
- HBA およびエクспанダファームウェアのアップデート
- Oracle ILOM の設定タスク
- BIOS の設定タスク
- サービスプロセッサの回復

関連項目: 12 ページの「機能とメリット」

機能とメリット

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションバージョン 2.5 には次のような機能とメリットがあります。

- さまざまなブートメディアを使用できます。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、サーバーに接続されたローカルドライブ (CD/DVD または USB フラッシュドライブ)、リダイレクトされるリモートネットワークドライブ (仮想 CD/DVD ドライブまたは ISO イメージ)、または PXE ネットワーク環境で利用できるイメージから起動できます。
- OS のインストールを補助します。
 - オプションのアクセサリカード用および他のシステムハードウェア用に、Oracle 認定サーバー固有および設定固有のデバイスドライバを提供します。
 - OS をインストールする前に OS レベルのデバイスドライバを別のメディアで入手して準備する必要がなくなります。
 - Oracle VM およびサポートされるバージョンの Windows および Linux (Oracle、SLES、RHEL) オペレーティングシステムの OS インストールを補助します。

注-インストールには、ライセンス製品版の OS ソフトウェアが必要です。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは、OS のソフトウェアは提供されません。

- ハードディスク、半導体ディスク、またはコンパクトフラッシュへの OS のインストールをサポートします。
- PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant を使用して、無人の OS インストールとファームウェアのアップデートタスクをサポートします。
- 自動実行機能によって (Windows クライアントのみ)、Oracle Hardware Installation Assistant 環境 (バージョン 2.4 以降) の外部で追加タスクを実行できます。
- 統合された LSI ディスクコントローラを含むサーバーの RAID 構成を補助します。サポートされるのは、RAID 0 および RAID 1 の統合ミラーまたは統合ミラー拡張 (ストライピング) です。補助される RAID 1 構成は、LSI SAS-2 コントローラ (926x、9280) でも使用できます (Oracle Hardware Installation Assistant 2.4 以降)。
- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションアップデートオプションが提供され、アプリケーションを最新のバージョンに維持できます。
 - アップデートは Oracle ダウンロードサイトから行い、必ず最新のドライバとファームウェアがセッションで使用されるようにしてください。

- サービスプロセッサと Oracle ILOM 設定機能の特定のセットを提供します。
 - Oracle ILOM のユーザーアカウントの設定、およびネットワーク設定、システムクロック、システム識別情報の構成を管理できます。
 - BIOS レベルでのブートデバイスの優先順位の構成および次回のブートデバイスの選択が可能です。
- 以下のファームウェアアップデート機能を提供します。
 - システム BIOS および Oracle ILOM ファームウェア
 - HBA ファームウェア
 - エクスパンダファームウェア
- 管理およびトラブルシューティングの機能
 - Oracle Hardware Management Pack 2.1 には、管理エージェント、Sun Server Hardware SNMP プラグイン、および CLI ツールが含まれます。これらのコンポーネントは、Sun Fire サーバーおよび Blade モジュールのハードウェアを監視および構成するための、柔軟な帯域内管理機能を提供します。
 - Oracle Hardware Management Pack のドキュメントについては、<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/sys-mgmt-networking-190072.html#hwmgmt> を参照してください。
 - Oracle Hardware Management Pack については、<http://www.oracle.com/goto/system-management> でシステム管理製品のページを参照してください。
 - Oracle の Sun Service Tags インストールパッケージをサポートします。
 - 機能していない (壊れている、またはアクセスできない) サービスプロセッサに対する回復機能を提供します。この機能はサーバー固有です。
 - Oracle Hardware Installation Assistant セッションイベントログを作成し、トラブルシューティングを容易にします。

関連項目:

- 13 ページの「サポートされるプロビジョニングタスクの一覧」
- 15 ページの「サポートされるサーバーとメディアの入手」
- 15 ページの「サポートされているオペレーティングシステム」

サポートされるプロビジョニングタスクの一覧

次の表に、Oracle Hardware Installation Assistant で実行可能なサーバー固有のプロビジョニングタスクの一覧を示します。

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションインタフェースで実行可能なタスクの一覧は、サーバーに依存します。サーバーによっては一部のタスクを実行できない場合があります。

タスク	説明
OS のインストール	Oracle VM およびサポートされるバージョンの Microsoft Windows および Linux の OS インストールを補助します。複数のインストール方法とデバイスに対応しています。
RAID の構成	内部ドライブに 1 つまたは複数の RAID 0 および RAID 1 ボリュームをセットアップします (LSI ディスクコントローラが統合されているサーバーの場合)。
システム BIOS と ILOM のアップグレード	システム BIOS および Oracle ILOM サービスプロセッサファームウェアをアップグレードします。アプリケーションには、インストールされているバージョンと入手可能な最新のバージョンが表示されます。BIOS と Oracle ILOM は対になったコンポーネントであり、同時にアップデートされます。
HBA ファームウェアのアップグレード	サーバーに統合された HBA (ホストバスアダプタ) のファームウェアをアップデートします。アプリケーションには、インストールされているバージョンと入手可能な最新のバージョンが表示されます。
エクスパンダファームウェアのアップグレード	サーバーに統合されたディスクエクスパンダのファームウェアをアップグレードします。アプリケーションには、インストールされているバージョンと入手可能な最新のバージョンが表示されます。
SP の回復	機能していないサービスプロセッサ (アクセスできない、または壊れたデータが表示されている) を回復します。 注 - この機能はサーバーによっては実行できません。
ILOM の設定	Oracle ILOM と BIOS の設定の特定のセットを構成および管理します (識別情報とネットワーク情報、ユーザーアカウント、システムクロックの設定など)。
BIOS の設定	ブートデバイスの順序および 1 回だけのブートデバイスを構成します。

関連項目:

- 12 ページの「機能とメリット」
- 15 ページの「サポートされるサーバーとメディアの入手」
- 15 ページの「サポートされているオペレーティングシステム」

サポートされるサーバーとメディアの入手

- サポートされるサーバーの完全な一覧とソフトウェアダウンロードへのリンクについては、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/hia>

- Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD メディアには、Sun Fire サーバー用および Sun Blade サーバー用があります (サーバーに付属するか、または X-Option とし入手できます)。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの ISO CD-ROM イメージまたは USB フラッシュドライブイメージも、Oracle からダウンロードできます。

関連項目:

- 12 ページの「機能とメリット」
- 13 ページの「サポートされるプロビジョニングタスクの一覧」
- 15 ページの「サポートされているオペレーティングシステム」

サポートされているオペレーティングシステム

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、サポートされているバージョンの Oracle VM、Linux、および Microsoft Windows で利用できます。サポートされるオペレーティングシステムの一覧は、アプリケーションの「**Release Notes**」画面に表示されます。

HTML 形式のリリースノートは、次のサイトのサーバーダウンロード画面でも参照できます。

<http://support.oracle.com/>

関連項目:

- 12 ページの「機能とメリット」
- 13 ページの「サポートされるプロビジョニングタスクの一覧」
- 15 ページの「サポートされるサーバーとメディアの入手」

製品ドキュメントライブラリ

Oracle Hardware Installation Assistant および Sun Installation Assistant の製品ドキュメントライブラリは、次の Web サイトからオンラインで利用できます。

<http://www.oracle.com/goto/hia>

アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの起動方法とプロビジョニングタスクの実行方法について説明します。このアプリケーションは、ローカルまたはリモートの各種メディアオプションのいずれかを使用して起動できます。また、PXE ベースのインストールから、有人モードまたは無人モードで起動することもできます。

- 17 ページの「[Sun Fire/Sun Blade サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション](#)」
- 20 ページの「[ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法](#)」
- 21 ページの「[プロビジョニングタスクの実行方法](#)」

Sun Fire/Sun Blade サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、ほとんどの Sun Fire および Sun Blade サーバーでサポートされます。アプリケーションを起動する作業の詳細はこの 2 種類のサーバーで異なりますが、基本的にはアプリケーションをローカルで起動するか、リモートで起動するかのどちらかです。

このセクションの次の 2 つのトピックでは、各サーバータイプで利用できる Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションのローカル起動オプションとリモート起動オプションについて説明します。

- 18 ページの「[Sun Fire サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション](#)」
- 19 ページの「[Sun Blade サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション](#)」

Sun Fire サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション

このセクションでは、サポートされる Sun Fire サーバーで Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動するさまざまな方法について説明します。使用しているサーバータイプおよびインストール環境のニーズに最適な方法を確認してください。

Sun Fire サーバーでサポートされた方法	説明
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション CD/DVD、またはアプリケーションが準備された USB フラッシュドライブを使用して、サーバーでローカルに起動する。	サーバーの CD/DVD ドライブに挿入されている CD/DVD からアプリケーションを起動します。
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション USB フラッシュドライブを使用して、サーバーでローカルに起動する。	サーバーの USB ポートの 1 つに接続されている、準備された USB フラッシュドライブからアプリケーションを起動します。123 ページの「USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動」を参照してください。
リモートコンソールを使用し、サーバーのサービスプロセッサを介してリモートで起動する。この方法では、仮想 CD/DVD から Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動できます。	Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用し、仮想 CD/DVD からアプリケーションを起動します。リモートコンソールアプリケーションについては、使用しているサーバーの Oracle ILOM ドキュメントを参照してください。 注 - Oracle ILOM には複数のバージョンがあるため、使用しているサーバーにインストールされたバージョンのガイドを必ず参照してください。
PXE ネットワークブートイメージを使用し、ネットワークを介してリモートで起動する。	PXE サーバーからアプリケーションを起動します。この方法を使用すると、インストール時間を大幅に低減することができます。PXE ネットワークブートの設定方法は、89 ページの「PXE ベースの有人セッションの起動」を参照してください。リモートインストールオプションには、ほかにも 93 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行」があります。

関連項目: [20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」](#)

Sun Blade サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション

このセクションでは、サポートされる *Sun Blade* サーバーで Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動するさまざまな方法について説明します。使用しているサーバータイプおよびインストール環境のニーズに最適な方法を確認してください。

Sun Blade サーバーでサポートされた方法	説明
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション CD/DVD を使用して、サーバーでローカルに起動する。	接続されている USB CD/DVD ドライブからアプリケーションを起動します (サーバーモジュールには内蔵 CD/DVD ドライブがありません)。この方法では、使用している Sun Blade サーバーモジュールのインストールドキュメントの説明に従って、VGA コンソールおよびキーボードとマウスをセットアップしていることを前提としています。
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション USB フラッシュドライブを使用して、サーバーでローカルに起動する。	サーバーの USB ポートの 1 つに接続されている、準備された USB フラッシュドライブからアプリケーションを起動します。123 ページの「USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動」を参照してください。
リモートコンソールを使用し、サーバーのサービスプロセッサを介してリモートで起動する。この方法では、仮想 CD/DVD から Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動できます。	Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用し、仮想 CD/DVD からアプリケーションを起動します。リモートコンソールアプリケーションについては、使用しているサーバーの Oracle ILOM ドキュメントを参照してください。 注 - Oracle ILOM には複数のバージョンがあるため、使用しているサーバーにインストールされたバージョンのガイドを必ず参照してください。
PXE ネットワークブートイメージを使用し、ネットワークを介してリモートで起動する。	PXE サーバーからアプリケーションを起動します。この方法を使用すると、インストール時間を大幅に低減することができます。PXE ネットワークブートの設定方法は、89 ページの「PXE ベースの有人セッションの起動」を参照してください。リモートインストールオプションには、ほかにも 93 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行」があります。

関連項目: 20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」

▼ ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法

このセクションでは、サポートされるローカルまたはリモートメディアオプションのいずれかを使用して Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動する方法について説明します。

- 始める前に
- ローカルおよびリモートメディアオプションについては、17 ページの「[Sun Fire/Sun Blade サーバーのローカルおよびリモートメディア起動オプション](#)」を参照してください。
 - 使用しているサーバーがインターネットに接続されている必要があります (通常、プロキシサーバーを介してアクセスします)。
- サポートされる方法のいずれかを使用してアプリケーションを起動します。
- **CD/DVD** を使用してローカルで起動: Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション CD/DVD をサーバーの CD/DVD ドライブ (内蔵または USB 接続) に挿入し、サーバーに電源を入れるかまたはサーバーを再起動します。
 - **USB フラッシュドライブ** を使用してローカルで起動: USB Oracle Hardware Installation Assistant フラッシュドライブを、サーバーの USB ポートのいずれかに直接差し込みます。BIOS セットアップユーティリティを使用し、USB フラッシュドライブから起動するようにサーバーをリダイレクトして、サーバーを再起動します。123 ページの「[USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動](#)」を参照してください。
 - **CD/DVD** またはイメージファイルからリモートで起動: Oracle ILOM インタフェースを使用してリモートコンソール (または KVMS) からサーバーのサービスプロセッサにログインし、Remote Control Launch Redirection (リモートコントロール起動リダイレクション) 機能を使用して、サーバーを Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション CD/DVD イメージが入った仮想 CD/DVD ドライブにリダイレクトします。サーバーを再起動し、このサーバーが仮想 CD/DVD ドライブからブートするように指定します (通常、サーバーの起動時に利用可能な F8 メニューを使用して指定します)。

注 - リダイレクトされた CD/DVD または ISO メディアからのアプリケーションの起動には、数分かかることがあります。この間、アプリケーションの起動画面が表示され、進捗インジケータが示されます。

- **PXE** ベースイメージを使用してリモートで起動: PXE ネットワークブートを使用して Linux ベースの PXE サーバーから Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを読み込む場合は、89 ページの「[PXE ベースの有人セッションの起動](#)」を参照してください。

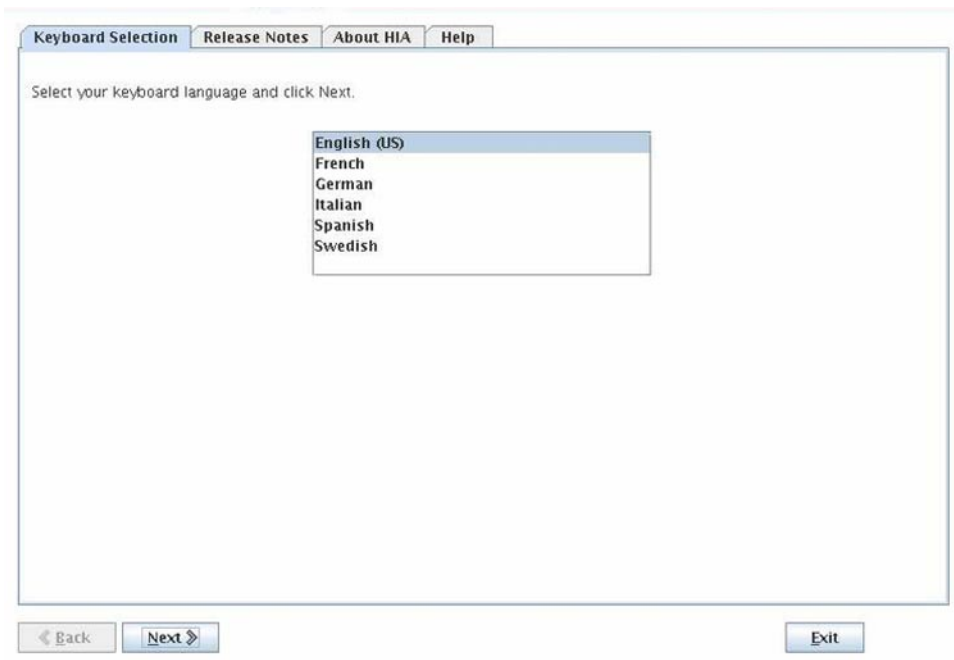
次の手順 21 ページの「[プロビジョニングタスクの実行方法](#)」を参照してください。

▼ プロビジョニングタスクの実行方法

この作業には、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用してプロビジョニングタスクまたは復旧タスクを実行する手順が含まれます。メインタブのほかに、次のタブが表示されます。

- Release Notes。このタブには、現行バージョンの Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションに関する最新情報が示されます。「Release Notes」タブは常に利用可能です。
- About HIA。このタブには、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの概要が示されます。「About HIA」を選択できるのは、オープニング画面上だけです。
- Help。このタブには、画面固有のヘルプ情報が示されます。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。[17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」](#)を参照してください。アプリケーションが起動し、「Select Your Keyboard Language」画面が表示されます。



2 「Next」をクリックします。

「Remote Update」画面には、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションソフトウェアをアップデートするためのオプションが示されます。



3 「Remote Update」画面で「Release Notes」タブをクリックします。

「Release Notes」画面が表示されます。「Release Notes」画面には、現行バージョンの Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションに関する重要情報が示されます。

4 確認したら、「Remote Update」タブをクリックします。

「Remote Update」画面が表示されます。

- 5 アプリケーションをアップデートするには、「Yes」ラジオボタンを選択し、「Next」をクリックします。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションをアップデートしない場合は、手順 8 に進んでください。
- 「Network Configuration」画面が表示されます。

The screenshot shows the 'Network Configuration' window. At the top, there are three tabs: 'Network Configuration', 'Release Notes', and 'Help'. Below the tabs, a message reads: 'Enter your network configuration (interface and IP settings) and click Next.' A dropdown menu shows 'eth0'. Underneath, there are two radio buttons: 'DHCP' (which is selected) and 'Static IP'. Below these are five input fields labeled 'IP Address:', 'Netmask:', 'Gateway:', 'Nameserver:', and 'Domain:'. Further down, there is a checkbox labeled 'HTTP Proxy Configuration (For Remote Update only)'. Below this checkbox are two more input fields: 'Proxy Host:' and 'Proxy Port:'. At the bottom of the window, there are three buttons: 'Back', 'Next', and 'Exit'. A mouse cursor is pointing at the 'Next' button.

- 6 Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションのアップデートを行うには、次の手順を実行します。
- サーバー上のアクティブなネットワークインタフェース (**eth0** など) を選択します。
この操作で、アプリケーションがアップデートイメージのアクセスに使用するネットワークインタフェースが有効になります。サーバーに複数のネットワークカードが装着されている場合は、アップデートイメージファイルが存在するホストにアクセスできる、ネットワークに接続されたインタフェースを使用するように注意してください (Oracle Hardware Installation Assistant アップデートサイトを使用するにはインターネットアクセスが必要です)。
 - ネットワーク IP 割り当て (**DHCP** または **静的 IP**) を選択します。
 - DHCP** を選択した場合は、手順 7e に進みます。
 - 静的 IP** を選択した場合は、対応するフィールドに次の情報を入力します。

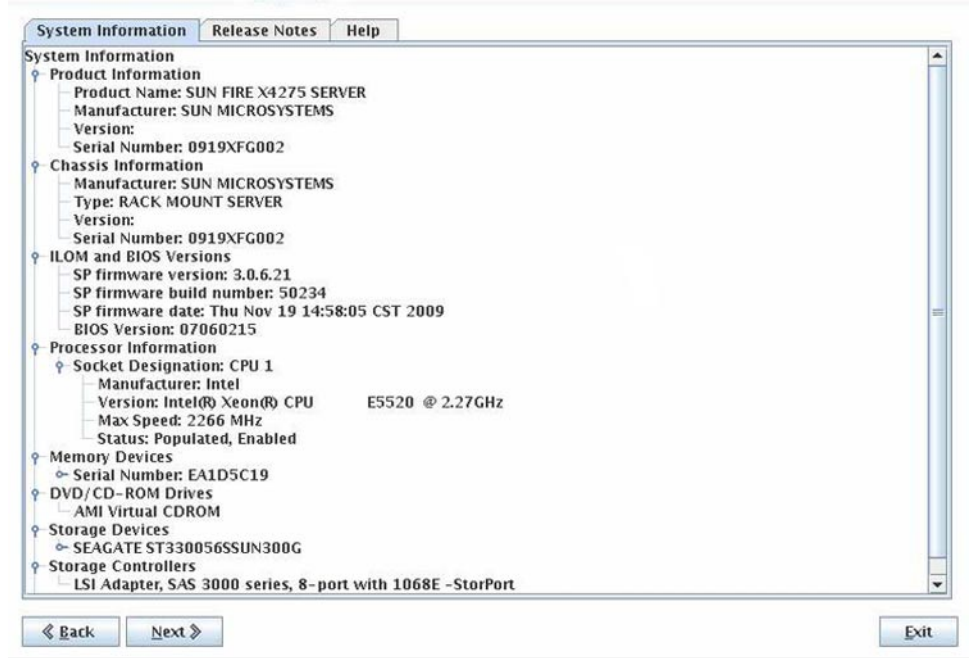
- IP アドレス
 - ネットマスク
 - ゲートウェイ
 - ネームサーバー
 - ドメイン
- e. インターネットアクセスに **HTTP** プロキシが必要な場合は、プロキシホストおよびプロキシポートの情報を入力します。
たとえば、次のように表示されます。

Proxy Host: *webproxy.mycompany.com*

Proxy Port: 8088

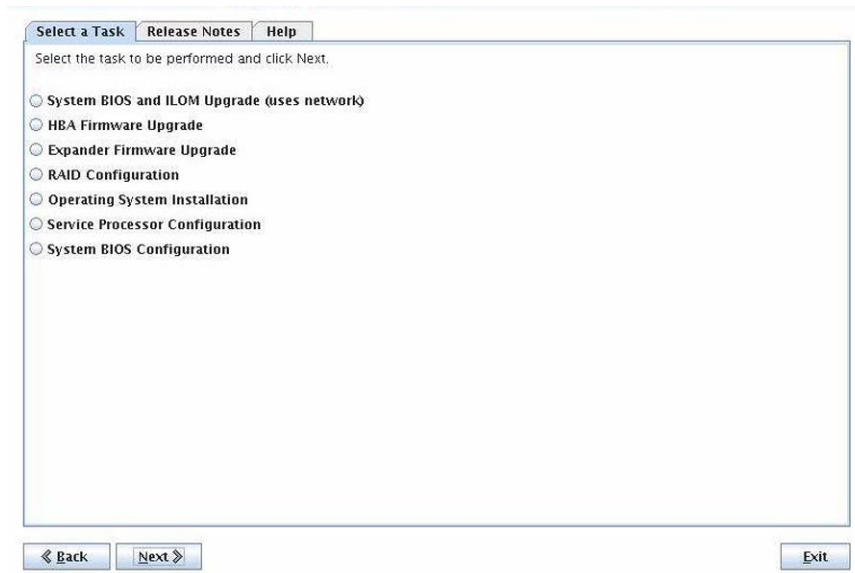
- f. **Oracle Hardware Installation Assistant** のアップデートサイトへの接続を確立するには、「**Next**」をクリックします。
プロセスによって、コンポーネントがアップデートされているかどうかを確認されます。アップデートが利用可能な場合、アップデートできるコンポーネントがリスト内に表示されます。
- g. アップデートを行うには、「**Next**」をクリックします。
アップデートが完了すると、「**System Information**」画面が表示されます。

ヒント-個々の情報リストを展開するには、トグルをクリックします。



- 7 「System Information」画面の内容を確認し、「Next」をクリックします。
「Select a Task」画面が表示されます。

注-OS インストール以外に追加のプロビジョニングタスクがサーバーでサポートされている場合のみ、「Select a Task」画面が表示されます。そのようなタスクがサポートされていない場合は、OS のインストール画面が表示されます。



- 8 「Select a Task」画面で、次のタスクのいずれかを選択し、「Next」をクリックします。

次の手順 タスクに関連した情報については、次の該当するセクションを参照してください。

- サーバーに LSI ディスクコントローラが含まれており、OS ブートディスクを RAID 構成の一部として含める場合は、[27 ページの「RAID の設定」](#)を参照してください。
- サーバーにサポートされる OS をインストールするには、[35 ページの「Windows のインストール」](#)または[43 ページの「Linux のインストール」](#)を参照してください。
- システムまたはコンポーネントのファームウェア (BIOS/Oracle ILOM、HBA、またはディスクエクパンダ) をアップデートするには、[51 ページの「システムおよびコンポーネントのファームウェアのアップデート」](#)を参照してください。
- 破損している、またはアクセスできないサービスプロセッサ (SP) を回復するには、[59 ページの「サービスプロセッサの回復」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM ユーザーを管理するには、[63 ページの「サービスプロセッサの設定の構成」](#)を参照してください。
- ブートデバイスの優先順位を設定するには、[77 ページの「BIOS ブートデバイスの設定の構成」](#)を参照してください。

RAID の設定

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、RAID 対応の LSI ディスクコントローラ (内蔵またはオプション) を搭載した Sun Fire および Sun Blade サーバー用 RAID を構成する方法について説明します。

- 27 ページの「RAID サポート」
- 28 ページの「RAID ボリュームを作成する方法」
- 31 ページの「RAID ボリュームを削除する方法」

RAID サポート

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは LSI SAS-2 コントローラ (926x、9280) を搭載したシステム上の RAID 構成のみサポートしています。システムにこれらのコントローラのいずれかが含まれていない場合は、RAID 構成タスクを行うことができません。

注- ブートドライブを RAID 構成に含める場合は、ブートドライブに OS をインストールする前に行う必要があります。

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、利用可能な SAS または SATA ディスクドライブでのみ RAID 0 および RAID 1 (ミラー化) の設定に使用できません。SAS ドライブと SATA ドライブを、RAID ボリュームで組み合わせて使用することはできません。SAS ディスクと SATA ディスクを使用する場合は、別々の RAID ボリュームに設定する必要があります。

最大 32 の RAID ボリュームをサポートしています。ホットスワップは Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して構成することはできません。ホットスワップを構成するには、ディスクコントローラの BIOS 設定ツールを使用します。このツールは、システムブート時にキーボードの所定のキーを押すことでアクセス可能です。

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションで設定できる RAID ボリュームのタイプは、使用しているコントローラのタイプによって異なります。

- LSI MegaRAID (926x、9280) SAS-2 コントローラの場合は次のように設定できません。

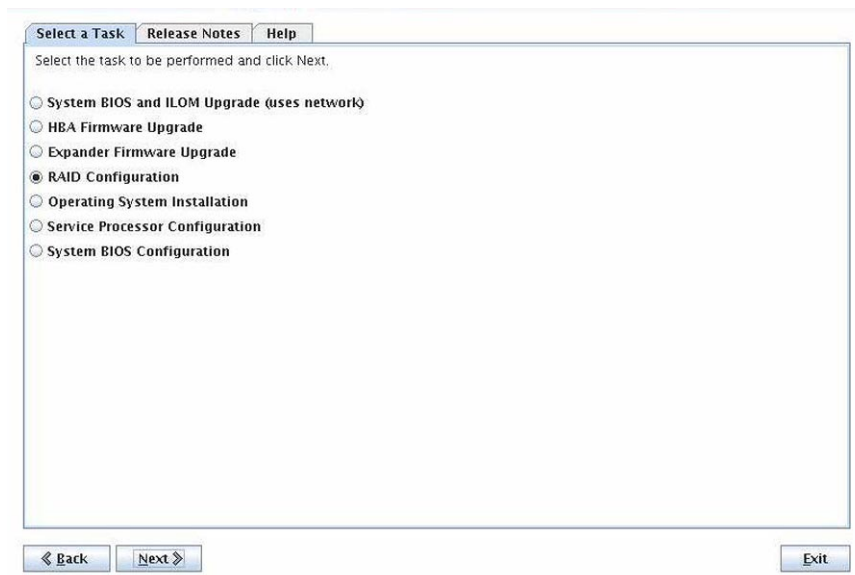
- RAID 0: 1 つまたは複数の物理ディスクを使用するストライプ化ボリューム。データは、ボリュームを編成するすべての利用可能なディスクに対してストライプ化されます。RAID 0 には耐障害性はありませんが、特に大規模ファイルには高いデータスループットが提供されます。
- RAID 1: 物理ディスク上のデータをミラー化するボリューム。各ボリュームの物理ディスク数は偶数にする必要があります (2 の倍数)。

関連項目: 28 ページの「RAID ボリュームを作成する方法」

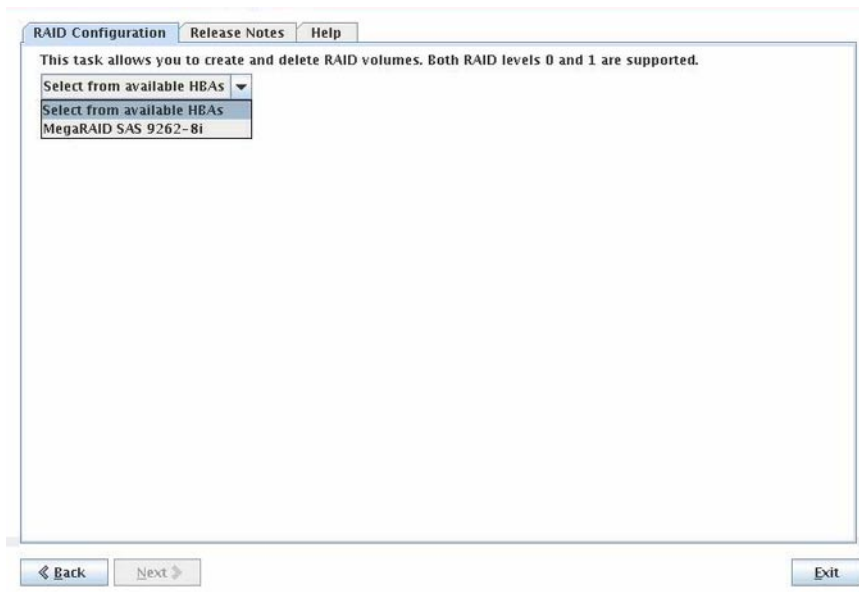
▼ RAID ボリュームを作成する方法

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動します。17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」を参照してください。
- 2 「Select a Task」画面で、「Raid Configuration」ラジオボタンを選択します。

注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。



- 3 「Next」をクリックします。
HBA の選択画面が表示されます。



- 4 ドロップダウンリストから **HBA** を選択して「Next」をクリックします。
「RAID Configuration」画面が表示されます。

RAID Configuration Release Notes Help

This task allows you to create and delete RAID volumes. Both RAID levels 0 and 1 are supported.

MegaRAID SAS 9262-8i

Available Disks First select RAID level. Then allocate disks to the volume

Select To Allocate	Device	Vendor	Size (GB)	Type
<input type="checkbox"/>	Enc 17 Slot 6	SEAGATE	68	SAS

Select RAID Level Create Volume

Created Volumes

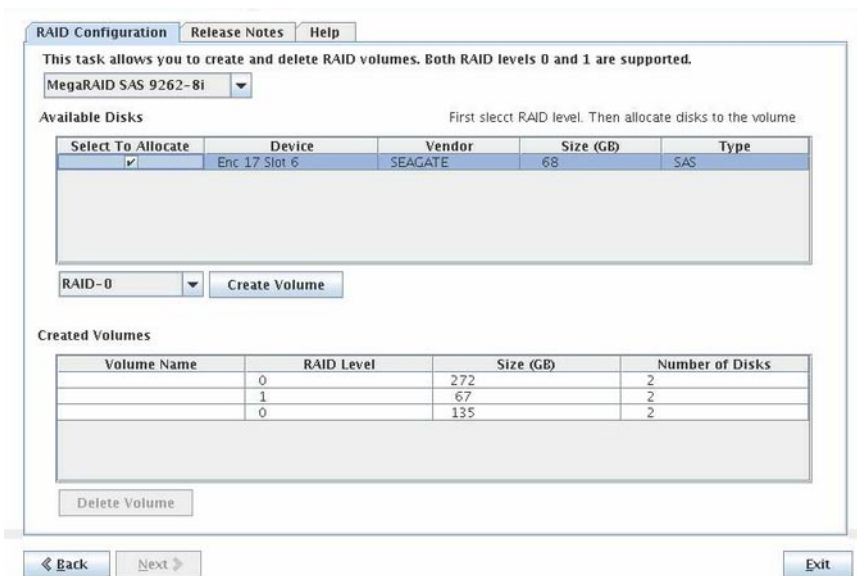
Volume Name	RAID Level	Size (GB)	Number of Disks
0	0	272	2
1	1	67	2
0	0	135	2

Delete Volume

Back Next Exit

- 5 「RAID Configuration」画面で、「Available Disks」ボックスから RAID ボリュームに含めるディスクを選択します。
- RAID 1 または RAID IM ボリュームを作成するには、2つのディスクを選択します。
 - 強化統合ミラー (IME) ボリュームを作成するには、3 - 10 のディスクを選択します。
 - 新規にボリュームを作成するには、ドロップダウンリストから RAID レベル (RAID 0 または RAID 1) を選択して利用可能な空きディスクから選択します。RAID 0 の場合は、1つまたは複数のディスクを選択します。RAID 1 の場合は、偶数個のディスクを選択します。

注- このインターフェースでは、ボリュームごとにディスクコントローラがサポートしている数を超えるディスクを選択することはできません。コントローラが IME ボリュームをサポートしていない場合は、ボリュームごとに2つのディスクしか選択できません。



- 6 「Create Volume」 ボタンをクリックします。
ボリュームが作成されて、「Created Volumes」ボックスに表示されます。

注 - RAID ボリュームに含まれるディスクは「Available Disks」ボックスには表示されません。

次の手順 RAID ボリュームの作成後は、ブートボリュームに OS をインストールできます。

- 35 ページの「Windows のインストール」
- 43 ページの「Linux のインストール」

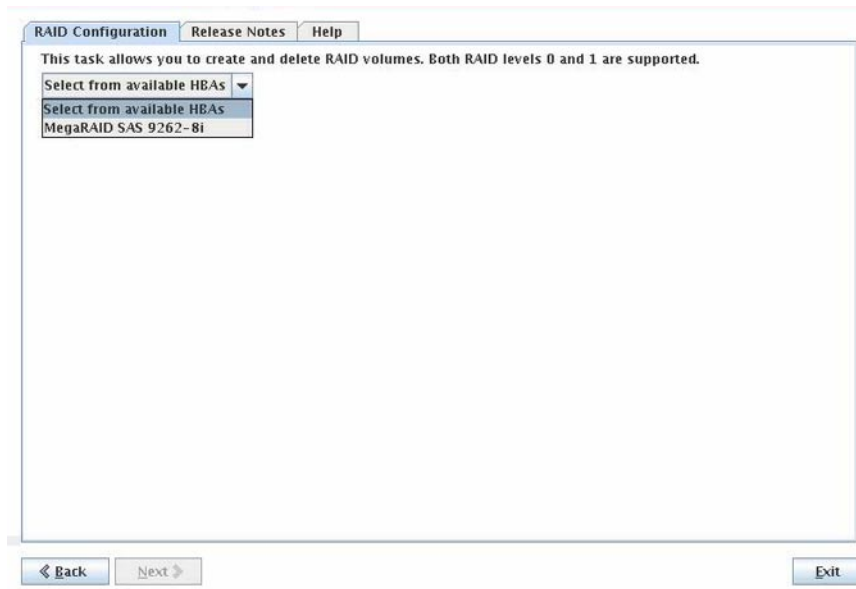
参照 31 ページの「RAID ボリュームを削除する方法」

▼ RAID ボリュームを削除する方法

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動します。17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」を参照してください。「Select a Task」メニューが表示されます。

注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「RAID Configuration」タスクを選択して「Next」をクリックします。
HBA の選択画面が表示されます。



- 3 ドロップダウンリストから **HBA** を選択して「**Next**」をクリックします。
「RAID Configuration」画面が表示されます。

- 4 「**Created Volumes**」ボックスから削除する RAID ボリュームを選択し、「**Delete Volume**」ボタンをクリックします。



注意-データ損失が発生します。ボリュームを削除するとボリュームのデータがすべて消去されます。

ボリュームが削除されて、ボリューム内にあったディスクが「Available Disks」ボックスに表示されます。

- 5 アプリケーションを終了するには、「**Exit**」をクリックするか、「**Back**」をクリックしてその他のプロビジョニングタスクを続行します。

Windows のインストール

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用してサポート対象の Microsoft Windows OS をインストールする方法について説明します。このアプリケーションはサポート対象のオペレーティングシステムのインストールを支援するものであるため、タスクを完了するためには、ライセンス製品版の OS 配布メディアが必要になります。

注 - Oracle から提供および Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションによってインストールされるシステムおよび OS レベルのデバイスドライバの一覧については、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD 内の readme.html ファイルおよび使用するサーバーの「ご使用にあたって」を参照してください。

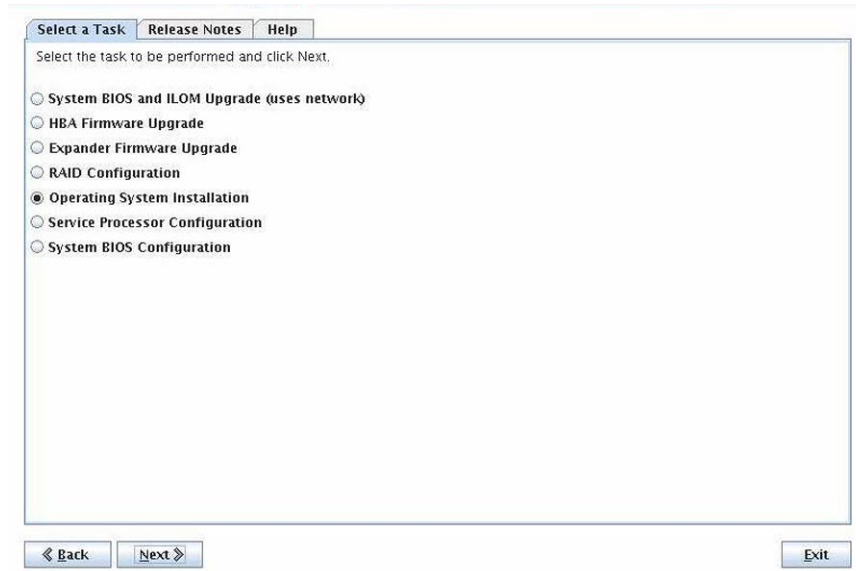
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションとローカルまたはリモートメディアを使用して Windows をインストールするには、[35 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して Windows をインストールする方法」](#)を参照してください。

▼ ローカルまたはリモートメディアを使用して **Windows** をインストールする方法

- 始める前に
- サーバーに LSI ベースの RAID コントローラが内蔵されていて、ブートドライブを RAID 構成の一部に含める場合は、オペレーティングシステムをインストールする前に RAID ボリュームを構成する必要があります。[27 ページの「RAID の設定」](#)を参照してください。
 - Sun StorageTek RAID ディスクコントローラ (Adaptec ベース) を使用している場合は、Adaptec RAID Configuration Utility を使用してアレイボリュームを構成する必要があります (Adaptec RAID Configuration Utility を利用するには、サーバーのブートプロセスでプロンプトが表示されたときに Ctrl-A を押します)。これは、RAID を使用するかどうかに関わらず実行する必要があります。これを行う手順については、使用しているプラットフォームのインストールガイドを参照してください。
 - 以下の手順では、ローカル CD/DVD ドライブアクセスを前提としています。ローカルの USB フラッシュドライブを使用する場合 ([123 ページの「USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動」](#)) を参

照)、または CD-ROM リダイレクトを使用してリモートコンソール (KVM) から Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動する場合は、それに応じて手順を変更してください。

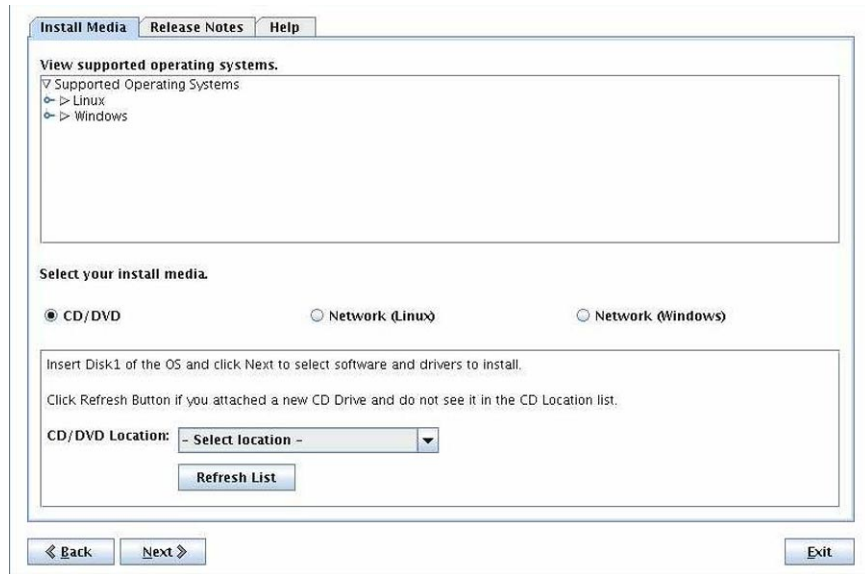
- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。17 ページの「[アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行](#)」を参照してください。



- 2 「Select a Task」画面で、「Operating System Installation」ボタンをクリックします。

注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 3 「Next」をクリックします。
「Install Media」画面が表示されます。



- 4 使用する OS のサポート対象バージョンを確認するには、トグルをクリックしてリスト表示を展開します。

注 - Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、サポート対象外のバージョンの OS をインストールすることはできません。

- 5 OS インストールメディアの場所を選択するには、該当するボタンをクリックします。
メディアの配布方法として次のオプションが用意されています。
 - **CD/DVD**: このオプションを選択すると、ローカルの CD/DVD、リダイレクト先の CD/DVD、または ISO CD-ROM イメージから OS ソースをインストールすることができます。
 - **Network (Linux)**: このオプションを選択すると、Linux システム上のネットワーク共有から OS ソースをインストールすることができます。
 - **Network (Windows)**: このオプションを選択すると、Windows システム上のネットワーク共有から OS ソースをインストールすることができます。
- 6 選択したインストールメディアの場所に応じて、次のいずれかの手順を実行します。
 - ローカルの CD/DVD からインストールする場合は、[手順 7](#)に進みます。

- リダイレクト先の CD/DVD または ISO CD-ROM イメージからインストールする場合は、[手順 8](#)に進みます。
 - ネットワークの共有ドライブからインストールする場合は、[手順 9](#)に進みます。
- 7 ローカルの CD/DVD からインストールする場合は、「**Install Media Information**」画面で次の作業を行います。
- a. 「**CD/DVD**」ラジオボタンを選択します。
 - b. 「**CD Location**」ドロップダウンリストからサーバーの **CD/DVD** ドライブを選択します。
 - c. **Oracle Hardware Installation Assistant** の **CD/DVD** をドライブから取り出して、OS ディストリビューションの最初の **CD** をドライブに挿入します。
 - d. 「**Install Media Information**」画面で「**Next**」をクリックし、[手順 12](#)に進みます。
- 8 サーバーの **Oracle ILOM** リモートコンソールアプリケーションを使用してリダイレクト先の CD/DVD または ISO CD-ROM イメージからインストールする場合は、「**Install Media Information**」画面で次の作業を行います。
- a. 「**CD/DVD**」ラジオボタンを選択します。
 - b. 「**CD Location**」ドロップダウンリストから仮想 **CD-ROM** を選択します。
 - c. サーバーの **Oracle ILOM** リモートコンソールで、次のいずれかの方法を使用して、**OS** インストールメディア (**CD-ROM** または **CD-ROM Image**) をリダイレクトします。
 - **CD/DVD** ドライブから **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションをブートした場合は、このドライブから **CD** を取り出して、OS の最初のディスクをドライブに挿入します。リモートコンソールの「**Devices**」メニューから「**CD-ROM**」オプションを選択します。
 - **ISO CD-ROM** イメージから **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションをブートした場合は、「**Devices**」メニューで「**CD-ROM Image**」の選択を解除してから「**CD-ROM Image**」を再度選択し、ISO OS CD-ROM イメージの場所を指定します。
 - d. 完了したら、「**Install Media Information**」画面で「**Next**」をクリックし、[手順 12](#)に進みます。

- 9 ネットワーク共有ドライブからインストールする場合は、「Install Media Information」画面で次の作業を行います。
- a. 「Network (Windows)」ラジオボタンが選択されていることを確認します。
 - b. 表示されるアドレスバーで、Windows ISO イメージメディアにアクセスするための **http** または **ftp** のネットワークアドレスを指定します。下の表の例を参照してください。

オペレーティングシステムで複数のイメージ(たとえば、CD1、CD2)を使用する場合に備えて、複数のアドレスフィールドが用意されています。

注 - URL アドレスの中でスペースを使用することはできません。

転送方法	OS ソースの場所	入力内容
HTTP	ディレクトリ内の ISO イメージファイル	OS インストール用の ISO イメージファイルを格納するディレクトリへのパス。例: <code>http://hostname_or_IPaddress/imagepath/ISOimage.iso</code>
FTP	ディレクトリ内の ISO イメージファイル	OS インストール用の ISO イメージファイルを格納するディレクトリへのパス。例: <code>ftp://hostname_or_IPaddress/imagepath/ISOimage.iso</code>

上記の表で、*hostname_or_IPaddress* はイメージファイルを格納するサーバーのホスト名または IP アドレスのいずれかで、*ISOimage.iso* は Windows OS のインストール用 ISO イメージ (.iso) ファイルです。Windows の場合は、必要な ISO ファイルへの完全なパスを記載する必要があります。

- c. 「Next」をクリックします。
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、挿入されたメディアをチェックしてサポート対象のバージョンであることを確認し、「Identifying Distribution」画面にその結果を表示します。
- 10 一覧からオプションカードを選択する場合は、カード名の横にあるチェックボックスをクリックします。
- 11 完了したら、「Next」をクリックします。
- 12 Windows Server 2003 をインストールする場合は、「Windows Preinstallation Information」画面が表示されます。必要な情報を入力して「Next」をクリックし、手順 15 に進みます。

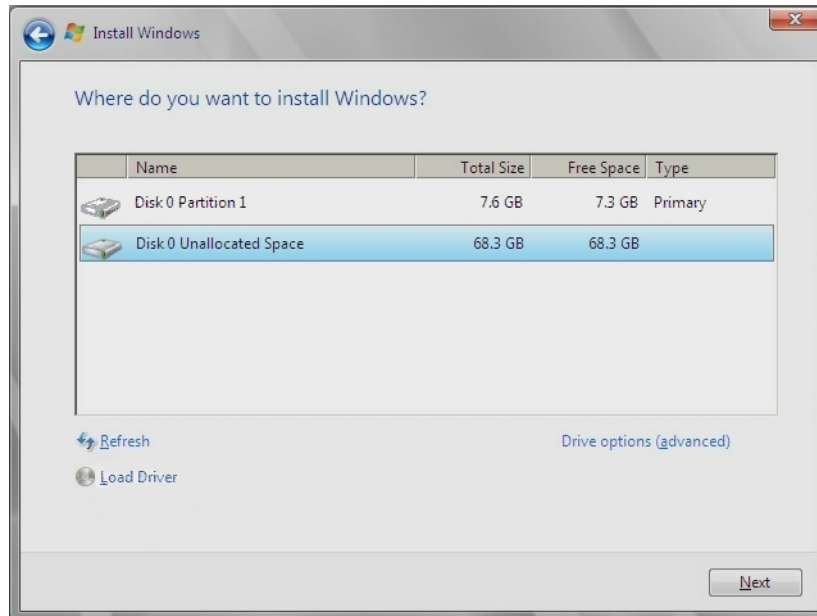
- 13 **Windows Server 2008** をインストールする場合は、「**Setup WinPE Environment**」画面が表示されます(下図を参照)。ドロップダウンリストから **WinPE** パーティションのブートディスクを選択し、「**Next**」をクリックします。



注 - このパーティションは、Windows Server 2008 のインストールに必要です。

Windows Server 2008 インストール用の WinPE パーティションが作成されます。

- 14 **Windows Server 2008** のインストールでは、**OS** のパーティションを選択する画面が表示されます(下図を参照)。**WinPE** パーティション以外のディスク上の使用可能な領域を選択して、「**Next**」をクリックします。



注- ディスクの最初の 8 GB は WinPE パーティション用に確保されているため、他の用途に使用することはできません。

Windows のブートパーティションが作成され、OS のプレインストール環境が整います。

- 15 インストールする **Windows** のバージョンに応じて、「**Installing Additional Software**」画面が表示される場合があります。表示された情報を確認して、エラーがないことを確認します。

注- インストール中にエラーが発生している場合は、SunInstallationAssistant.log ファイルでさらに詳しく調べます。

- 16 **Oracle Hardware Installation Assistant** のメディアを取り出して、「**Reboot**」をクリックします。

サーバーは、新しくインストールした OS で起動します。画面の指示に従って、OS のセットアップタスクを完了します。

注 - ディスク 0 以外のディスクに OS をインストールする場合は、システムのブート順序を変更して正しいブートディスクを識別する必要があります。これには、システムの BIOS セットアップユーティリティ (ディスクが内蔵のディスクコントローラに接続されている場合)、またはオプションカードの BIOS セットアッププログラム (ディスクがオプションの HBA に接続されている場合) を使用します。使用するシステムまたはオプションカードのドキュメントの手順に従って、ブート順序を設定します。

注 - Windows Server 2008 の管理者アカウントの既定のパスワードは `changeme` です。

次の手順 OS のインストールが完了したら、必要に応じて、以下のポストインストールタスクを実行します。

- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションによってインストールされないサーバー用の追加ドライバをインストールして設定します。これによって、設置されたサーバーコンポーネントやオプションカードでサポートされた機能が利用できるようになります (たとえば、追加ドライバには、ACPI、ビデオ、ネットワーク、大容量記憶装置などが含まれます)。追加ドライバは、サーバー用の最新の *Tools and Drivers* CD/DVD に用意されていることがあります。
- サーバー上の最新の *Tools and Drivers* CD/DVD に用意されている Oracle 固有のオプションソフトウェアをインストールします。
- Sun Service Tags をインストールします。インストールファイルは OS のインストール時にサーバーに自動的にコピーされますが、正しくインストールするために必ずシステム管理者が実行する必要があります。135 ページの「[Service Tags のインストール](#)」を参照してください。

Linux のインストール

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用してサポート対象の Linux OS をインストールする方法について説明します。このアプリケーションはサポート対象のオペレーティングシステムのインストールを支援するものであるため、タスクを完了するためには、ライセンス製品版の OS 配布メディアが必要になります。

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは、オプションのアクセサリカードやその他のシステムハードウェア用に Oracle によって認定された OS レベルのデバイスドライバが利用できます。Oracle Hardware Installation Assistant を使用すると、オペレーティングシステムをインストールする前に、別のメディアから OS レベルのデバイスドライバを入手する必要があります。

注 - Oracle Hardware Installation Assistant によって提供およびインストールされるシステムおよび OS レベルのデバイスドライバの一覧については、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD 内の `readme.html` ファイルおよび使用するサーバーの「ご使用にあたって」を参照してください。

ローカルまたはリモートメディアを使用して Linux をインストールする場合は、以下の手順を参照してください。

- [43 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して Linux をインストールする方法」](#)

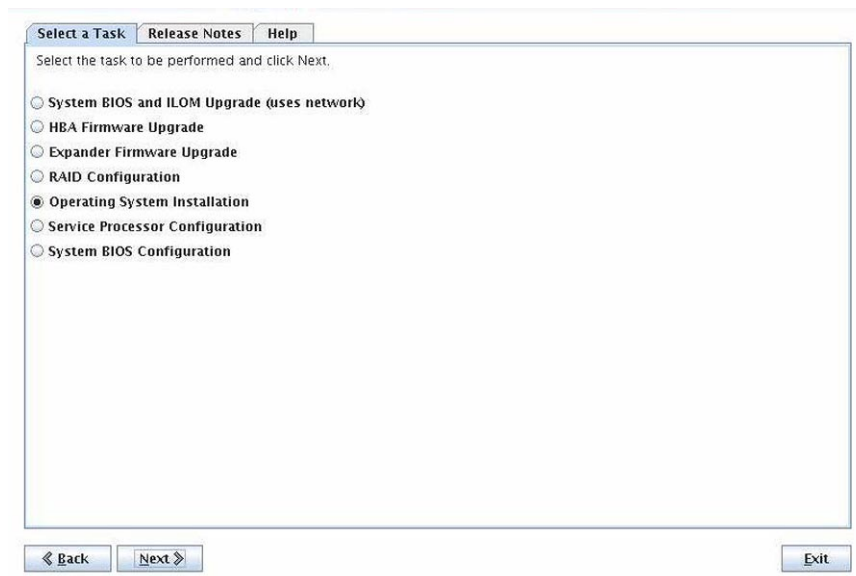
▼ ローカルまたはリモートメディアを使用して **Linux** をインストールする方法

- 始める前に
- サーバーに LSI ベースの RAID コントローラが内蔵されていて、ブートドライブを RAID 構成の一部に含める場合は、オペレーティングシステムをインストールする前に RAID ボリュームを構成する必要があります。[27 ページの「RAID の設定」](#)を参照してください。
 - Sun StorageTek RAID ディスクコントローラ (Adaptec ベース) を使用している場合は、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションからアクセスできるようにするために、Adaptec RAID Configuration Utility を使用してアレイボリュームを構成する必要があります (Adaptec RAID Configuration Utility を利用するに

は、サーバーのブートプロセスでプロンプトが表示されたときに Ctrl-A を押します)。これは、RAID を使用するかどうかに関わらず実行する必要があります。これを行う手順については、使用しているプラットフォームのインストールガイドを参照してください。

- 以下の手順では、ローカル CD/DVD ドライブアクセスを前提としています。ローカルの USB フラッシュドライブを使用する場合 (123 ページの「[USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動](#)」を参照)、または CD-ROM リダイレクトを使用してリモートコンソール (KVM) からアプリケーションを起動する場合は、それに応じて手順を変更してください。

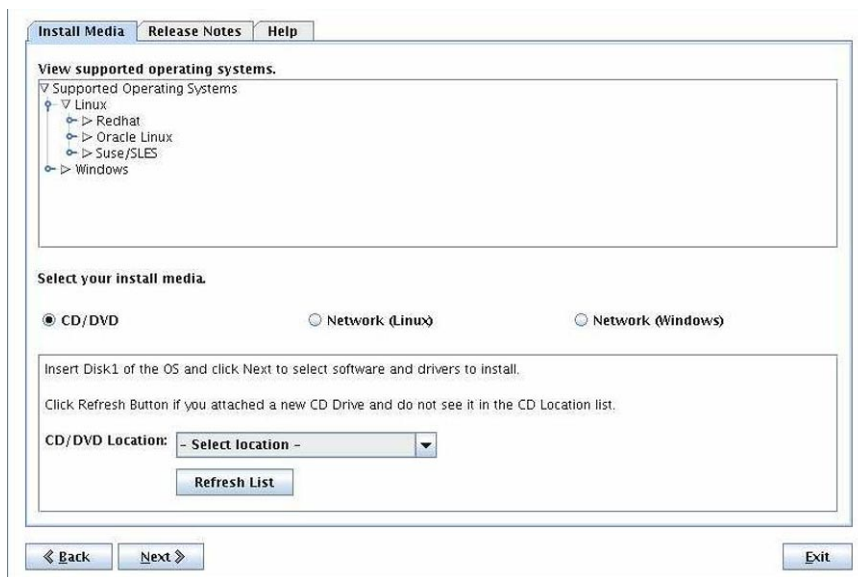
- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。17 ページの「[アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行](#)」を参照してください。



- 2 「Select a Task」画面で「**Operating System Installation**」ラジオボタンを選択します。

注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 3 「Next」をクリックします。
「Install Media Information」画面が表示されます。



- 4 使用する OS のサポート対象バージョンを確認するには、トグルをクリックしてリスト表示を展開します。

注 - Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、サポート対象外のバージョンの OS をインストールすることはできません。

- 5 「Install Media Information」画面で、OS インストールメディアの場所を指定します。次のいずれかのオプションを選択します。
 - **CD/DVD:** このオプションを選択すると、ローカルの CD/DVD、リダイレクト先の CD/DVD、または ISO CD-ROM イメージから OS ソースをインストールすることができます。
 - **Network (Linux):** このオプションを選択すると、Linux システム上のネットワーク共有から OS ソースをインストールすることができます。
 - **Network (Windows):** このオプションを選択すると、Windows システム上のネットワーク共有から OS ソースをインストールすることができます。
- 6 選択したインストールメディアの場所に応じて、次のいずれかの手順を実行します。
 - ローカルの CD/DVD からインストールする場合は、[手順 7](#)に進みます。

- リダイレクト先の CD/DVD または ISO CD-ROM イメージからインストールする場合は、[手順 8](#)に進みます。
 - ネットワークの共有ドライブからインストールする場合は、[手順 9](#)に進みます。
- 7 ローカルの CD/DVD からインストールする場合は、「**Install Media Information**」画面で次の作業を行います。
- a. 「**CD/DVD**」ラジオボタンを選択します。
 - b. 「**CD Location**」ドロップダウンリストからサーバーの CD/DVD ドライブを選択します。
 - c. **Oracle Hardware Installation Assistant** の CD/DVD をドライブから取り出して、OS ディストリビューションの最初の CD をドライブに挿入します。

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションをブートするのに使用した CD/DVD ドライブとは別の CD/DVD ドライブの使用を選択した場合は、Oracle Hardware Installation Assistant によって Linux インストールメディアが認識されないことがあります。そのため、アプリケーションの起動に使用したのと同じドライブに Linux OS メディアを挿入するようにしてください。

- d. 「**Install Media Information**」画面で「**Next**」をクリックします。
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、挿入されたメディアをチェックしてサポート対象のバージョンであることを確認し、「**Identifying Distribution**」画面にその結果を表示します。
 - e. 表示されたリストからオプションカードを選択します。
アプリケーションによって、インストール中にオプションカードのドライバがインストールされます。
 - f. OS のインストーラを起動する場合は、「**Next**」をクリックします。
 - g. [手順 10](#)に進みます。
- 8 **Oracle ILOM** リモートコンソールアプリケーションを使用してリダイレクト先の CD/DVD または ISO CD-ROM イメージからインストールする場合は、「**Install Media Information**」画面で次の作業を行います。
- a. 「**CD/DVD**」ラジオボタンを選択します。
 - b. 「**CD Location**」ドロップダウンリストから仮想 CD-ROM を選択します。

- c. サーバーの **Oracle ILOM** リモートコンソールで、次のいずれかの方法を使用して、**OS** インストールメディア (**CD-ROM** または **CD-ROM Image**) をリダイレクトします。
 - **CD/DVD** ドライブから **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションをブートした場合は、このドライブから **Oracle Hardware Installation Assistant** の **CD** を取り出して、**OS** の最初のディスクをドライブに挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールで、「Devices」メニューから「CD-ROM」オプションを選択します。
 - **ISO CD-ROM** イメージから **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションをブートした場合は、「Devices」メニューで「CD-ROM Image」の選択を解除して **Oracle Hardware Installation Assistant** の **ISO** イメージをアンマウントしてから、「CD-ROM Image」を再度選択して **ISO OS CD-ROM** イメージの場所を指定します。
- d. 完了したら、「**Install Media Information**」画面で「**Next**」をクリックします。

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、挿入されたメディアをチェックしてサポート対象のバージョンであることを確認し、「**Identifying Distribution**」画面にその結果を表示します。
- e. 表示されたリストからオプションカードを選択します。

アプリケーションによって、インストール中にオプションカードのドライバがインストールされます。
- f. **OS** のインストーラを起動する場合は、「**Next**」をクリックします。
- g. **手順 10** に進みます。
- 9 ネットワーク共有ドライブからインストールする場合は、「**Install Media Information**」画面で次の作業を行います。
 - a. 「**Network (Linux)**」ラジオボタンが選択されていることを確認します。
 - b. アドレスバーで、**Linux** の抽出 **ISO** メディアにアクセスするための **http** または **ftp** のネットワークアドレスを指定します (**.iso** ファイルはこの方法には使用できません)。下の表の例を参照してください。

オペレーティングシステムで複数のイメージ (たとえば、**CD1**、**CD2**) を使用する場合に備えて、複数のアドレスフィールドが用意されています。

注 - URL アドレスの中でスペースを使用することはできません。

転送方法	OSソースの場所	入力内容
HTTP	ISOイメージからディレクトリに抽出する内容	OSインストール用の抽出ISOファイルを含むディレクトリへのパス。例： <code>http://hostname_or_IPaddress/extractedISODirectory</code>
FTP	ISOイメージからディレクトリに抽出する内容	OSインストール用の抽出ISOファイルを含むディレクトリへのパス。例： <code>ftp://hostname_or_IPaddress/extractedISODirectory</code>

上記の表で、*hostname_or_IPaddress* はISOイメージを格納するサーバーのホスト名またはIPアドレスのいずれかで、*extractedISODirectory* はLinux OSのインストール用ISOイメージファイルを含むディレクトリです。Linuxの場合は、ISOイメージソースファイルを含むディレクトリへのパスを使用する必要があります (URLパスに個別のファイルを含めることはできません)。

- c. 「Next」をクリックします。
- 10 OSインストーラが起動したら、インストール内容に応じて、次のいずれかを実行します。
 - リダイレクト先のCDまたはISOイメージからLinuxをインストールする場合は、次の手順に進みます。
 - 11 プレインストール環境を使用するLinux OSをインストールする場合は、「Preinstallation Environment」セットアップ画面が表示されます (下図を参照)。プレインストール環境パーティションのブートディスクを選択し、「Next」をクリックします。
インストールするLinuxのバージョンに応じて、「Installing Additional Software」画面が表示される場合があります。Oracle Hardware Installation Assistantアプリケーションによって、追加のソフトウェアやドライバがインストールされます。
 - 12 表示された情報を確認して、エラーがないことを確認します。
インストール中にエラーが発生している場合は、SunInstallationAssistant.logファイルでさらに詳しく調べます。
 - 13 Oracle Hardware Installation Assistantのメディアを取り出して、「Reboot」をクリックします。
OSがインストールされたハードディスクから起動します。表示される画面の指示に従って、OSのセットアップタスクを完了します。

注-ディスク0以外のディスクにOSをインストールする場合は、システムのブート順序を変更して正しいブートディスクを識別する必要があります。これには、システムのBIOSセットアップユーティリティ(ディスクが内蔵のディスクコントローラに接続されている場合)、またはオプションカードのBIOSセットアッププログラム(ディスクがオプションのHBAに接続されている場合)を使用します。使用するシステムまたはオプションカードのドキュメントの手順に従って、ブート順序を設定します。

次の手順 必要に応じて、以下のポストインストールタスクを実行します。

- Linux OS のベンダーの Web サイトから、最新の Linux OS のアップデートおよび修正をダウンロードして、インストールします。
- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションによってインストールされないサーバー用の追加ドライバをインストールして設定します。これによって、設置されたサーバーコンポーネントやオプションカードでサポートされた機能が利用できるようになります(たとえば、追加ドライバには、ACPI、ビデオ、ネットワーク、大容量記憶装置などが含まれます)。追加ドライバは、サーバー用の最新の *Tools and Drivers* CD/DVD に用意されていることがあります。
- サーバー上の最新の *Tools and Drivers* CD/DVD に用意されているサーバー固有のオプションソフトウェアとユーティリティをインストールします。
- Sun Service Tags をインストールします。インストールファイルは OS のインストール時にサーバーに自動的にコピーされますが、正しくインストールするために必ずサーバーのシステム管理者が実行する必要があります。[135 ページ](#)の「[Service Tags のインストール](#)」を参照してください。

システムおよびコンポーネントのファームウェアのアップデート

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、システム BIOS、Oracle ILOM、ディスクコントローラの HBA、およびディスクエクスパンダのファームウェアをアップデートする方法について説明します。

- 51 ページの「システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアのアップデート方法」
- 54 ページの「エクスパンダファームウェアのアップデート方法」
- 56 ページの「HBA ファームウェアのアップデート方法」

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションのファームウェアアップデート機能をサポートする全システムのリストについては、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD の readme.html ファイルと使用しているサーバーの「ご使用にあたって」を参照してください。

▼ システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアのアップデート方法

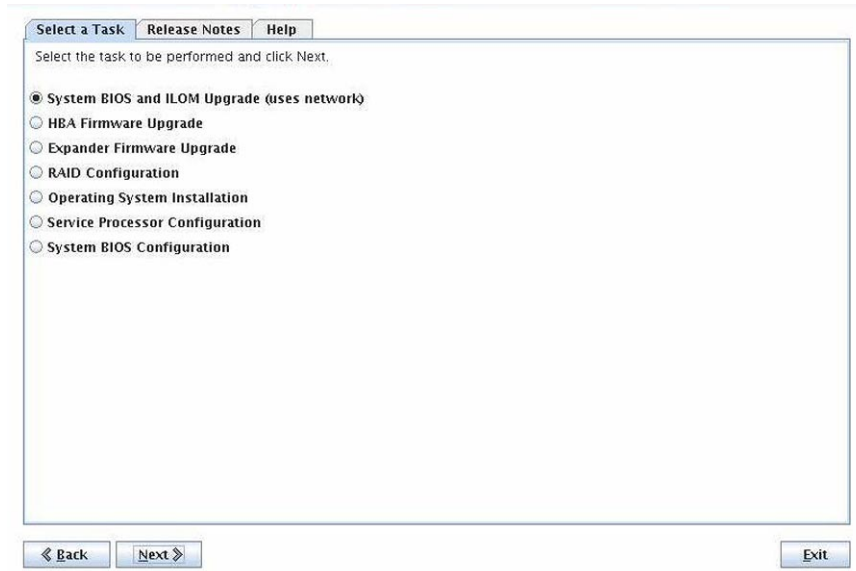
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、システムのファームウェアをアップデートします。

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは、ファームウェアのアップデートのみ行うことができます。ファームウェアのダウングレードは行えません。

始める前に サーバーがその管理ポートにネットワーク経由でアクセス可能である必要があります。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」を参照してください。
「Select a Task」画面が表示されます。

注 - 「Select a Task」画面は、サーバーがOSのインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクがOSのインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。



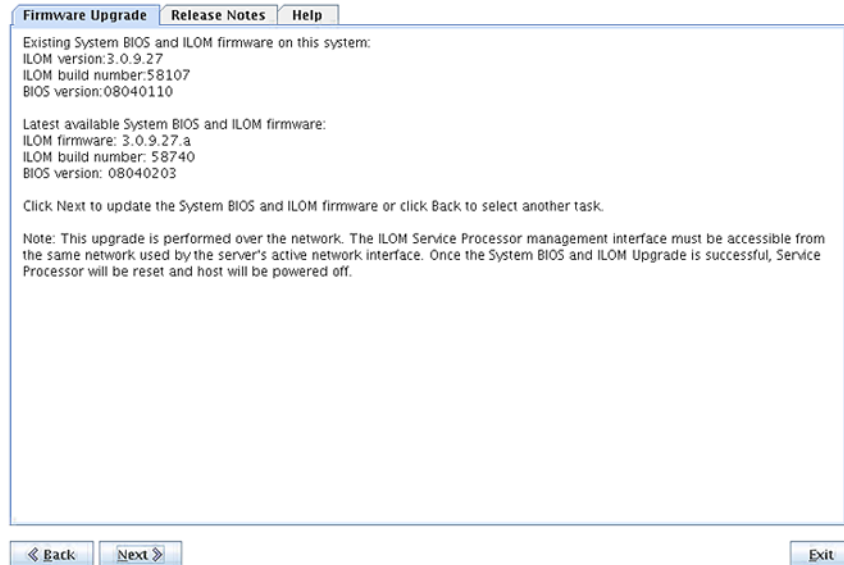
- 2 「Select a Task」画面で、「System BIOS and ILOM Upgrades」ラジオボタンを選択して「Next」をクリックします。

使用しているサーバーで帯域内アップグレード(ネットワークではなく、サーバーの内部回路を使用)をサポートする場合は、「System BIOS and ILOM Upgrades (帯域内インタフェースを使用)」および「System BIOS and ILOM Upgrades (ネットワークインタフェースを使用)」というシステム BIOS と Oracle ILOM のアップグレード用の2つのオプションがタスクリスト内に表示されます。

注 - 帯域内アップデートは、完了するまでに最大で40分かかることがあるため、使用しているサーバーのサービスプロセッサが接続されていない場合、またはネットワーク経由でアクセスできない場合にのみ推奨します。

- 3 サーバーのSPにログイン情報を入力して、「Next」をクリックします。
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは、既存のシステム BIOS と Oracle ILOM の各バージョンを、使用可能な最新バージョンと比較して表示します。

注 - 次のスクリーンショットはその1例です。使用しているサーバーの情報は異なる可能性があります。



注 - 現在のセッション中に Oracle Hardware Installation Assistant Update を実行した場合 (20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」で説明) は、最新の BIOS と Oracle ILOM の各バージョンが Oracle のソフトウェアダウンロードサイトから取得されています。

- 4 システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアをアップデートするには、「Next」をクリックします。
さらに新しいバージョンのコードが存在する場合は、アップデートが開始されます。



注意 - システム BIOS および ILOM のファームウェアが破損する可能性があります。アップデート処理を中断しないでください。この処理は、完了までに最大 10 分かかることがあります。

The System BIOS and ILOM is being updated. This process may take up to 10 minutes to complete. Wait and do not interrupt the update process. The Service Processor will be reset and the host will be powered off upon completion of the update. You will lose contact with the Oracle ILOM Remote Console. You can reconnect after the Service Processor has been updated.

Upgrading System BIOS and ILOM

アップデートが完了すると、SP がリセットされます。Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションとの接続は切断されます。

- 5 アップデートされたファームウェアを使用するには、システムの電源を入れるかまたは再起動します。

- 参照
- 54 ページの「エクспанダファームウェアのアップデート方法」
 - 56 ページの「HBA ファームウェアのアップデート方法」

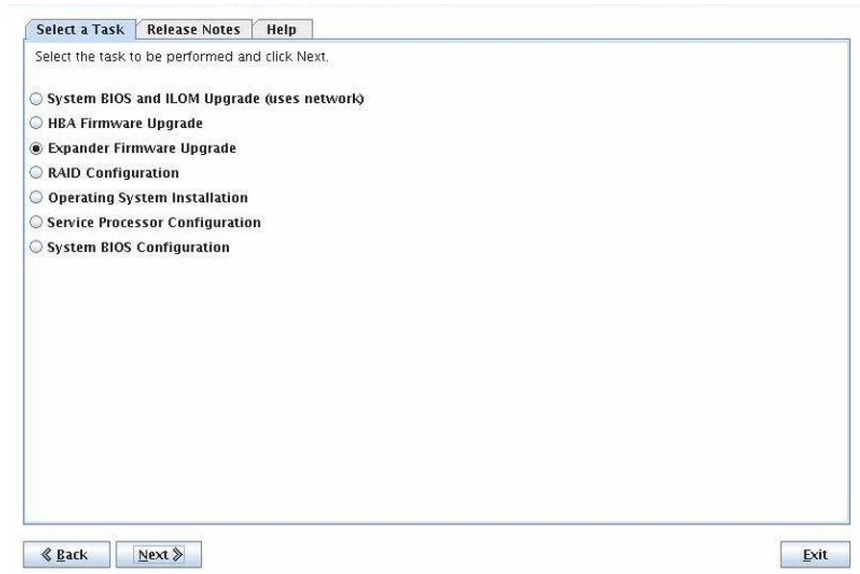
▼ エクспанダファームウェアのアップデート方法

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、サポートされるエクспанダのファームウェアをアップデートします。

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは、ファームウェアのアップデートのみ行うことができます。ファームウェアのダウングレードは行えません。

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動します。17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」を参照してください。

「Select a Task」画面が表示されます。



注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「Expander Firmware Upgrade」ラジオボタンを選択して「Next」をクリックします。

「Expander Firmware Update」画面が表示されます。この画面には、検出されたエクспанダ、それらの現在のファームウェアバージョン、および使用可能なファームウェアバージョンが一覧表示されます。

- 3 アップデートするエクспанダを選択します。
- 4 「Next」をクリックします。
エクспанダファームウェアのアップデート処理が開始されます。
- 5 画面上の指示に従い、アップデートを完了します。

注-アップデートされたコードは、再起動するまで使用されません。

- 参照
- 51 ページの「システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアのアップデート方法」
 - 56 ページの「HBA ファームウェアのアップデート方法」

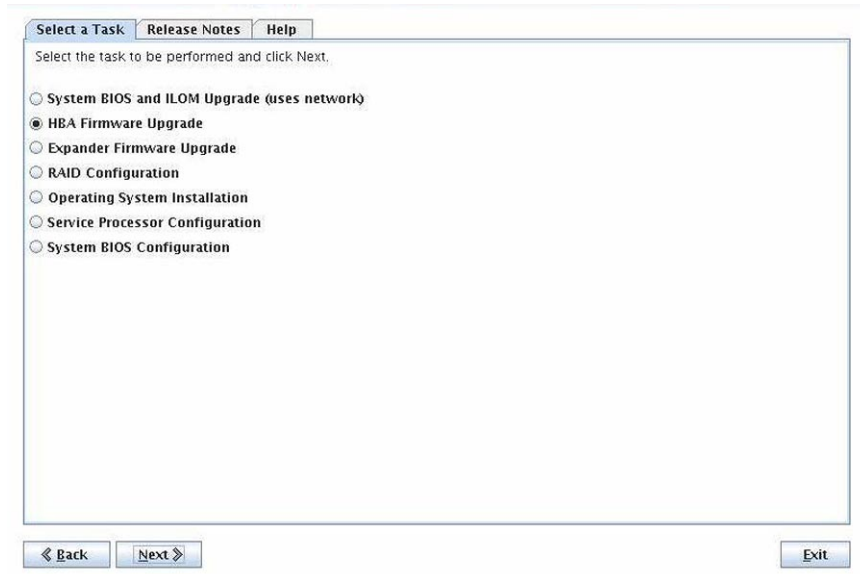
▼ HBA ファームウェアのアップデート方法

ホストバスアダプタ (HBA) は、内蔵ディスクまたはサーバーに接続された外付けディスクを制御します。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、サポートされるアダプタのファームウェアをアップデートします。

注-Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは、ファームウェアのアップデートのみ行うことができます。ファームウェアのダウングレードは行えません。

始める前に Oracle Hardware Installation Assistant の HBA ファームウェアアップデート処理によって、接続されたストレージ上のデータに破損が生じることはありませんが、HBA に接続されたストレージのフルバックアップを作成しておくことを推奨します。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。17 ページの「[アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行](#)」を参照してください。
「Select a Task」画面が表示されます。

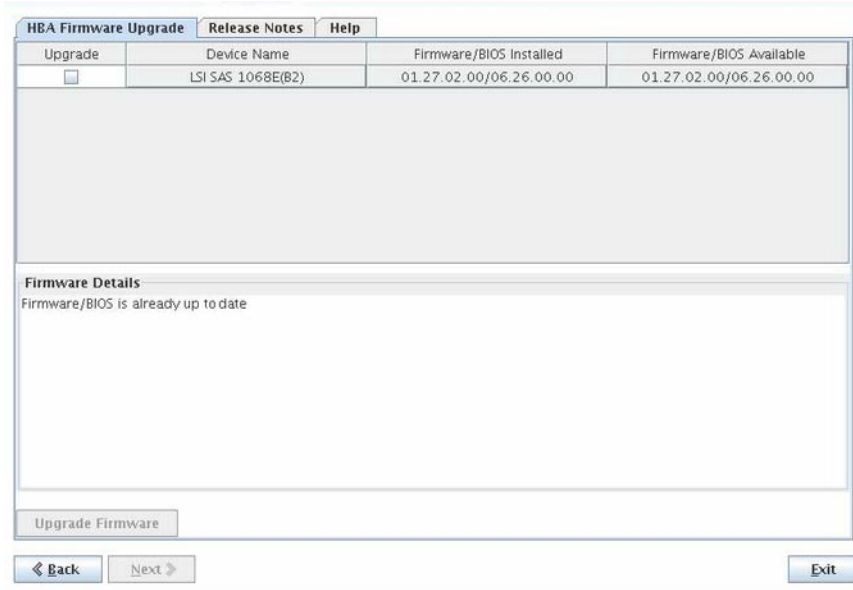


注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「**Select a Task**」画面で、「**HBA Firmware Upgrade**」ラジオボタンをクリックし、「**Next**」をクリックします。

「HBA Firmware Upgrade」画面が表示されます。この画面には、検出されたホストバスアダプタ、現在のファームウェアバージョン、およびアップデート可能なバージョンが一覧表示されます。

注 - 現在のセッション中に Oracle Hardware Installation Assistant Update を実行した場合 (20 ページの「[ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法](#)」で説明) は、ソフトウェアダウンロードサイトからの最新のコードが取得されています。



- 3 「Firmware/BIOS Installed」列と「Firmware/BIOS Available」列に表示された2つのファームウェアバージョンを比較します。
2つバージョンが同じ場合、インストールされているファームウェアは最新です。
- 4 2つのバージョンが異なる場合は、アップデートするホストバスアダプタのチェックボックスをクリックします。

注-マルチコントローラシステムでは、すべてのコントローラを同じファームウェアバージョンにするようにしてください。ただし、ブート用ではないコントローラを最初にアップデートし、機能を確認してからブート用コントローラをアップデートすることを推奨します。

- 5 HBA ファームウェアをアップデートするには、「Upgrade Firmware」ボタンをクリックします。
- 6 画面上の指示に従い、アップデートを完了します。

注-アップデートされたコードは、再起動するまで使用されません。

- 参照
- 51 ページの「システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアのアップデート方法」
 - 54 ページの「エクспанダファームウェアのアップデート方法」

サービスプロセッサの回復

注 - この機能はサーバーによっては実行できません。

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、破損しているかまたはアクセスできないサービスプロセッサ (SP) を回復する方法について説明します。SP の回復には、次の2つの手順のプロセスがあります。

1. SP ファームウェアの回復 (SP へのアクセスを回復するため)
2. システム BIOS と Oracle ILOM のファームウェアのアップデート (システム BIOS と Oracle ILOM のコードをサポートされるレベルまでアップデートするため)

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの SP の回復機能をサポートする全システムのリストについては、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD の `readme.html` ファイルと使用しているサーバーの「ご使用にあたって」を参照してください。

次の手順を使用して SP を回復します。

- [59 ページの「サービスプロセッサの回復方法」](#)

▼ サービスプロセッサの回復方法

注 - この機能はサーバーによっては実行できません。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。[17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」](#)を参照してください。「Select a Task」画面が表示されます。

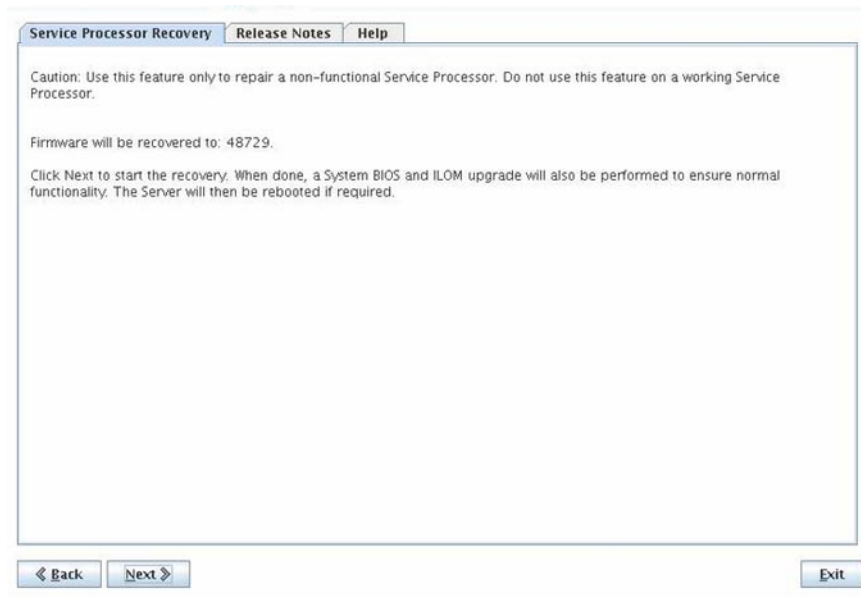
注 - 「Select a Task」画面は、サーバーがOSのインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクがOSのインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Task Selection」画面で、「SP Recovery」タスクを選択して「Next」をクリックします。

「Service Processor Recovery」画面が表示されます。



注意 - この機能は、機能している(動作中の)SPに対しては使用しないでください。このタスクは、機能していないサービスプロセッサを修復するためにのみ使用してください。



- 3 「Service Processor Recovery」画面で、「Next」をクリックして回復を開始します。
- 4 画面上の指示に従って回復を完了します。
回復ウィザードによって、次の2つの手順のプロセスを実行できます。
 - 最初の手順では、サービスプロセッサを回復します。この処理は最大で20分かかる場合があります。

- 2番目の手順では、システム BIOS と Oracle ILOM のアップデートを実行し、システムファームウェアをサポートされているリビジョンにアップグレードします。

次の手順 [51 ページの「システム BIOS および Oracle ILOM のファームウェアのアップデート方法」](#)

サービスプロセッサの設定の構成

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して、Oracle ILOM の識別情報、ネットワーク情報、ユーザーアカウント、システムクロックなど、サービスプロセッサの設定の特定のセットを構成および管理する方法について説明します。

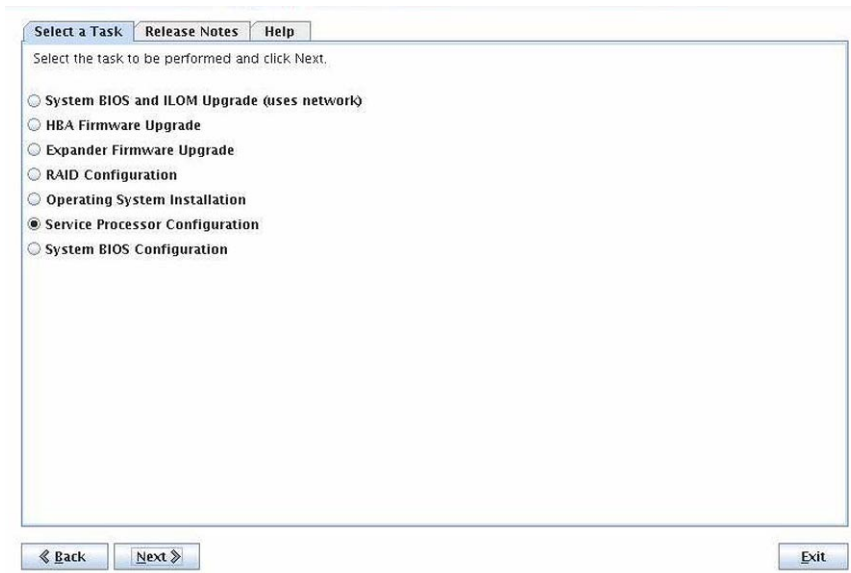
ここで説明する手順の具体的な内容は次のとおりです。

- 64 ページの「サービスプロセッサ識別情報の設定の構成方法」
- 67 ページの「ネットワーク情報の設定の構成方法」
- 70 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理方法」
- 73 ページの「システムクロックの設定方法」

▼ サービスプロセッサ識別情報の設定の構成方法

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して **Oracle Hardware Installation Assistant** を起動する方法」を参照してください。

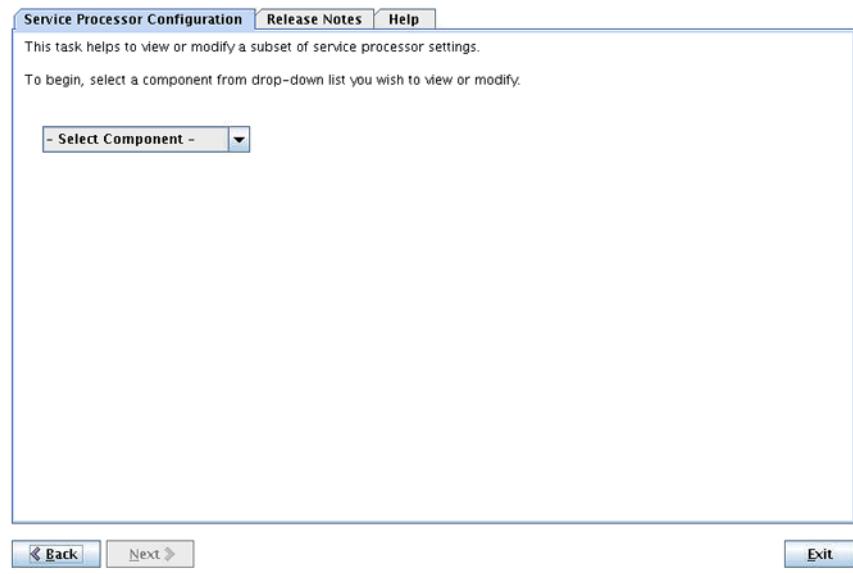
「Select a Task」画面が表示されます。



注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「Service Processor Configuration」を選択して、「Next」をクリックします。

「Service Processor Configuration」画面が表示されます。



- ドロップダウンリストから、「**Identification Information**」を選択します。
SP 識別情報のフィールドが表示されます。

The screenshot shows a web-based configuration interface for a Service Processor. At the top, there are three tabs: "Service Processor Configuration" (selected), "Release Notes", and "Help". Below the tabs, a message states: "Identification Information panel helps to view or modify identification settings for the service processor. Click Save for the modified values to be applied." A dropdown menu is set to "Identification Information". Below this, there are four input fields: "SP Hostname" with a text box containing "Hostname", "SP System Contact" with a text box containing "Contact", "SP System Location" with a text box containing "Location", and "SP System Identifier" with a text box containing "identifier". A "Save" button is located below the input fields. At the bottom of the window, there are three buttons: "Back", "Next", and "Exit".

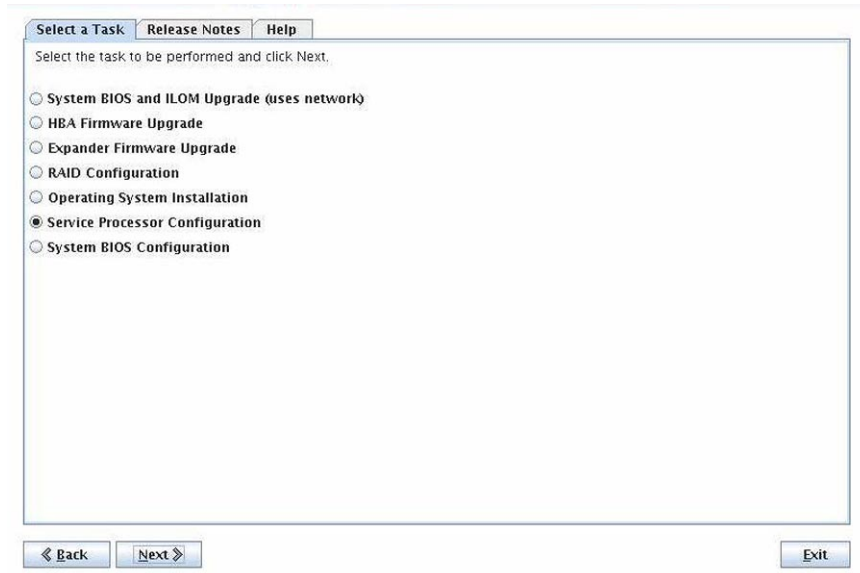
- 適切なフィールドに、次の **Oracle ILOM** 設定の情報を入力します。
 - **SP Hostname:** ホスト名を入力します。ホスト名はアルファベットで始める必要があり、長さは60文字以下、使用できる文字は英数字、ハイフン、アンダースコアのみです。
 - **SP System Contact:** 連絡先担当者の名前を入力します。引用符以外のすべての文字を使用できます。
 - **SP System Location:** システムの物理的な場所の名前を入力します。引用符以外のすべての文字を使用できます。
 - **SP System Identifier:** システムを識別する名前を入力します。引用符以外のすべての文字を使用できます。
- 情報を保持するには、「**Save**」をクリックします。
- アプリケーションを終了するには、「**Exit**」をクリックします。続けて他のプロビジョニングタスクを実行するには、「**Back**」をクリックします。

- 参照
- 67 ページの「ネットワーク情報の設定の構成方法」
 - 70 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理方法」
 - 73 ページの「システムクロックの設定方法」

▼ ネットワーク情報の設定の構成方法

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して **Oracle Hardware Installation Assistant** を起動する方法」を参照してください。

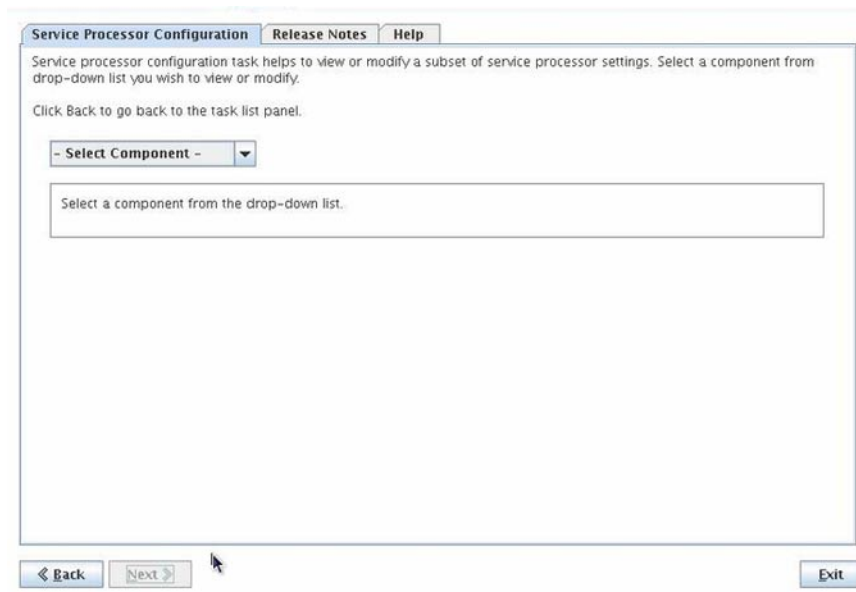
「Select a Task」画面が表示されます。



注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「Service Processor Configuration」を選択して、「next」をクリックします。

「Service Processor Configuration」画面が表示されます。



- ドロップダウンリストから、「**Network Information**」を選択します。
「Network Configuration」のフィールドが表示されます。

The screenshot shows a web-based configuration interface for a Service Processor. At the top, there are tabs for 'Service Processor Configuration', 'Release Notes', and 'Help'. Below the tabs, a message states: 'Network Configuration panel helps to view or modify network settings for the service processor. Click Save for the modified values to be applied.' A dropdown menu is set to 'Network Configuration'. The main configuration area contains the following fields:

IP Discovery Mode:	<input checked="" type="radio"/> DHCP	<input type="radio"/> Static
IP Address:	<input type="text" value="10.60.42.145"/>	
Netmask:	<input type="text" value="255.255.252.0"/>	
Gateway:	<input type="text" value="10.60.40.1"/>	

Below the fields is a 'Save' button. At the bottom of the window, there are 'Back', 'Next', and 'Exit' buttons.

- 適切なフィールドに、次の **Oracle ILOM** 設定の情報を入力します。
 - **IP Discovery Mode:** システムが DHCP または静的 IP 割り当てのどちらを使用するかを、適切なボタンをクリックして選択します。
 - **IP Address:** 静的 IP 割り当てを選択した場合は、SP の IP アドレスを指定します。
 - **Netmask:** 静的 IP 割り当てを選択した場合は、SP のネットマスクを指定します。
 - **Gateway:** 静的 IP 割り当てを選択した場合は、SP のゲートウェイアドレスを指定します。
- 情報を保持するには、「**Save**」をクリックします。
- アプリケーションを終了するには、「**Exit**」をクリックします。続けて他のプロビジョニングタスクを実行するには、「**Back**」をクリックします。

- 参照
- 64 ページの「サービスプロセッサ識別情報の設定の構成方法」
 - 70 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理方法」
 - 73 ページの「システムクロックの設定方法」

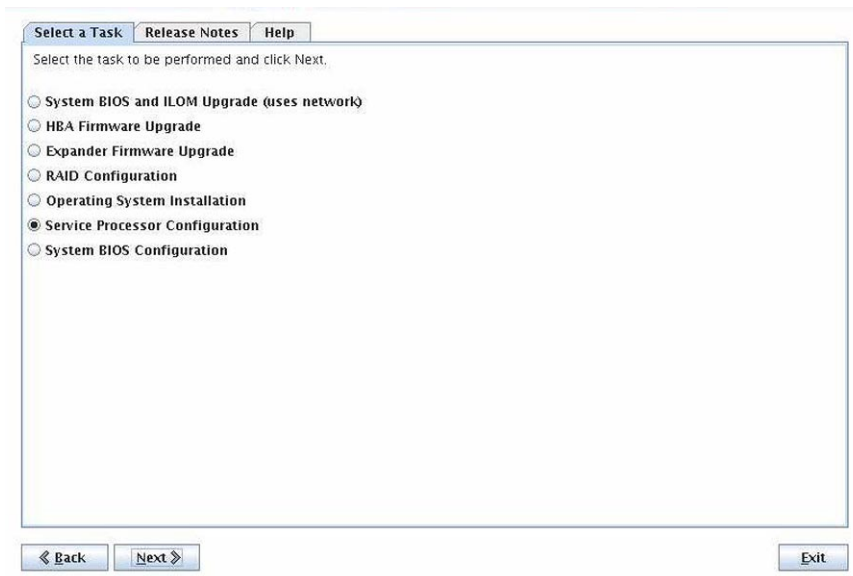
▼ Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理方法

「User Accounts」画面では、Oracle ILOM のユーザーを管理できます。以下のことを行うことができます。

- ユーザーを追加する。
- ユーザーの役割と特権を変更する。
- ユーザーを削除する。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。[20 ページ](#)の「ローカルまたはリモートメディアを使用して **Oracle Hardware Installation Assistant** を起動する方法」を参照してください。

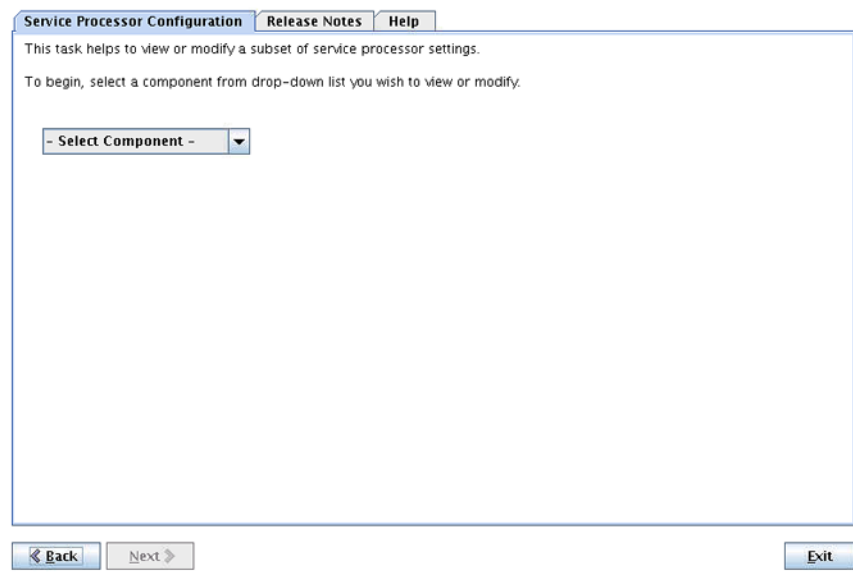
「Select a Task」画面が表示されます。



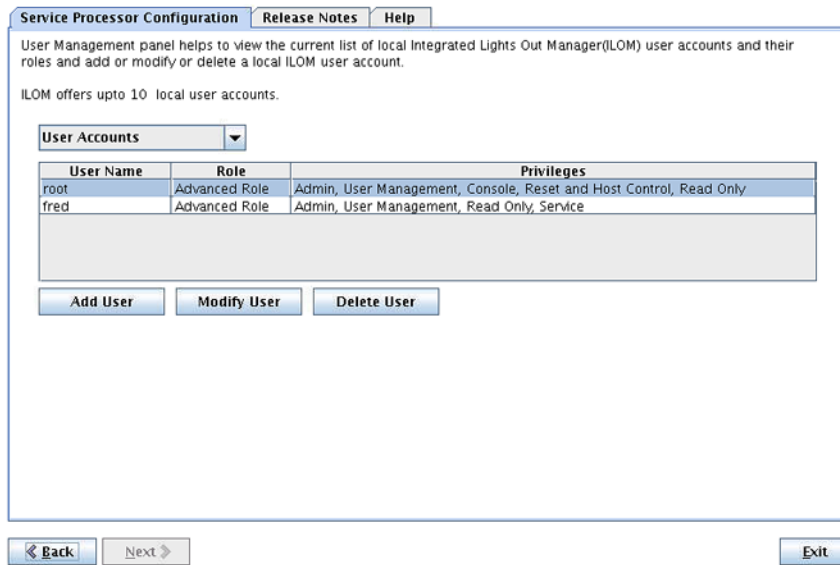
注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「Service Processor Configuration」を選択して、「next」をクリックします。

「Service Processor Configuration」画面が表示されます。



- 3 ドロップダウンリストから「User Accounts」を選択します。
「User Accounts」画面が表示されます。



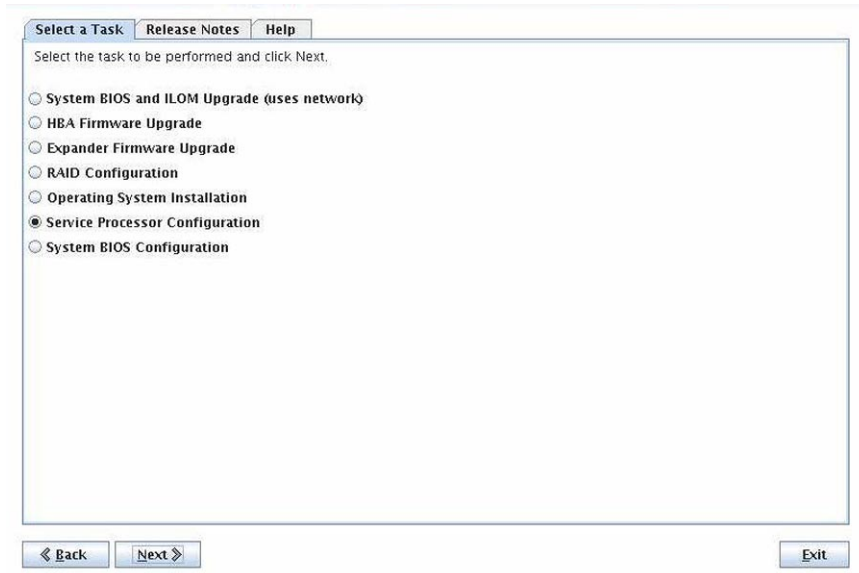
- 4 ユーザーアカウントを管理するには、以下から1つ以上の処理を実行します。
- ユーザーを追加するには、「Add User」をクリックします。
固有のユーザー名を入力し、役割(「Basic」または「Advanced」)をドロップダウンリストから選択し、特権を設定し、パスワードを入力します。
-
- 注-ユーザーの最大数は10です。
- 既存のユーザーを変更するには、リストからユーザーを選択して、「Modify User」をクリックします。
役割、特権、およびパスワードを変更できます。
 - ユーザーを削除するには、リストからユーザーを選択して、「Delete User」をクリックします。
- 5 アプリケーションを終了するには、「Exit」をクリックします。続けて他のプロビジョニングタスクを実行するには、「Back」をクリックします。

- 参照
- 64 ページの「サービスプロセッサ識別情報の設定の構成方法」
 - 67 ページの「ネットワーク情報の設定の構成方法」
 - 73 ページの「システムクロックの設定方法」

▼ システムクロックの設定方法

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して **Oracle Hardware Installation Assistant** を起動する方法」を参照してください。

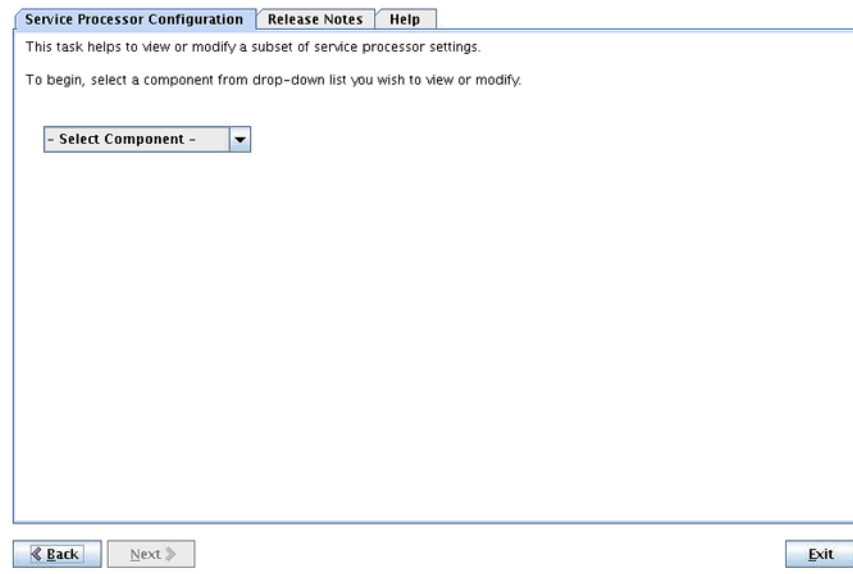
「Select a Task」画面が表示されます。



注 - 「Select a Task」画面は、サーバーが OS のインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクが OS のインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「Service Processor Configuration」を選択して、「next」をクリックします。

「Service Processor Configuration」画面が表示されます。



- ドロップダウンリストから「Clock Settings」を選択します。
「Clock Settings」画面が表示されます。

Service Processor Configuration | Release Notes | Help

Clock Settings panel helps to view or modify service processor clock. To set the service processor clock manually, select month, day, year, hour and minute from drop-down lists. To synchronize the Service Processor clock with an NTP server, select the Enable check box, then type the addresses of the NTP servers to use. To modify the timezone, select a timezone from the drop-down list. Click Save for the modified values to be applied.

Clock Settings

Current Date and Time: Tue Nov 23 06:18:01 2010 EST

Date: Nov 23 2010

Time: 06 18

Timezone: America/New_York

Synchronize Time Using NTP: Enabled

Server 1: 0.0.0.0

Server 2: 0.0.0.0

Save

Back Next Exit

- 以下から1つ以上の処理を実行します。

注 - 「Synchronize Time Using NTP」チェックボックスが選択されている場合は、「Date」、「Time」、および「Timezone」の各フィールドは変更できません。

- 日付を設定するには、次の形式で日付を入力します。
mm/dd/yyyy
mm は月、*dd* は日、*yyyy* は年です。
 - 時刻を設定するには、ドロップダウンリストから時と分を選択します。
 - タイムゾーンを設定するには、ドロップダウンリストからサーバーのタイムゾーンを選択します。
 - NTPサーバーを使用して時刻を設定および同期するには、「Synchronize Time Using NTP Enabled」チェックボックスを選択し、NTPサーバーのIPアドレスを指定します。
- 変更を保持するには、「Save」をクリックします。

- 6 アプリケーションを終了するには、「Exit」をクリックします。続けて他のプロビジョニングタスクを実行するには、「Back」をクリックします。

- 参照
- 64 ページの「サービスプロセッサ識別情報の設定の構成方法」
 - 67 ページの「ネットワーク情報の設定の構成方法」
 - 70 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理方法」

BIOS ブートデバイスの設定の構成

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの BIOS 構成の設定を使用して、BIOS ブートデバイスの設定を構成する方法について説明します。システムブートデバイスの順序または一時的な 1 回限りのブートデバイスを設定できます。階層リストで順序の設定を調整することで、システム内にあるブート可能デバイスの優先順位を指定できます。次回のブート時のブートデバイスを設定すると、いずれかのブートデバイスオプションを選択し、一時的な 1 回限りのブートのためにブート順序を無効にできます。

注-ブートデバイスの順序は不揮発性です。バッテリーでバックアップされた CMOS ストレージ内に存在するので、再起動したり電源を入れ直したりしても保持されません。ただし、システムバッテリーで障害が発生した場合、またはバッテリーを交換した場合は、保持されません。

このセクションでは次のタスクについて説明します。

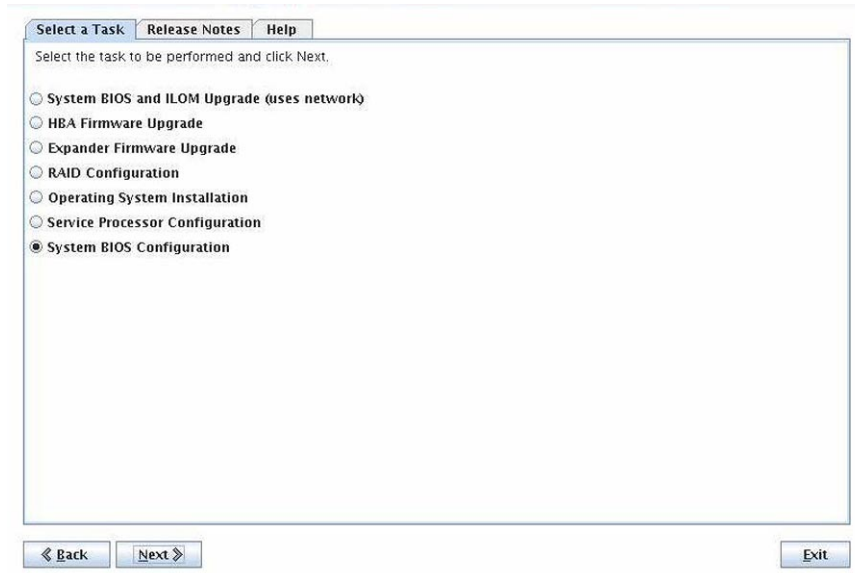
- [77 ページの「ブートデバイスの順序を設定する方法」](#)
- [80 ページの「次回のブート時のブートデバイスを設定する方法」](#)

▼ ブートデバイスの順序を設定する方法

ブートデバイスの順序の設定では、階層リストで順序の設定を調整し、システム内にあるブート可能デバイスの優先順位を指定できます。目的のブート優先順位に従って、デバイスを調整できます。リストの先頭に配置されたデバイスが、最優先のデバイスになります。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを起動します。20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して **Oracle Hardware Installation Assistant** を起動する方法」を参照してください。

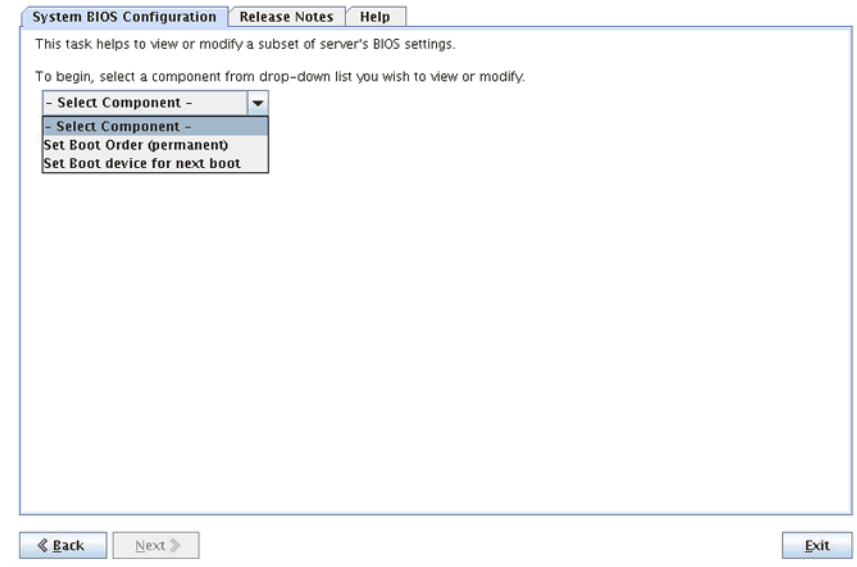
「Select a Task」画面が表示されます。



注 - 「Select a Task」画面は、サーバーがOSのインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクがOSのインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「System BIOS Configuration」を選択して、「Next」をクリックします。

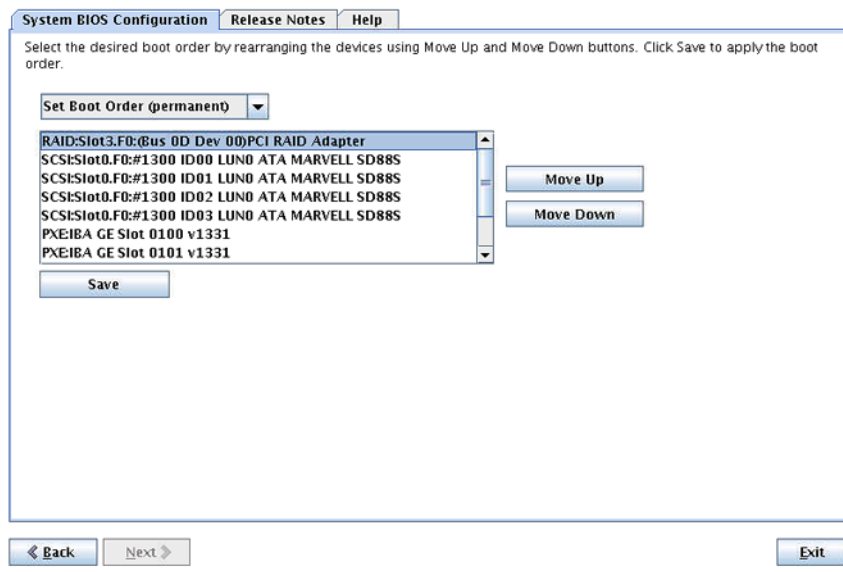
「System BIOS Configuration」画面が表示されます。



- 3 ドロップダウンリストから「Set Boot Order (Permanent)」を選択し、「Next」をクリックします。

「Set Boot Order (Permanent)」画面が表示されます。サーバーに接続されているブート可能デバイスのリストが表示されます。

- 4 目的のブート優先順位に従ってデバイスを調整するには、デバイスを選択し、「Move Up」または「Move Down」ボタンをクリックして、リスト内で上または下に移動します。



- 5 ブート順序リストを保持するには、「Save」をクリックします。ブート優先順位リストは次のシステム起動時に有効になります。
- 6 アプリケーションを終了するには、「Exit」をクリックします。続けて他のプロビジョニングタスクを実行するには、「Back」をクリックします。

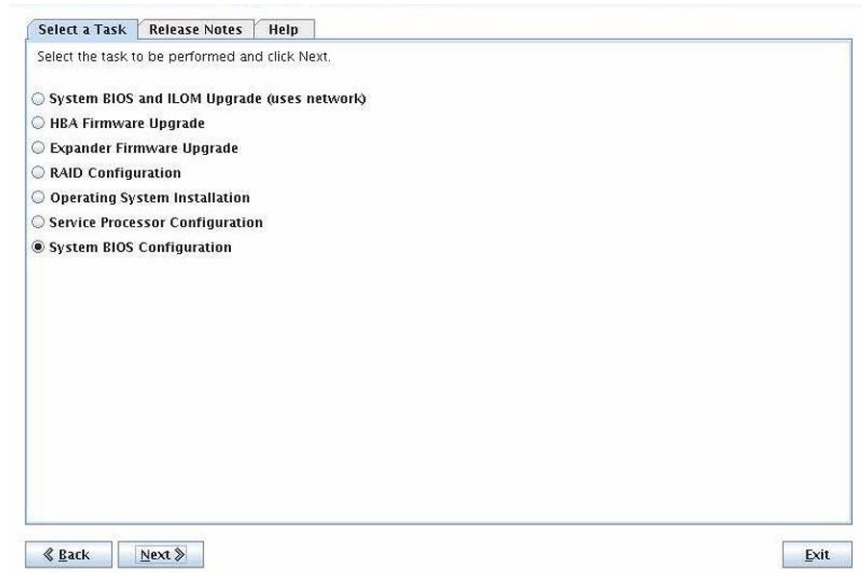
参照 80 ページの「[次回のブート時のブートデバイスを設定する方法](#)」

▼ 次回のブート時のブートデバイスを設定する方法

次回のブート時のブートデバイスの設定では、既定のブートデバイスリストを無効にして、次回のブートだけに使用する 1 回限りのブートデバイスを選択できます。

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動します。20 ページの「ローカルまたはリモートメディアを使用して Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」を参照してください。

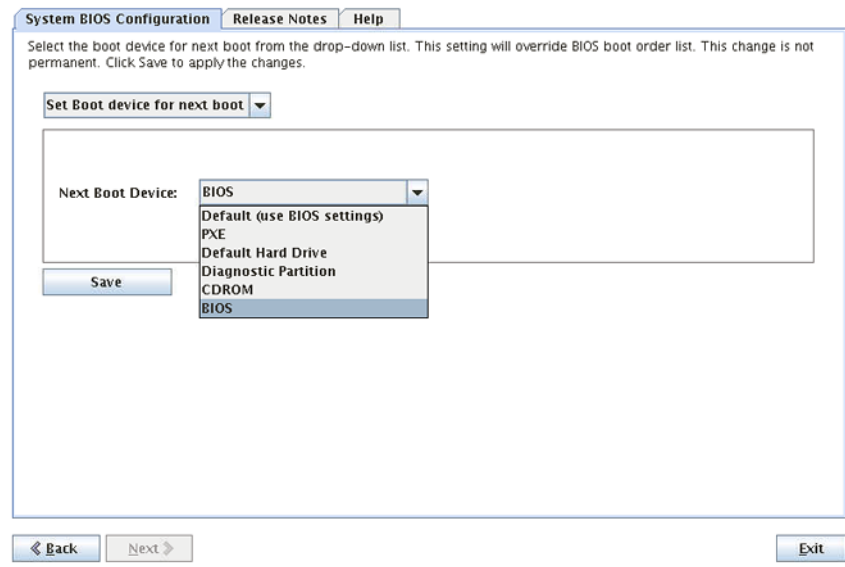
「Select a Task」画面が表示されます。



注 - 「Select a Task」画面は、サーバーがOSのインストール以外のタスクをサポートする場合にのみ表示されます。実行できるタスクがOSのインストールだけの場合は表示されません。また、「Select a Task」画面には、サーバーでサポートされているタスクオプションのみが表示されます。

- 2 「Select a Task」画面で、「BIOS Configuration」を選択して、「Next」をクリックします。
「BIOS Configuration」画面が表示されます。
- 3 ドロップダウンリストから、「Set Next Boot Device」を選択します。
「Next Boot Device」ドロップダウンリストが表示されます。

- 4 「Next Boot Device」 ドロップダウンリストから、ブートするデバイスを選択します。



ドロップダウンリストには、次のブートオプションが含まれます。

- **Default (use BIOS settings):** BIOS セットアップユーティリティで定義されているブート順序のリストを使用します。
 - **PXE:** ネットワークサーバーからブートします。
 - **Default Hard Drive:** ハードウェアのセットアップに基づき標準のドライブをブートします。
 - **Diagnostic Partition:** 標準ドライブにセットアップされている診断領域でブートします。
 - **CD-ROM:** システムの CD/DVD ドライブまたは接続されている USB CD/DVD ドライブからブートします。
 - **BIOS:** BIOS セットアップユーティリティでブートします。
- 5 選択を保持するには、「Save」をクリックします。
 - 6 アプリケーションを終了するには、「Exit」をクリックします。続けて他のプロビジョニングタスクを実行するには、「Back」をクリックします。

参照 77 ページの「ブートデバイスの順序を設定する方法」

PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ

PXE (Preboot Execution Environment) を使用して、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションをネットワークから起動できます。さらに、PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant セッションを、有人モードまたは無人モードで起動できます。PXE の基本的なセットアップは、どちらのモードでも同じです。

このセクションでは、PXE の基本的なセットアップに関する次の項目について説明します。

- [83 ページの「PXE インフラストラクチャのセットアップ方法」](#)
- [84 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルの準備」](#)

▼ PXE インフラストラクチャのセットアップ方法

- IT 部門またはデータセンターの要件およびニーズに従って、PXE インフラストラクチャをセットアップします。

Linux ベースの PXE 環境の基本的なセットアップには、以下の作業が含まれます。

- DHCP サーバーのセットアップ
- ブートイメージまたはインストールイメージ、あるいはその両方での TFTP サーバーのセットアップ
- クライアントをブートイメージまたはインストールイメージに誘導する適切な PXE 構成ファイルの変更

Linux PXE 環境のセットアップに関する詳細な説明については、Linux のドキュメントを参照してください。

次の手順 [84 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルの準備」](#)

Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルの準備

有人インストールを準備するには、以下の Oracle Hardware Installation Assistant PXE ファイルが TFTP サーバーで利用できる必要があります。

- vmlinuz (Linux ブートカーネル)
- netboot.img (Oracle Hardware Installation Assistant ブートイメージ)
- Version (Oracle Hardware Installation Assistant netboot に関するバージョン情報)
- sample_pxe.cfg (pxelinux.cfg ファイルに挿入するサンプルコード)

これらのファイルは、HIA_netboot.zip という名前の圧縮されたファイルとしてダウンロードできます。このファイルをダウンロードして、TFTP サーバーに展開できます。また、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD にもこれらのファイルが収められています。Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD を使用して HIA_netboot.zip ファイルを作成してから、TFTP サーバーに展開することもできます。Windows システムを使用している場合、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションはこのタスクを実行するための固有の自動実行ユーティリティを備えています。

このセクションでは、ファイルの準備に関して両方の方法について説明します。

- 84 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルをダウンロードする方法」
- 85 ページの「DVD を使用して Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルを作成する方法」
- 85 ページの「Windows システムで Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルを作成する方法」

▼ Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルをダウンロードする方法

- 1 HIA_netboot.zip イメージファイルを Oracle の次の Web サイトからダウンロードします。
<http://support.oracle.com/>
- 2 ファイルを取得したら、.zip ファイルを TFTP サーバーの適切なディレクトリに展開します。

- 次の手順
- 85 ページの「DVD を使用して Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルを作成する方法」
 - 85 ページの「Windows システムで Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルを作成する方法」

▼ DVD を使用して Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルを作成する方法

以下の手順に従って、Linux システムで Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD を使用して HIA_netboot.zip ファイルを作成します。

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD をマウントします。
- 2 コマンドラインから、CD/DVD のルートに移動します。
- 3 CD/DVD のルートから、次のスクリプトファイルを実行します。

```
# ./generate-netboot.img.sh -o /tmp/HIA_netboot.zip
```

プロンプトに従って、HIA_netboot.zip ファイルを作成します。
- 4 .zip ファイルを TFTP サーバーの適切なディレクトリに展開します。

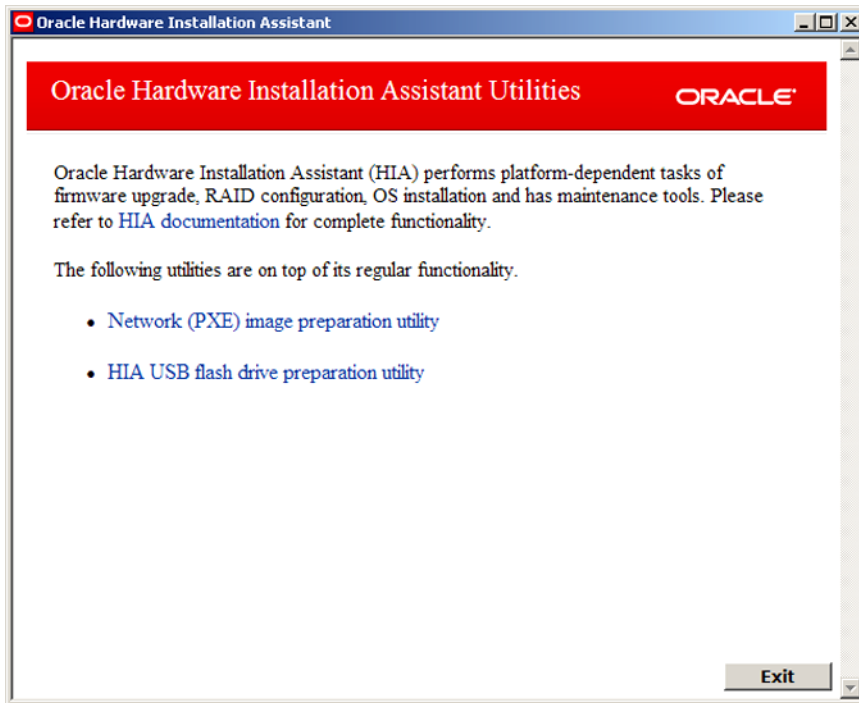
- 次の手順
- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを有人モードで起動する方法については、89 ページの「PXE ベースの有人セッションの起動」を参照してください。
 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを無人モードで起動する方法については、93 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行」を参照してください。

▼ Windows システムで Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルを作成する方法

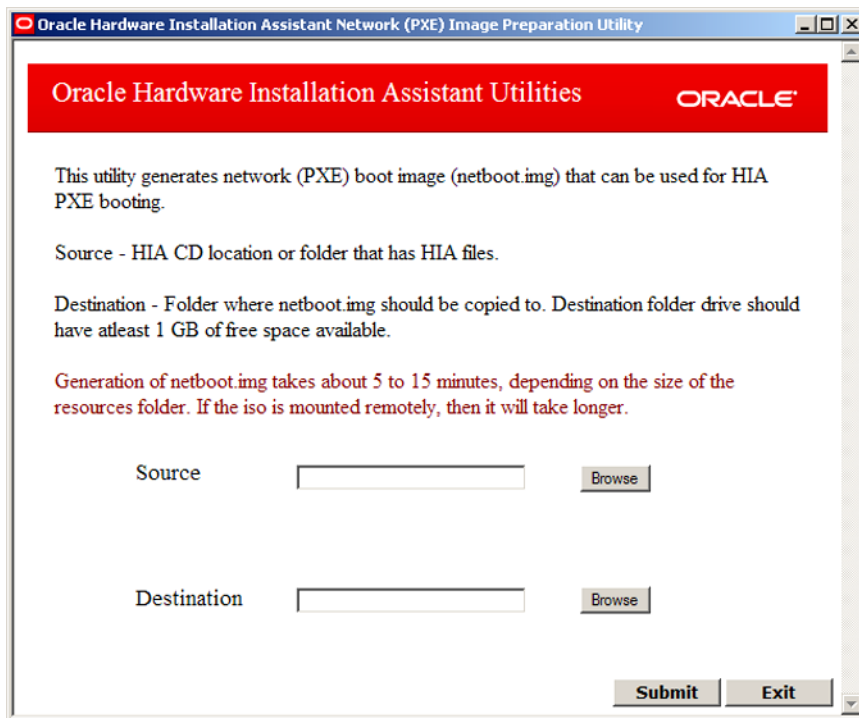
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、netboot.img ファイルの作成を補助する自動実行ユーティリティを備えています。自動実行ユーティリティを使用するには、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD または CD/DVD ISO イメージをマウントします。

- 始める前に
- 84 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルをダウンロードする方法」を参照してください。

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD をマウントします。
自動実行ユーティリティの初期画面が表示されます。



- 2 「Network (PXE) image preparation utility」 オプションをクリックします。
自動実行 PXE 準備ユーティリティが表示されます。



- 3 Oracle Hardware Installation Assistant ファイルのソースパスを参照または入力します (CD/DVD またはフォルダ)。
- 4 netboot.img ファイルの出力先パスを参照または入力します。

注 - 出力先フォルダには 1 GB 以上の空き領域が必要です。

- 5 「Submit」をクリックして、netboot.img ファイルを生成します。

注 - netboot.img ファイルの生成には 15 分ほどかかる場合があります。ISO ファイルがリモートでマウントされている場合は、さらに長くかかることがあります。

- 次の手順
- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを有人モードで起動する方法については、89 ページの「PXE ベースの有人セッションの起動」を参照してください。

- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを無人モードで起動する方法については、[93 ページ](#)の「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行」を参照してください。

PXE ベースの有人セッションの起動

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの PXE ベースイメージを使用して、OS のインストールやファームウェアのアップデートなどのプロビジョニングタスクを実行する方法について説明します。このセクションの内容は、PXE に精通したユーザーを対象としています。

このセクションでは、次の項目について説明します。それぞれのインストールに関連する項目を参照してください。

- [89 ページの「PXE ベースの有人セッションの概要」](#)
- [89 ページの「PXE ベースセッションのイメージを作成する方法」](#)
- [90 ページの「PXE サーバーから有人インストールを実行する方法」](#)

PXE ベースの有人セッションの概要

Oracle Hardware Installation Assistant は、Linux ベースの PXE サーバーから起動できる Linux ベースのアプリケーションです。Linux ベースの PXE サーバー上に Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションイメージを作成し、そのアプリケーションを起動して、有人または無人モードでインストールタスクを実行することができます。

無人モードの場合、プロビジョニングタスクはスクリプトファイルを使用して実行されるため表示されません。また、ユーザーとの対話処理は必要ありません。有人モードの場合、ローカルメディアやリモートメディアから起動したときと同じように、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの対話型ユーザーインターフェイスを使用してプロビジョニングタスクが実行されます。

▼ PXE ベースセッションのイメージを作成する方法

ここでは、有人モードの PXE ブート用のアプリケーションイメージファイルを作成する方法について説明します。

始める前に [PXE インフラストラクチャをセットアップして、イメージファイルを準備します。](#)
[83 ページの「PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ」](#)を参照してください。

- 1 PXETFTP サーバーで、**Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションイメージ用のサブディレクトリを新しく作成します。
たとえば、次のコマンドラインを使用すると、TFTP サーバーのデフォルトルートに Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションイメージを格納するためのサブディレクトリが作成されます。

```
# mkdir /var/lib/tftpboot/HIA
```
- 2 **HIA_netboot.zip** の内容を **Oracle Hardware Installation Assistant** イメージ用に作成した TFTP サーバー上のサブディレクトリに展開します。
- 3 エディタを使用して PXE 設定ファイル(このファイルのデフォルト名は **pxelinux.cfg**) を編集し、**Oracle Hardware Installation Assistant** イメージに対する必要な参照を追加します。
sample-pxe.cfg ファイルの例を参照してください。それぞれのセットアップに応じて変更してください。

次の手順 Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションイメージを PXE 環境からブートするには、[90 ページの「PXE サーバーから有人インストールを実行する方法」](#)の手順を実行します。

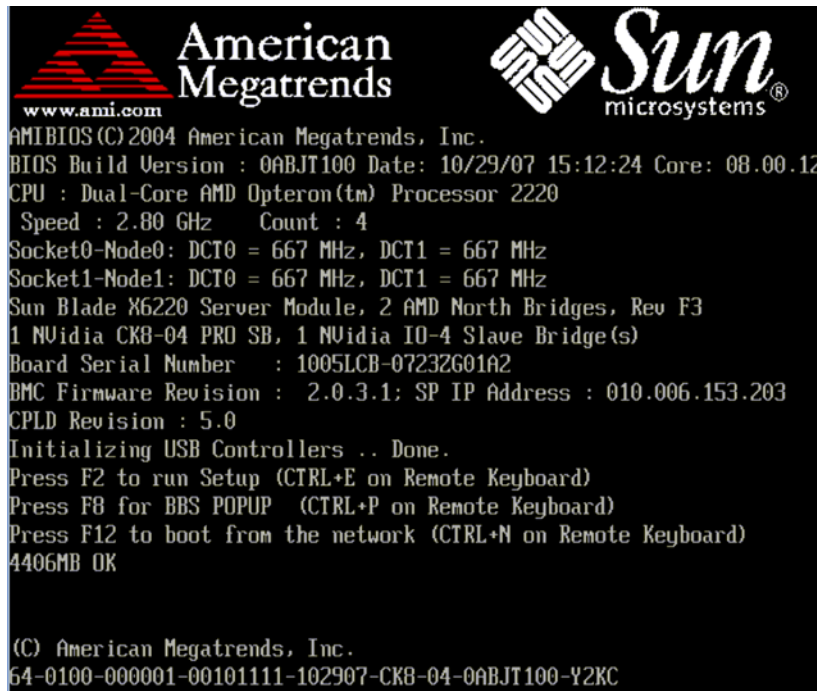
▼ PXE サーバーから有人インストールを実行する方法

以下では、PXE の Linux ベースのサーバーから Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動する初期の手順について説明します。

注 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションファイルは Linux ベースであるため、Linux PXE 環境から起動するように構成する必要があります。ただし、Linux ベースの PXE 環境から起動する場合でも、このアプリケーションはネットワーク経由でアクセス可能な配布メディア (CD または ISO イメージ) からの Windows または Linux のインストールをサポートしています。

- 始める前に
- [89 ページの「PXE ベースセッションのイメージを作成する方法」](#) を参照してください。
 - ターゲットサーバーが PXE ブート環境を用いて構成されたネットワークに接続されていることを確認します。
 - サーバーはブートメッセージと POST メッセージを表示するようにセットアップする必要があります。
- 1 サーバーを再起動します。
ブートメッセージと POST メッセージが表示されます。

ヒント-次のイベントは、すぐに発生します。メッセージは短時間しか画面に表示されないため、メッセージを注意深く観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大する場合があります。



```
www.ami.com American Megatrends Sun microsystems®
AMIBIOS (C) 2004 American Megatrends, Inc.
BIOS Build Version : 0ABJT100 Date: 10/29/07 15:12:24 Core: 08.00.12
CPU : Dual-Core AMD Opteron(tm) Processor 2220
Speed : 2.80 GHz Count : 4
Socket0-Node0: DCT0 = 667 MHz, DCT1 = 667 MHz
Socket1-Node1: DCT0 = 667 MHz, DCT1 = 667 MHz
Sun Blade X6220 Server Module, 2 AMD North Bridges, Rev F3
1 NVidia CK8-04 PRO SB, 1 NVidia IO-4 Slave Bridge(s)
Board Serial Number : 1005LCB-07232G01A2
BMC Firmware Revision : 2.0.3.1; SP IP Address : 010.006.153.203
CPLD Revision : 5.0
Initializing USB Controllers .. Done.
Press F2 to run Setup (CTRL+E on Remote Keyboard)
Press F8 for BBS POPUP (CTRL+P on Remote Keyboard)
Press F12 to boot from the network (CTRL+N on Remote Keyboard)
4406MB OK

(C) American Megatrends, Inc.
64-0100-000001-00101111-102907-CK8-04-0ABJT100-Y2KC
```

- 2 システムのブート時に、以下のいずれかを実行してネットワークブートを開始します。
 - プロンプトが出されたら、**F12** キーを押して、検出された最初のネットワークブートデバイスからブートします。
 - プロンプトが出されたら、**F8** を押して、ブートメニューを表示し、ネットワークブートデバイスを指定します。

ヒント - Sun Blade サーバーモジュールでは、(1) (「F8 BBS Popup」メニューにリストされた) *PXE:Slot#* または *Network:Slot#* とシャーシ上の物理 NEM または EM のスロット番号ラベルを一致させることによって、(2) (「Please Select Boot Device」メニューにリストされた) *F#* と NEM (ポート 0.0 から 9.0 および 0.1 から 9.1) または EM (ポート 0 またはポート 1) 上にある物理 NIC ポート番号ラベルを一致させることによって、PXE インタフェースブートデバイスを判断することができます。

ネットワークブートデバイスの指定後、システムは、DHCP PXE ブートサーバーから IP アドレスを取得しようとします。PXE サーバーの検出後、PXE ブートプロンプトが表示されます。

3 PXE ブートプロンプトで、Enter を押すか、以下を入力します: `install`

Oracle Hardware Installation Assistant のインストールイメージがサーバーにダウンロードされて、アプリケーションが起動します。

次の手順 [21 ページの「プロビジョニングタスクの実行方法」](#)

PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの実行

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの PXE ベースのイメージを使用して、OS のインストールやファームウェアのアップデートなどのプロビジョニングタスクを無人で(ユーザーとの対話操作を行わずに) 実行する方法について説明します。このセクションの内容は、PXE に理解の深いユーザーを対象としています。

このセクションでは、次の項目について説明します。それぞれのインストールに関連する項目を参照してください。

- 93 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの要件」
- 94 ページの「無人インストール用の状態ファイルの作成」
- 108 ページの「Linux の無人インストールを準備する方法」
- 109 ページの「Windows Server の無人インストールを準備する方法」
- 109 ページの「無人ファームウェアアップデートを準備する方法」
- 110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」
- 111 ページの「PXE ベースのサーバーから無人セッションを起動する方法」

PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの要件

Oracle Hardware Installation Assistant は、Linux ベースの PXE サーバーから起動できる Linux ベースのアプリケーションです。Linux ベースの PXE サーバー上で Oracle Hardware Installation Assistant イメージを作成し、有人または無人モードで Linux または Windows システムに対応したアプリケーションを起動して使用することができます。

無人モードの場合、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションはユーザーによる操作なしで実行され、OS のインストール(サポート対象の Linux または Windows バージョン)やファームウェアのアップデートなどのプロビジョニングタスクを自動的に実行します。

次の表は、Linux ベースの PXE サーバーを用いて無人モードで Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用するタスクを示しています。

手順	タスク	リンク
1	使用している環境が必要な PXE インフラストラクチャを用いてセットアップされていることを確認します。	83 ページの「PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ」
2	Oracle Hardware Installation Assistant の PXE イメージファイルを準備します。	84 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant PXE イメージファイルの準備」
3	インストールを補助するための Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルを作成します。	94 ページの「無人インストール用の状態ファイルの作成」
4	Oracle Hardware Installation Assistant イメージを作成し、PXE ブートの準備をします。	110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」
5	サーバーから Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動します。	111 ページの「PXE ベースのサーバーから無人セッションを起動する方法」

次のステップ: [94 ページの「無人インストール用の状態ファイルの作成」](#)

無人インストール用の状態ファイルの作成

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを無人モードで使用するには、Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルを作成する必要があります。状態ファイルを使用することで、ユーザーによる操作なしでインストール処理を実行することが可能になります。状態ファイルは、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD 内に収められています。

- [94 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの内容を表示する方法」](#)
- [95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」](#)
- [103 ページの「状態ファイルの作成に関する考慮事項」](#)
- [104 ページの「状態ファイルの例」](#)
- [106 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の無人状態ファイルを作成する方法」](#)

▼ Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの内容を表示する方法

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションの無人セッションを実行し、ユーザーによる操作なしで指定されたプロビジョニングタスクを自動的に実行するのに必要なスクリプト変数が利用できます。使用可能なすべてのパラメータを含む状態ファイルのコピーは、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD のルートレベルにあります。

す。状態ファイルには、Oracle Hardware Installation Assistant のセッション中にコマンドプロンプトを使用してアクセスできます。このファイルはテンプレートとして使用できます。

このタスクでは、Oracle Hardware Installation Assistant からコマンドラインを利用し、Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの内容を表示します。

始める前に このタスクでは、コマンドラインからテキストエディタアプリケーションを利用します。

1 **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションを (ローカルまたはリモートコンソールから) 起動します。17 ページの「[アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行](#)」を参照してください。

2 最初の画面で **Ctrl-Alt-F2** を押します。
コマンドプロンプトが表示されます。

3 プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
# cd /root
```

```
# ls
```

/root ディレクトリがリスト表示されます。

リスト表示の中に externalStateVariables.txt ファイルが表示されます。

4 状態ファイルの内容を表示するには、テキストエディタを起動して **externalStateVariables.txt** ファイルを開きます。

externalStateVariables.txt ファイルの状態ファイル変数が表示されます。状態ファイル変数については、95 ページの「[Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト](#)」を参照してください。

参照 103 ページの「[状態ファイルの作成に関する考慮事項](#)」

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト

次の表で、実行可能な自動化タスクの状態ファイル変数について説明します。

注 - 各変数とその値は状態ファイル内で別の行に改行せずに記述する必要があります。下の表は横幅が限られているため、一部の例では、変数を複数の行に改行して表記している場合があります。

表 1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数

変数	説明(デフォルト値は太字)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.unattended	Oracle Hardware Installation Assistant を無人モードで実行します。サポートされる値: true false 例: apit.unattended=true	X	X	X
apit.welcome.acceptlicense	Oracle Hardware Installation Assistant のライセンス契約を承諾します。サポートされる値: true false 例: apit.welcome.acceptlicense=true	X	X	X
apit.remoteUpdate	Oracle Hardware Installation Assistant で Oracle Hardware Installation Assistant のアップデートを確認します。常にアップデートを確認して最新のソフトウェアおよびファームウェアをインストールするようにしてください。サポートされる値: true false 例: apit.remoteUpdate=true	X	X	X
apit.remoteUpdateURL	apit.remoteUpdate で true を指定した場合は、Oracle Hardware Installation Assistant のソフトウェアアップデートを検索する場所を指定します。サポートされる値: Oracle Hardware Installation Assistant の最新のコンテンツファイルが存在する URL。この変数は、デフォルトの URL を使用しない場合にのみ指定する必要があります。	X (remoteUpdate が true でデフォルトの URL を使用しない場合)	X (remoteUpdate が true でデフォルトの URL を使用しない場合)	X (remoteUpdate が true でデフォルトの URL を使用しない場合)
apit.networking	Oracle Hardware Installation Assistant がネットワークを介して動作できるようにします。 true の場合、Oracle Hardware Installation Assistant は networkconfig 変数に基づいてネットワーク設定を構成します。サポートされる値: true false 例: apit.networking=true	X	X	X

表1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字>)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.networkconfig.needNetwork	ネットワークで true を指定した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、特定のタスクでネットワークアクセスが必要かどうかを指定します。サポートされる値: true false 例: apit.networkconfig.needNetwork=true	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)
apit.networkconfig.activeNic	ネットワークで true を指定した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、アクティブなネットワークに接続されるネットワークインタフェースを指定します。サポートされる値: eth0 eth1 eth2 eth3 例: apit.networkconfig.activeNic=eth0	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)
apit.networkconfig.NetworkType	ネットワークで true を指定した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、アクティブなネットワークインタフェースの構成を指定します。サポートされる値: static dhcp 例: apit.networkconfig.NetworkType=dhcp	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)
apit.networkconfig.useDHCP	NetworkType で dhcp を選択した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、DHCP サーバーからサーバーのアドレスを取得するように指定します。サポートされる値: true false 例: apit.networkconfig.useDHCP=true	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)	X (networking が true の場合)
apit.networkconfig.ipfield	NetworkType で static を選択した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、用意したサーバーの IP アドレスを使用するように指定します。 例: apit.networkconfig.ipfield= <i>n.n.n.n</i>	X (静的 IP を使用する場合)	X (静的 IP を使用する場合)	X (静的 IP を使用する場合)
apit.networkconfig.gatewayField	NetworkType で static を選択した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、用意した IP アドレスを使用するように指定します。 例: apit.networkconfig.gatewayfield= <i>n.n.n.n</i>	X (静的 IP を使用する場合)	X (静的 IP を使用する場合)	X (静的 IP を使用する場合)

表 1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.networkconfig.netmaskedField	NetworkType で static を選択した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、用意した IP アドレスを使用するように指定します。 例: apit.networkconfig.ipfield= <i>n.n.n.n</i>	X(静的 IP を使用する場合)	X(静的 IP を使用する場合)	X(静的 IP を使用する場合)
apit.http_proxy	たとえば、remoteUpdate で true を指定した場合に、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、インターネットアクセスでプロキシサーバーを使用するように指定します。 次に例を示します。 apit.http_proxy= <i>n.n.n.n</i> (IP アドレス) apit.http_proxy=file://web-proxy-configfile apit.http_proxy=http://web-proxy-server apit.http_proxy=http://internal-host:portnumber	X(プロキシを使用する場合)	X(プロキシを使用する場合)	X(プロキシを使用する場合)
apit.taskList.selectedTask	Oracle Hardware Installation Assistant で実行するタスクを指定します(各無人セッションで実行できるタスクは1つだけです)。状態ファイルで、この変数は必須です。サポートされる値: SP/Bios Firmware Upgrade OS Installation HBA Firmware Upgrade Expander Firmware Upgrade SP Recovery 例: apit.taskList.selectedTask=OS Installation	X	X	X
apit.osid.installLoc	Oracle Hardware Installation Assistant に対して、インストールする Linux OS のネットワークイメージが存在する場所を指定します。このパスは、イメージそのものではなく、イメージ(ISOまたは抽出 ISO)を含むディレクトリに対するパスです。このディレクトリに、複数のイメージを格納することはできません。 例: apit.osid.installLoc=http://path_to_imagedirectory		X	

表1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.osid.installMedia	Oracle Hardware Installation Assistant に対して、OS インストールソフトウェアの CD または .iso ファイルが存在する場所を指定します。サポートされる値: <code>cdrom</code> <code>networkLinux</code> <code>networkWindows</code> 例: <code>apit.osid.installMedia=cdrom</code>	X	X	
apit.osid.installMethod	Oracle Hardware Installation Assistant に対して、インストール時に使用するファイル転送プロトコルを指定します。サポートされる値: <code>http</code> <code>ftp</code> 例: <code>apit.osid.installMethod=http</code>	X	X	
apit.osid.kickstart	Oracle Hardware Installation Assistant に対して、Linux インストール用の kickstart ファイルが存在する場所を指定します。Red Hat の kickstart ファイルまたは SUSE の <code>autoyast</code> ファイルに対する URL を指定することができます。 次に例を示します。 <code>apit.osid.kickstart=http://url_to_kickstart</code> <code>apit.osid.kickstart=ftp://url_to_kickstart</code>		X	

表 1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.windows2008.imageName	<p>インストールする Windows Server 2008 のバージョンを指定します。指定する値によって、Windows を完全にインストールするか、コアのみをインストールするかが決まります。コアインストールを選択すると、ネットワークの主要な機能を実行するのに必要なコンポーネントのみをインストールすることができます。サポートされる値:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ WINDOWS LONGHORN [R2] SERVERSTANDARD ■ WINDOWS LONGHORN [R2] SERVERENTERPRISE ■ WINDOWS LONGHORN [R2] SERVERDATACENTER ■ WINDOWS LONGHORN R2 SERVERWEB ■ WINDOWS LONGHORN [R2] SERVERSTANDARDCORE ■ WINDOWS LONGHORN [R2] SERVERENTERPRISECORE ■ WINDOWS LONGHORN [R2] SERVERDATACENTERCORE ■ WINDOWS LONGHORN R2 SERVERWEBCORE <p>注: R2 の値は Windows Server 2008 R2 のみで使用します。Windows Server 2008 SERVERWEB/CORE は R2 でのみサポートされています。</p> <p>例 (R2 以前):</p> <pre>apit.windows2008.imageName=WINDOWS LOGHORN SERVERENTERPRISE</pre> <p>例 (R2):</p> <pre>apit.windows2008.imageName=WINDOWS LONGHORN R2 SERVERENTERPRISE</pre>	X (2008 のみ)		

表 1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.osid.windows.iso.url1	installMethod の選択内容 (http または ftp) に基づいて、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、最初の Windows OS インストールディスクの .iso イメージファイルが存在する場所を指定します。 次に例を示します。 apit.osid.windows.iso.url1=http://path_to_disk1.iso apit.osid.windows.iso.url1=ftp://path_to_disk1.iso	X		
apit.osid.windows.iso.url2	installMethod の選択内容 (http または ftp) に基づいて、Oracle Hardware Installation Assistant に対して、2 番目の Windows OS インストールディスクの .iso イメージファイルが存在する場所を指定します (イメージファイルが2つのディスクに格納されている場合)。 次に例を示します。 apit.osid.windows.iso.url2=http://path_to_disk2.iso apit.osid.windows.iso.url2=ftp://path_to_disk2.iso	X		
apit.enclosureID.oldEnclosureID	Sun Blade 6000 ディスクモジュールを交換するための 2 ステッププロセスの一部として使用します。この変数の値は、交換されるブレードの回路基板上にある古い格納装置 ID 番号 (WWN ともいう) である必要があります。			
apit.enclosureID.newEnclosureID	Sun Blade 6000 ディスクモジュールを交換するための 2 ステッププロセスの一部として使用します。この変数の値は、交換用ブレードの回路基板上にある新しい格納装置 ID 番号 (WWN ともいう) である必要があります。			
apit.firmware.enabled	Oracle Hardware Installation Assistant に対して、ファームウェアアップデート機能の有効化または無効化を指定します。サポートされる値: true false 通常はテスト環境で使用します。ファームウェアをアップデートするのに、この変数を使用する必要はありません。			

表 1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字>)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.firmware.spIP	ファームウェアアップグレードタスクの一部です。Oracle Hardware Installation Assistant に対して、サーバーのサービスプロセッサの IP アドレスを指定します。 例: <code>apit.firmware.spIP=<i>n.n.n.n</i></code>			X
apit.firmware.spPasswd	ファームウェアアップグレードタスクの一部です。Oracle Hardware Installation Assistant に対して、サーバーのサービスプロセッサのパスワードを指定します。 例: <code>apit.firmware.spIP=<i>changeme</i></code>			X
apit.windows.acceptEula	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、Windows OS のインストール時に求められる EULA (エンドユーザー使用許諾契約) を承諾するように指定します。 例: <code>apit.windows.acceptEula</code>	X (2003 のみ)		
apit.windows.adminPasswd	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、Windows OS のインストール時に管理者アカウントの設定に使用するパスワードを指定します。パスワードは、Windows のパスワード基準に準拠する必要があります。 例: <code>apit.windows.adminPasswd=<i>myadminpassword</i></code>	X (2003 のみ)		
apit.windows.computerName	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、Windows OS のインストール時にサーバーの設定に使用するコンピュータ名を指定します。 例: <code>apit.windows.computerName=<i>mycomputername</i></code>	X (2003 のみ)		
apit.windows.key	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、使用する製品版 Windows OS のプロダクトキーを指定します。Windows のインストール時に必要です。 例: <code>apit.windows.key=<i>XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX</i></code>	X (2003 のみ)		

表1 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数 (続き)

変数	説明(デフォルト値は太字)	Windows インストールに必要	Linux インストールに必要	ファームウェアアップデートに必要
apit.windows.orgName	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、Windows OS のインストール時にサーバーの設定に使用する組織名を指定します。 例: apit.windows.orgName= <i>myorganization</i>	X (2003 のみ)		
apit.windows.userName	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、Windows OS のインストール時に初期のユーザーアカウントの設定に使用するユーザー名を指定します。 例: apit.windows.userName= <i>myusername</i>	X (2003 のみ)		
apit.done.notifyUrl	Oracle Hardware Installation Assistant に対し、有効な Oracle Hardware Installation Assistant タスクの完了後に、指定した URL にアクセスするように指示します。これは現在、Sun N1 System Manager でのみサポートされています。 例: apit.done.notifyUrl= <i>http://my_destination_url</i>			

関連項目:

- 94 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの内容を表示する方法」
- 103 ページの「状態ファイルの作成に関する考慮事項」
- 104 ページの「状態ファイルの例」

状態ファイルの作成に関する考慮事項

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルは、Linux または Windows Server OS の無人インストールやその他のプロビジョニングタスクを補助するためのテキストファイルです。そのため、状態ファイル内の指示は、必ず明示的である必要があります。

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルを作成する際の要件

- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションが PXE から起動する場合、状態ファイルで OS メディアの場所と転送プロトコル (FTP または HTTP) を識別する必要があります。
- 状態ファイルでは、不要なスペースや句読点は一切使用できません。

- 各変数とその値は状態ファイル内で別の行に改行せずに記述する必要があります。
- Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルで指定する行はそれぞれ、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを対話形式で使用してタスクを実行する場合の手順と一致している必要があります。
- インストール場所は、設定ファイルのブート引数として指定する必要があります (110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」を参照)。

関連項目: [104 ページの「状態ファイルの例」](#)

状態ファイルの例

このセクションでは、Linux および Windows OS インストール、およびファームウェアアップデートに対応した状態ファイルの例について説明します。

- [104 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 \(Linux 用\)」](#)
- [105 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 \(Windows 用\)」](#)
- [105 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 \(ファームウェアアップデート用\)」](#)

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (Linux 用)

以下のサンプルは、Linux の無人インストールに対応した Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例です。

```
[STATE_BEGIN noname apit]
apit.unattended=true
apit.welcome.acceptlicense=true
apit.networking=true
apit.networkconfig.needNetwork=true
apit.networkconfig.useDHCP=true
apit.networkconfig.needProxy=false
apit.remoteUpdate=true
apit.remoteupdateURL=http://HIA-updates.sun.com/remoteUpdate
apit.http_proxy=path_to_my_http_proxy
apit.taskList.selectedTask=Operating System Installation
apit.osid.installMedia=networkLinux
apit.osid.installMethod=http or ftp
apit.osid.installLoc=path_to_PXE_file
apit.osid.kickstart=path_to_configuration_file
[STATE_DONE noname apit]
```

関連項目:

- 106 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の無人状態ファイルを作成する方法」
- 各変数については、95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」を参照してください。

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (Windows 用)

以下のサンプルは、Windows の無人インストールに対応した Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例です。

```
[STATE_BEGIN noname apit]
apit.unattended=true
apit.networking=true
apit.welcome.acceptlicense=true
apit.networkconfig.needNetwork=true
apit.networkconfig.useDHCP=true
apit.networkconfig.needProxy=false
apit.taskList.selectedTask=Operating System Installation
apit.remoteUpdate=true
apit.remoteupdateURL=http://HIA-updates.sun.com/remoteUpdate
apit.http_proxy=path_to_my_http_proxy
apit.osid.installMedia=networkWindows
apit.osid.installMethod=http or ftp
apit.osid.url1=path_to_Windows_OS_CD1_iso_file
apit.osid.url2=path_to_Windows_OS_CD2_iso_file
apit.windows.key=XXXXX-XXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX
apit.windows.computerName=computername
apit.windows.orgName=organizationname
apit.windows.userName=username
apit.windows.adminPasswd=password
apit.windows.acceptEula=Yes
[STATE_DONE noname apit]
```

関連項目:

- 106 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の無人状態ファイルを作成する方法」
- 各変数については、95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」を参照してください。

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (ファームウェアアップデート用)

以下のサンプルは、無人でのファームウェアアップデート対応した Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例です。

注 - すべてのサーバーが Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの `taskList` オプションや `firmware` オプションをサポートしているわけではありません。これらのオプションがサポートされているどうか分からない場合は、Oracle ダウンロードサイトに記載された、使用しているサーバー用の Oracle Hardware Installation Assistant 機能リストを参照してください。

```
[STATE_BEGIN noname apit]
apit.unattended=true
apit.networking=true
apit.welcome.acceptlicense=true
apit.networkconfig.needNetwork=true
apit.networkconfig.useDHCP=true
apit.networkconfig.needProxy=false
apit.taskList.selectedTask=SP/Bios Firmware Upgrade
apit.remoteUpdate=true
apit.remoteupdateURL=http://HIA-updates.sun.com/remoteUpdate
apit.http_proxy=path_to_my_http_proxy
apit.firmware.spIP=n.n.n.n
apit.firmware.spPasswd=password_for_sp
[STATE_DONE noname apit]
```

関連項目:

- 106 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の無人状態ファイルを作成する方法」
- 各変数については、95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」を参照してください。

▼ Oracle Hardware Installation Assistant の無人状態ファイルを作成する方法

ここでは、無人での Oracle Hardware Installation Assistant による OS インストール (Linux および Windows Server) やファームウェアアップデートを補助するための状態ファイルを作成します。

- 始める前に
- Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数については、95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」を参照してください。
 - Linux 用の Oracle Hardware Installation Assistant 状態ファイルの例については、104 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (Linux 用)」を参照してください。
 - Windows Server 用の Oracle Hardware Installation Assistant 状態ファイルの例については、105 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (Windows 用)」を参照してください。
 - ファームウェアアップデート用の Oracle Hardware Installation Assistant 状態ファイルの例については、105 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (ファームウェアアップデート用)」を参照してください。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant** の状態ファイルを作成するには、次のいずれかを実行します。
 - テキストエディタを使用して編集できるように、`externalStateVariables.txt` ファイルを Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD から別の場所にコピーします。手順 2 に進みます。
 - または -
 - テキストエディタを起動して、`externalStateVariables.txt` という名前のファイルを新規に作成します。手順 3 に進みます。
- 2 `externalStateVariables.txt` ファイルを開き、必要な設定や環境に合わせてファイル内の変数を変更します。手順 4 に進みます。

注 - 状態ファイルは、必ず先頭行を `[STATE_BEGIN noname apit]` に、最終行を `[STATE_DONE noname apit]` にする必要があります。

- 3 次のコマンドを入力します。
 - a. 最初の行に、次のように入力します。
`[STATE_BEGIN noname apit]`
 - b. 次の行に、次の変数と値を入力します。
`apit.unattended=true`
 - c. 続けて、必要な設定および環境に合わせて各行ごとに個別の変数と値を入力します。

ヒント - 状態ファイルの例を参考にします。104 ページの「状態ファイルの例」を参照してください。

使用可能な状態ファイル変数については、95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」を参照してください。

- d. 変数の入力が終わったら、ファイルの最終行に次の行を入力します。
`[STATE_DONE noname apit]`
- 4 ファイルを保存します。

- 次の手順
- 108 ページの「Linux の無人インストールを準備する方法」
 - 109 ページの「Windows Server の無人インストールを準備する方法」
 - 109 ページの「無人ファームウェアアップデートを準備する方法」

▼ Linux の無人インストールを準備する方法

始める前に このセクションで示す手順では、以下を前提としています。

- Oracle Enterprise Linux、RHEL、または SLES Linux 無人インストールについてよく知っている。
- Oracle Enterprise Linux、RHEL Kickstart ファイル、または SLES AutoYaST ファイルが作成されている。
- 以下のオプションと共に Oracle Enterprise Linux、RHEL Kickstart、または SLES AutoYaST の PXE イメージが設定されている。
 - Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションによってインストールされていないサーバー用の追加ドライバ。これによって、サーバーのインストールおよび「ご使用にあたって」ドキュメントで説明されているように、インストールされたサーバーコンポーネントでサポートされた一連の機能 (ACPI、ビデオ、ネットワーク、大容量記憶装置など) が提供されます。
 - Linux ベンダーから入手可能な最新の OS インストールパッチ。
 - Oracle Hardware Installation Assistant で必要になるディスプレイ解像度。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションは、CD-ROM または PXE から常に `vga=0x314` でブートする必要があります。
- Kickstart または AutoYaST ファイルが、FTP または HTTP サーバーを介してアクセスすることができる。

- 1 PXE 環境をセットアップし、**Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションイメージファイルを準備します。[83 ページの「PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ」](#)を参照してください。
- 2 **Oracle Hardware Installation Assistant** 無人状態ファイルを作成します。[104 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 \(Linux 用\)」](#)を参照してください。
- 3 **Linux** 用無人設定ファイルおよび **PXE OS** インストールイメージをセットアップします。
 - Oracle Enterprise Linux または Red Hat Enterprise Linux で Kickstart 無人インストールを使用します (製品ドキュメントを参照)。
 - SUSE Linux Enterprise Server で AutoYaST 無人インストールを使用します (製品ドキュメントを参照)。

次の手順 [110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」](#)

▼ Windows Server の無人インストールを準備する方法

- 始める前に
- Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数については、95 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル変数リスト」を参照してください。
 - Windows 用の Oracle Hardware Installation Assistant 状態ファイルの例については、105 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (Windows 用)」を参照してください。
- 1 PXE 環境をセットアップし、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションイメージファイルを準備します。83 ページの「PXE ベースの Oracle Hardware Installation Assistant のセットアップ」を参照してください。
 - 2 Windows Server OS インストール用の Oracle Hardware Installation Assistant 状態ファイルを作成します。105 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (Windows 用)」を参照してください。
- 次の手順 110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」

▼ 無人ファームウェアアップデートを準備する方法

注-ファームウェアアップグレードオプションを使用するには、使用するサーバーが Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションによるファームウェアアップデートをサポートしている必要があります。

PXE を使用して Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動することにより、Sun Fire サーバーや Sun Blade サーバーでシステムファームウェアの無人アップデートを行うことができます。また、システム BIOS や Oracle ILOM のアップグレード、HBA ファームウェア、および SP の回復などの、その他のプロビジョニングタスクを実行することもできます。

無人ファームウェアアップデートを有効にしても、ターゲットサーバー上でアップデートが必要ない場合、無人インストールは停止します。この場合、処理を続行するにはユーザー操作が必要になります。

アップデート処理が中断されるのを避けるため、アップデートに使用するファームウェアイメージがターゲットサーバーにすでに存在しているものよりも新しいことを確認するようにしてください。アップデートイメージのファームウェアバージョン (ビルド番号) は、README ファイルに記載されています。ターゲットサーバーのファームウェアバージョン (ビルド番号) を確認するには、サービスプロセッサにログインして Oracle ILOM の Web インタフェースを介して情報を確認するか、CLI プロンプトで `version` コマンドを入力します。

- ファームウェアアップデート用の **Oracle Hardware Installation Assistant** 無人状態ファイルを作成します。105 ページの「**Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルの例 (ファームウェアアップデート用)**」を参照してください。

Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイルは、ファームウェアアップデートの無人インストールを補助するためのテキストファイルです。

次の手順 110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」

▼ アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法

始める前に ■ 以下の関連セクションに記載されている準備作業を実行します。

- 108 ページの「Linux の無人インストールを準備する方法」
- 109 ページの「Windows Server の無人インストールを準備する方法」
- 109 ページの「無人ファームウェアアップデートを準備する方法」

- 1 PXE/TFTP サーバーで、**Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションイメージ用のサブディレクトリを新しく作成します。

たとえば、次のコマンドラインを使用すると、TFTP サーバーのデフォルトルートに Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションイメージ用のサブディレクトリが作成されます。

```
# mkdir /var/lib/tftpboot/HIA
```

- 2 HIA_netboot.zip の内容を **Oracle Hardware Installation Assistant** イメージ用に作成した TFTP サーバー上のサブディレクトリに展開します。
- 3 変更を加えた **Oracle Hardware Installation Assistant** 状態ファイル (`externalStateVariables.txt`) を PXE サーバーからアクセス可能な Web サーバーで利用できるようにします。

ヒント - PXE サーバーを Web サーバーとして使用することもできます。

- 4 エディタを使用して **PXE 設定ファイル** (このファイルのデフォルト名は `pxelinux.cfg`) を編集し、**Oracle Hardware Installation Assistant** イメージに対する必要な参照を追加します。

`sample-pxe.cfg` ファイルの例を参照してください。それぞれのセットアップに応じて変更してください。

- 5 以下を `pxelinux.cfg` ファイルの `append` 行に追加して、状態ファイルを使用した **Oracle Hardware Installation Assistant** の無人インストール用に設定します。

```
splash=silent HIAurl=http://URL_to_externalStateVariables.txt
```

HIAurl= パラメータでは、状態ファイルを指定する必要があります。

6 pxeLinux.cfg ファイルを保存します。

イメージをブートし、アプリケーションを起動する準備ができました。

次の手順 Oracle Hardware Installation Assistant の PXE イメージを PXE サーバーから起動して無人インストールを開始するには、[111 ページの「PXE ベースのサーバーから無人セッションを起動する方法」](#)に記載された手順を実行します。

▼ **PXE ベースのサーバーから無人セッションを起動する方法**

始める前に イメージファイルを作成して、起動するための準備を行います。[110 ページの「アプリケーションイメージを作成して PXE ベースの起動を準備する方法」](#)を参照してください。

- 1 ターゲットサーバーが、**PXE** サーバーと同じネットワーク上に構成されていることを確認してから、ターゲットサーバーをリセットします。たとえば、次のように表示されます。
 - Oracle iLOM リモートコンソールの Web インタフェースで、「Remote Control」->「Remote Power Control」をクリックしてから、「Reset」を選択して、ホストサーバーをリセットします。
-または-
 - サーバーの前面パネルにある電源ボタンを押してサーバーの電源をオフにしてから(サーバーの電源が切れるまでボタンを押し続けます)、電源ボタンを押してサーバーの電源をオンにします。

サーバーが起動し、BIOS 画面が表示されます。例を下に示します (使用しているサーバーの BIOS 画面はこれとは異なる可能性があります)。

```
www.ami.com
American Megatrends
Sun
microsystems®
AMIBIOS (C) 2004 American Megatrends, Inc.
BIOS Build Version : 0ABJT100 Date: 10/29/07 15:12:24 Core: 08.00.12
CPU : Dual-Core AMD Opteron(tm) Processor 2220
Speed : 2.80 GHz Count : 4
Socket0-Node0: DCT0 = 667 MHz, DCT1 = 667 MHz
Socket1-Node1: DCT0 = 667 MHz, DCT1 = 667 MHz
Sun Blade X6220 Server Module, 2 AMD North Bridges, Rev F3
1 NvIdia CK8-04 PRO SB, 1 NvIdia IO-4 Slave Bridge(s)
Board Serial Number : 1005LCB-0723ZG01A2
BMC Firmware Revision : 2.0.3.1; SP IP Address : 010.006.153.203
CPLD Revision : 5.0
Initializing USB Controllers .. Done.
Press F2 to run Setup (CTRL+E on Remote Keyboard)
Press F8 for BBS POPUP (CTRL+P on Remote Keyboard)
Press F12 to boot from the network (CTRL+N on Remote Keyboard)
4406MB OK

(C) American Megatrends, Inc.
64-0100-000001-00101111-102907-CK8-04-0ABJT100-Y2KC
```

ヒント-次のイベントは、すぐに発生します。メッセージが短時間画面に表示される間、メッセージを注意深く観察します。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大する場合があります。

- 2 システムのブート時に、以下のいずれかを実行してネットワークブートを開始します。
 - プロンプトが表示されたら、**F12** キーを押して、検出された最初のネットワークブートデバイスからブートします。
 - プロンプトが出されたら、**F8** を押して、ブートメニューを表示し、ネットワークブートデバイスを指定します。

ヒント - Sun Blade サーバーモジュールでは、(1) (「Please Select Boot Device」メニューにリストされた) *PXE:Slot#* とシャーシ上の物理 NEM または EM のスロット番号ラベルを一致させることによって、(2) (「Please Select Boot Device」メニューにリストされた) *F#* と NEM (ポート 0.0 から 9.0 および 0.1 から 9.1) または EM (ポート 0 またはポート 1) 上にある物理 NIC ポート番号ラベルを一致させることによって、PXE インタフェースブートデバイスを判断することができます。

ネットワークブートデバイスの指定後、システムは、DHCP PXE ブートサーバーから IP アドレスを取得しようとします。PXE サーバーの検出後、PXE ブートプロンプトが表示されます。

3 PXE ブートプロンプトで、Enter を押すか、以下を入力します:**install**

Oracle Hardware Installation Assistant のインストールイメージがサーバーにダウンロードされ、「Launching the Oracle Hardware Installation Assistant」というメッセージが表示されます。

参照 無人インストールの監視については、115 ページの「PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの監視」を参照してください。

PXE ベースの無人プロビジョニングタスクの監視

無人のネットワークプロビジョニングタスクを監視することにより、タスクの進捗状況を監視し、処理中に生成される診断メッセージを確認することが可能になります。無人インストールを監視するには、次のいずれかの方法を使用してシステムとの表示接続を確立します。

- システムコンソール
- 仮想コンソールまたはセキュアシェル接続
- 仮想ネットワークコンピューティング (VNC) ビューア
- シリアルコンソール

注 - 仮想コンソールまたは VNC ビューアを使用している場合は、`root` と VNC の両方でパスワードを使用する必要があります。

このセクションでは、以下の項目について説明します。これにより、パスワードを設定し、システムとの表示接続を確立して無人操作を監視することが可能になります。

- [115 ページの「仮想コンソールまたはセキュアシェル \(SSH\) 接続を使用した表示接続の確立」](#)
- [116 ページの「root および VNC のパスワードの設定方法」](#)
- [117 ページの「VNC ビューアを使用して接続を確立する方法」](#)
- [118 ページの「シリアルコンソールを使用して接続を確立する方法」](#)

仮想コンソールまたはセキュアシェル (SSH) 接続を使用した表示接続の確立

仮想コンソールにログインする前に、インストーラに対して `root` のパスワードをブート引数として設定します。詳細については、[116 ページの「root および VNC のパスワードの設定方法」](#) を参照してください。

インストールインタフェースでは、Linux カーネルを実行して仮想コンソールアクセスを提供します。仮想コンソールにアクセスするには、`Ctrl-Alt-F2` を押します (`Ctrl-Alt-F3` や `Ctrl-Alt-F4` を使用して他のコンソール画面を使用することもできま

す)。仮想コンソールへの接続の確立後は、VNC サーバー IP アドレスを判断して、標準ログファイルを表示することができます。

また、VNC の IP アドレスを使用してシリアルコンソール経由で SSH 接続を確立することもできます (118 ページの「シリアルコンソールを使用して接続を確立する方法」を参照)。

▼ root および VNC のパスワードの設定方法

無人プロビジョニングタスクの監視方法として、仮想コンソールまたは仮想ネットワークコンピューティング (VNC) ビューアを使用する場合は、最初に root と VNC のアクセスパスワードを用意する必要があります。

パスワードは、CD または PXE サーバーからブートする際に手動で、あるいは PXE ブートターゲットファイル (/home/pxeboot/pxelinux.cfg/default) で、ブート引数としてインストーラに提供されます。

- `rootpw=des-encrypted-password` 引数を使用すると、プレーンテキストの root パスワードをネットワーク経由でやり取りせずに、PXE ブート時に SSH リモートアクセスを使用することができます。この引数は、Perl スクリプトで生成される暗号化されたパスワードを提供します。
- `vncauth=hex-string` 引数を使用すると、VNC アクセスでパスワードを使用することができます。リモート VNC 認証ファイルは、8 バイナリバイトです。vncpasswd でこの 8 バイトを作成し、hex-string に変換します。
- `ptextpass=password` 引数を使用すると、root パスワードおよび VNC パスワードの両方で使用するプレーンテキストパスワードを渡すことができます。

● 次のいずれかの手順を実行します。

- セキュリティを最大限に高める場合は、CD boot: プロンプトで以下のパスワード引数を使用します。

- root パスワードを使用する場合

```
rootpw=des-encrypted-password
```

ここで、`des-encrypted-password` は、コマンドラインで以下の Perl スクリプトを実行して得られる文字列出力です。

```
# perl -e 'print crypt("password ", "42"). "\n"'
```

ここで、`password` は暗号化される root パスワードです。

- VNC アクセスパスワードを使用する場合

```
vncauth=hex-string
```

ここで、`hex-string` はコマンドラインで以下の vncpasswd コマンドを実行して得られる 16 進文字列出力です。

```
# vncpasswd /tmp/vncauth
# od -t x1 /tmp/vncauth | awk '/0000000/ \
{print $2 $3 $4 $5 $6 $7 $8 $9}'
```

-または-

- root パスワードと VNC パスワードの両方に 1 つのプレーンテキストパスワードを渡す場合は、以下のように指定します。

```
# ptextpass=password
```

ここで、*password* はプレーンテキストパスワードです。

- 次の手順
- [117 ページの「VNC ビューアを使用して接続を確立する方法」](#)
 - [118 ページの「シリアルコンソールを使用して接続を確立する方法」](#)

▼ VNC ビューアを使用して接続を確立する方法

無人ネットワークインストールを実行する場合、デフォルトでは、仮想ネットワークコンピューティング (VNC) は有効になっています。無人ネットワークインストールを実行する場合、`display=vnc` をブート引数として追加することによって、VNC を有効化できます。

- 1 パスワードを設定します ([116 ページの「root および VNC のパスワードの設定方法」](#)を参照)。
- 2 **Oracle Hardware Installation Assistant** のスプラッシュ画面が表示されたらすぐに **Esc** キーを押します。
コンソールメッセージが表示されます。VNC サーバーの起動後に、メッセージが表示され、VNC を使用して接続する IP アドレスが提供されます。
- 3 ステップ 2 で表示された IP アドレスを使用して、**VNC ビューア** に接続します。
たとえば、次のように表示されます。

```
# vncviewer IP_address:1.0
```
- 4 プロンプトが表示され、手順 1 で設定したパスワードを入力すると、**VNC** が起動します。
手動インストールを実行すると、インストーラのインターフェースが表示されます。インストールの進行に従って、自動的に画面が先に進みます。VNC 画面は入力可能な状態になっているため、VNC ウィンドウで何らかの操作をする場合は、インストールを中断することができます。

参照 [118 ページの「シリアルコンソールを使用して接続を確立する方法」](#)

▼ シリアルコンソールを使用して接続を確立する方法

ここでは、システムコンソールをワークステーションやノートパソコンにリダイレクトして、サーバーのシリアル管理ポートに接続し、無人インストールを表示する手順について説明します。

- 1 ブート引数 `console=ttyS0,9600` を使用し、コンソール出力をシリアルコンソールにリダイレクトします。

ヒント-これにより、デバッグ時にスクロールバックしてメッセージを表示できるようになります。

注-出力をシリアルコンソールにリダイレクトすると、VGA コンソールへの出力は無効になります。

- 2 シリアルポートからシリアルコンソールをセットアップします。
シリアルコンソールの使用については、Oracle ILOM (Integrated Lights Out Manager) のドキュメントを参照してください。デフォルトの設定では、シリアルポートを介してサービスプロセッサを使用することができます。
- 3 サービスプロセッサにログインしてから、以下のコマンドを入力してコンソールを起動します。

```
# start /SP/console
```
- 4 システムをリブートします。
- 5 ネットワークブートオプションを選択します。
- 6 **Oracle Hardware Installation Assistant** のターゲットを選択し、無人ネットワークインストールの進捗状況を監視します。
Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションのブート後、シリアルコンソールで黒の背景に黒のテキストが書き込まれる状態のままになることがあります。これが発生した場合は、端末をリセットして、テキストを表示します。

参照 [117 ページの「VNC ビューアを使用して接続を確立する方法」](#)

Oracle Hardware Installation Assistant のトラブルシューティング

このセクションでは、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションのエラーメッセージおよびインストールログファイルについての情報、および PXE ベースの無人ネットワークインストールのデバッグ方法について説明します。

この節のトピックは次のとおりです。

- 119 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant のエラーメッセージ」
- 120 ページの「アプリケーションログファイルの表示方法」
- 120 ページの「ブートしない PXE イメージのデバッグ方法」

Oracle Hardware Installation Assistant のエラーメッセージ

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでエラーまたは予期しない状態が発生した場合には、エラーメッセージが生成されます。次の表に、想定されるいくつかのエラーメッセージとそのシナリオ、および考えられる解決策を示します。

エラーメッセージまたは状態	解決策
メッセージ: You have inserted Disc 3 but the system requires Disc 2. Please insert Disc 2.	正しいディスクを挿入してもう一度実行します。

エラーメッセージまたは状態	解決策
<p>メッセージ:</p> <p>The media you have provided is not a release that is supported on this platform. You cannot use the Oracle Hardware Installation Assistant to install this product and associated software.</p>	<p>サポートされていないバージョンの Linux または Microsoft Windows で Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用しようとしています。解決するには、次のいずれかを行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サポートされた製品をインストールするには、「Back」をクリックしてから適切なメディアを挿入します。 ■ Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでサポートされていない製品をインストールするには、「Exit」をクリックしてアプリケーションを終了し、システムを再起動します。これにより、サポートされていない製品を、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用せずに通常どおりインストールできるようになります。
<p>プロセスのエラーまたは問題。</p>	<p>アプリケーションログファイルを確認します。120 ページの「アプリケーションログファイルの表示方法」を参照してください。</p>
<p>PXE ベースのインストールからアプリケーションが起動しない。</p>	<p>120 ページの「ブートしない PXE イメージのデバッグ方法」を参照してください。</p>

▼ アプリケーションログファイルの表示方法

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションのログファイルは、新しくインストールしたシステムのルートディレクトリに書き込まれます。

- アプリケーションログファイルを表示するには、次のいずれかを行います (OS によって異なります)。
 - Linux システムの場合は、テキストエディタを使用して SunInstallationAssistant.log ファイル (/root にあります) を開きます。
 - Windows システムの場合は、テキストエディタを使用して SunInstallationAssistant.log ファイル (C:\ にあります) を開きます。

参照 [119 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant のエラーメッセージ」](#)

▼ ブートしない PXE イメージのデバッグ方法

ブートしない PXE イメージをデバッグするには、次の手順に従います。

- 1 DHCP および TFTP のサーバーエリアと、`netboot.img` および `mlinuz` ファイルの整合性を確認します。
- 2 Oracle Hardware Installation Assistant CD/DVD に格納されている PXE サンプル設定 (`boot/isolinux/isolinux.cfg`) を参照して、カーネルブートの引数が正しいことを確認します。
- 3 Oracle Hardware Installation Assistant の状態ファイル、Kickstart ファイル、または AutoYaST ファイルの URL が正しいことを確認します。URL が正しいかどうかを判断するには、以下の手順に従います。
 - a. コマンド `wget URL` で、URL をテストします。
 - b. DNS が正常に機能していることを確認するか、ホスト名の代わりに IP アドレスを使用します。
 - c. 次の表で URL エラーについて確認します。

問題	現象
状態ファイルの URL (<code>HIAurl</code>) が正しくありません。	<p>状態ファイルの URL (<code>HIAurl</code>) が正しくない場合、インストールがハングアップしたような状態になります。</p> <p>コンソールで、VNC 情報の後に表示される次のエラーメッセージがないかを確認します。</p> <p>Unable to fetch unattended statefile: <code>URL</code></p>
状態ファイルの URL (<code>HIAurl</code>) の <code>InstallLoc</code> が正しくありません。	<p>エラーメッセージを表示することなくシステムが再起動し、コンソールで、再起動前に次のようなメッセージが表示されます。</p> <p>Can't MD5 ...</p>
状態ファイルの URL (<code>HIAurl</code>) の Kickstart エントリが正しくありません。	<p>インストールがハングアップしたような状態になり、コンソールで以下のメッセージが表示されます。</p> <p>apit-magic: run: /installer/..."</p>
URL ファイルのパラメータが正しくありません。	<p>VNC に接続しようとする時、無人ネットワークインストールが停止して入力待ちの状態になります。</p>

4 VNCパスワードが正しく設定されていることを確認します。

VNCパスワードが設定されなかった場合は、コンソールに以下のメッセージが表示されます。

```
mv /dev/tty /dev/tty-node
ln -s /proc/self/fd/0 /dev/tty
echo password
/usr/X11R6/bin/vncpasswd.real /installer/vncpasswd
echo password
They don't match. Try again.
```

参照 [119 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant のエラーメッセージ」](#)

USB フラッシュドライブを使用した Oracle Hardware Installation Assistant の起動

ここでは、ブート可能な USB フラッシュドライブを作成して Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動する方法について説明します。

次の各セクションで、Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブの準備およびブートについて説明します。

- [123 ページの「USB ドライブの要件」](#)
- [123 ページの「Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法」](#)
- [124 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブの作成」](#)
- [133 ページの「USB フラッシュドライブをブートして Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」](#)

USB ドライブの要件

- バージョン 2.0.144 以降の Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーション (これよりも前のバージョンの Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションでは USB フラッシュドライブはサポートされません)
- バージョン 3.52 以降の Syslinux コーティリティー
- 1 GB 以上の USB 2.0 フラッシュドライブ
- Windows XP または Linux を実行している、USB 2.0 対応ポートを搭載したシステム
- インターネットアクセス (必要なソフトウェアをダウンロードするため)

次のステップ: [123 ページの「Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法」](#)

▼ **Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法**

このセクションでは、Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションソフトウェアの入手方法について説明します。Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションをブートするために USB フラッシュドライブを準備する

には、Syslinux ソフトウェアが必要です。Windows または Linux マシンを使用して Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションソフトウェアをダウンロードし、USB フラッシュドライブをブート用に準備します。

- 1 次の **Oracle Web** サイトから **Oracle Hardware Installation Assistant** のメイン画面にアクセスします。
<http://www.sun.com/systemmanagement/sia.jsp>
- 2 使用しているサーバーのダウンロード画面に移動します。
- 3 次のファイルを選択して、**Windows XP** または **Linux (Red Hat または SUSE)** システム上の任意のファイルフォルダにダウンロードします。
 - `syslinux-version.zip` (*version* は 3.52 以降)
 - `HIA-version.zip` (*version* は 2.0.144 以降)

注-これらのファイルは、別々に提供されている場合と1つのパッケージとして提供されている場合があります。

次の手順 124 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブの作成」

Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブの作成

このセクションでは、Linux または Windows システム用に Oracle Hardware Installation Assistant をブート可能 USB フラッシュドライブを作成する方法について説明します。

- 124 ページの「Linux (Red Hat/SUSE) システムで Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブを作成する方法」
- 128 ページの「Windows 自動実行機能を使用して Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブを作成する方法」
- 131 ページの「Windows XP システムで Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブを作成する方法」

▼ Linux (Red Hat/SUSE) システムで Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブを作成する方法

- 始める前に
- この手順では、バージョン 1.8.6 以降の parted ユーティリティを使用する必要があります。それよりも前のバージョンの parted は使用しないでください。
 - 123 ページの「Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法」を参照してください。

- 1 次のコマンドを使用して、**syslinux-version.zip** アーカイブファイルの内容を展開 (解凍) します。

```
# unzip syslinux-version.zip
```

ここで、*version* は、Syslinux のバージョン番号です。

- 2 USB フラッシュドライブを正常な USB 2.0 ポートに挿入します。
- 3 **tail** コマンドを使用して、USB フラッシュドライブのデバイス名を確認します。

```
# tail /var/log/messages
```

デバイス名 (例: *sda* や *sdb*) が表示されます。出力の例を次に示します。

```
Nov 12 13:19:29 server kernel: scsi 4:0:0:0: Lexar, Inc. USBdisk PQ: 0 ANSI: 0 CCS
Nov 12 13:19:29 server kernel: sd 4:0:0:0: [sdb] 1030750208 512-byte hardware sectors (1030 MB)
Nov 12 13:19:29 server kernel: sd 4:0:0:0: [sdb] Write Protect is off
Nov 12 13:19:29 server kernel: sd 4:0:0:0: [sdb] Assuming drive cache: write through
Nov 12 13:19:29 server kernel: sdb:
Nov 12 13:19:29 server kernel: sd 4:0:0:0: [sdb] Attached SCSI removable disk
Nov 12 13:19:29 server kernel: sd 4:0:0:0: Attached scsi generic sg2 type 0
```



注意 - 意図しないデータ損失が発生する可能性があります。必ず USB フラッシュドライブのデバイス名 (*/dev/sda*、*/dev/sdb*) を確認して書き留めておくようにしてください。以降の手順で、USB フラッシュディスクの既存のパーティションを削除する必要があります。デバイス名を間違えると、ハードディスクの内容が消去される可能性があります。

- 4 次に示す手順で、**parted** を使用して USB フラッシュドライブ上にブートパーティションを1つ作成します。

注 - この手順では、バージョン 1.8.6 以降の **parted** ユーティリティを使用する必要があります。それよりも前のバージョンの **parted** は使用しないでください。

注 - これらの手順を実行するには、スーパーユーザー (*su - root*) としてアクセスする必要があります。

- a. Linux で自動的にデバイスがマウントされている場合は、最初に次のコマンドを使用してマウントを解除します。

```
# umount /dev/sd X1
```

ここで、*X* は、USB フラッシュドライブのドライブ文字 (例: */dev/sda* や */dev/sdb*) です。また、*1* は、最初のパーティションを示します。

- b. **parted** を使用して、すべてのパーティションを削除して新しいブート FAT32 パーティションを作成します。

```
# /sbin/parted /dev/sd X
```

ここで、X は、USB フラッシュドライブのドライブ文字 (例: /dev/sda や /dev/sdb) です。

parted コマンドプロンプトが表示されます。

- c. 次のコマンドを記載されている順序で入力し、プロンプトに従ってブートの一次パーティションを作成します。

- (parted): **mklabel**

ディスクラベルの種類を作成するように求められます。msdos がデフォルトとして表示されない場合は、次の例に示すように、該当するプロンプトで msdos と入力する必要があります。

```
Warning: The existing label on sdx will be destroyed and all
data on this disk will be lost. Do you want to continue?
Yes/No: yes
New disk label type? msdos
```

- (parted): **mkpartfs**

ディスク上に新しいパーティションを作成します。プロンプトに対し、primary パーティション、fat32 フォーマット、およびディスク全体から最後の 1M バイトを除いた範囲 (開始が 1、終了が -1) を指定します。出力の例を次に示します。

```
Partition type? primary/extended? primary
File system type? [ext2] fat32
Start? 1
End? -1
```

- (parted): **set 1 boot on**

このパーティションに boot フラグを設定します。

- (parted): **set 1 lba on**

このパーティションに lba (Linear Block Addressing) フラグを設定します。

- (parted): **print**

新しいパーティションの現在の設定を表示します。出力の例を次に示します。

```
Model: Lexar, Inc. USBdisk (scsi)
Disk /dev/sdb: 1031MB
Sector size (logical/physical): 512B/512B
Partition Table: msdos
```

Minor	Start	End	Size	Type	Filesystem	Flags
1	16.4kB	931MB	1031MB	primary	fat32	boot, lba

(parted)

- (parted): **quit**

parted ユーティリティーを終了します。

- 5 Syslinux の `mbr` ディレクトリに移動します。

```
# cd path/mbr
```

ここで、`path` は、Syslinux を展開したフォルダです。

- 6 次のコマンドを使用して、`mbr` ディレクトリ内の Syslinux マスターブートレコードファイル `mbr.bin` を探し、ディスクに書き込みます。

```
# cat mbr.bin > /dev/sdX
```

ここで、`X` は、USB フラッシュドライブのドライブ文字 (例: `/dev/sda` や `/dev/sdb`) です。

- 7 Syslinux の `unix` ディレクトリに移動します。

```
# cd path/unix
```

ここで、`path` は、Syslinux を展開したフォルダです。

注-新しいバージョンの Syslinux には、`unix` ディレクトリが `linux` ディレクトリに変更されているものがあります。その場合は、`unix` ディレクトリの名前を `linux` に置き換えてください。

- 8 Syslinux の `unix` ディレクトリで、次のコマンドを入力します。

```
# ./syslinux /dev/sdX1
```

ここで、`X` は、USB フラッシュドライブのドライブ文字 (例: `/dev/sda` や `/dev/sdb`) です。また、`1` は、最初のパーティションを示します。

注-次の手順ではマウントポイントを指定する必要があります。autofs を実行している場合、ドライブのパーティションが別のマウントポイントに自動的にマウントされていることがあります。その場合は、次のコマンドを入力してマウントを解除してください。

```
umount /dev/sdX1
```

- 9 次のコマンドを入力して、ドライブをマウントポイントにマウントします。

```
# mount -t vfat /dev/sdX1 /mnt
```

ここで、`X` は、USB フラッシュドライブのドライブ文字 (例: `/dev/sda` や `/dev/sdb`) です。また、`1` は、最初のパーティションを示します。この例では、マウントポイントを `/mnt` にしています。

- 10 次のコマンドを入力して、**HIA-version.zip** アーカイブファイルの内容を USB フラッシュドライブに展開します。

```
# unzip -q -d /mnt ~/path/HIA-version.zip -x "source/*"
```

ここで、*path* は、.zip ファイルが格納されているディレクトリのパスです。*version* は、Oracle Hardware Installation Assistant のバージョン番号です。ここでは、時間とディスクスペースの節約のために、“source/*”パラメータを使用して展開対象からソースファイルを除外しています。

- 11 USB フラッシュドライブをアンマウントします。

```
# umount /mnt
```

- 12 クライアントマシンからフラッシュドライブを取り外します。

これで、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションをブートする USB フラッシュドライブの準備ができました。

次の手順 [133 ページの「USB フラッシュドライブをブートして Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」](#)

▼ Windows 自動実行機能を使用して Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブを作成する方法

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションには、ブート可能 USB フラッシュドライブの作成に役立つ自動実行機能ユーティリティーが用意されています。自動実行ユーティリティーを使用するには、Oracle Hardware Installation Assistant の CD/DVD または CD/DVD ISO イメージをマウントします。

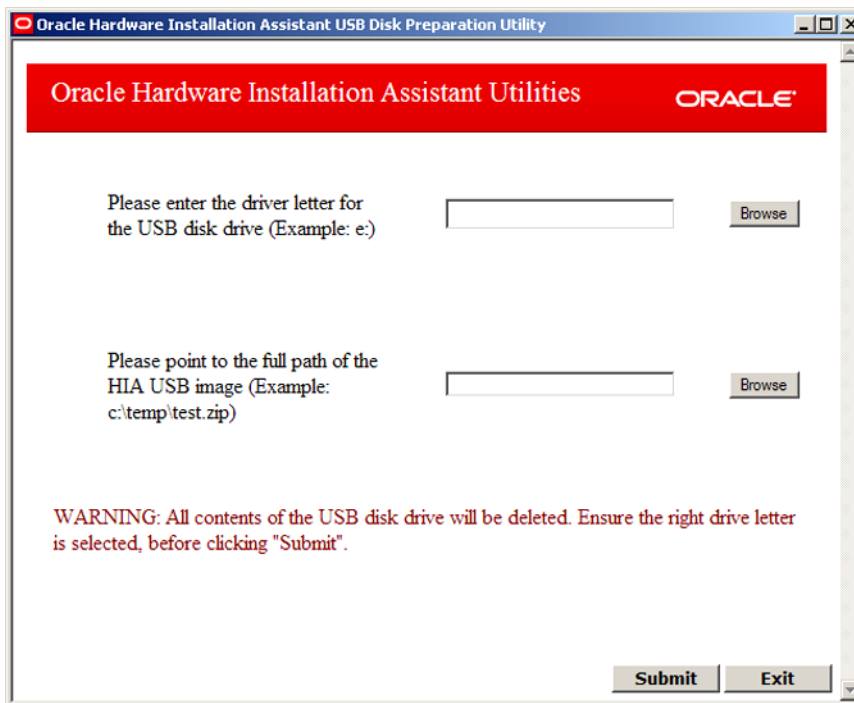
始める前に [123 ページの「Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法」](#) を参照してください。

- 1 Oracle Hardware Installation Assistant CD/DVD をドライブに挿入するか、ISO イメージ ファイルをマウントします。

自動実行ユーティリティの初期画面が表示されます。



- 2 「HIA USB flash drive preparation utility」オプションをクリックします。
USB フラッシュ準備ユーティリティの画面が表示されます。



- 3 USB フラッシュドライブのドライブ文字を参照して選択するか入力します。



注意-意図しないデータ損失が発生する可能性があります。選択したドライブ文字が HIA USB フラッシュドライブのものであることを確認してください。システムディスクのドライブ文字は選択しないでください。このユーティリティの処理によって既存のデータが消去されます。

- 4 HIA USB イメージのフルパスを参照して選択するか入力します。
- 5 「Submit」をクリックします。



注意-データ損失が発生します。USB フラッシュドライブの内容が消去されて上書きされます。

Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを起動するためのブート可能 USB フラッシュドライブが作成されます。

次の手順 [133 ページの「USB フラッシュドライブをブートして Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」](#)

▼ Windows XP システムで Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブを作成する方法

始める前に [123 ページの「Syslinux および Oracle Hardware Installation Assistant ソフトウェアの入手方法」](#) を参照してください。

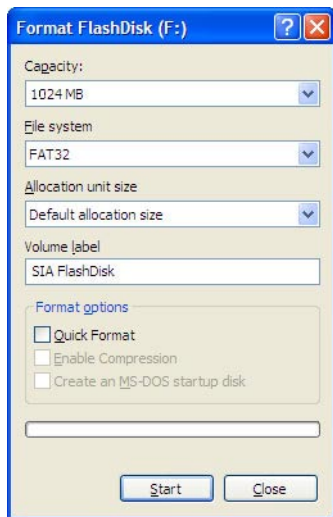
- 1 ダウンロードした `syslinux-version.zip` アーカイブファイルの内容を展開 (解凍) します (`version` は `Syslinux` のバージョン番号です)。
- 2 USB フラッシュドライブを USB 2.0 ポートに挿入します。
- 3 Windows で新しいハードウェアが検出されたら、デスクトップの「My Computer (マイコンピュータ)」をダブルクリックします。



注意 - USB フラッシュドライブのデバイス名 (例: A:, B:) を確認して書き留めておくようにしてください。以降の手順で、USB フラッシュドライブの既存のパーティションを削除する必要があります。デバイス名を間違えると、ハードディスクの内容が消去される可能性があります。

- 4 ハードディスクドライブのリストでフラッシュディスクのアイコンを右クリックし、「Format (フォーマット)」をクリックします。
「Format (フォーマット)」ダイアログボックスが表示されます。

- 5 「File system (ファイルシステム)」 ドロップダウンメニューで「FAT32」を選択し、わかりやすいボリュームラベル(「HIA FlashDisk」など)を入力します。



- 6 「Start (リダイレクションの開始)」 ボタンをクリックします。
フラッシュディスクがフォーマットされます。
- 7 フォーマットが完了したら、「Close (閉じる)」 ボタンをクリックします。
「Format (フォーマット)」 ダイアログボックスが閉じます。
- 8 Windows のタスクバーで「Start (スタート)」 ボタンをクリックし、「Run (ファイル名を指定して実行)」 をクリックします。
「Run (ファイル名を指定して実行)」 ダイアログボックスが表示されます。
- 9 次のコマンドを入力して、**syslinux** 実行可能ファイルを起動し、**-ma** オプションを使用してドライブをブート可能にします。

```
path\win32\syslinux.exe -ma X:
```

ここで、*path* は、Syslinux を展開したフォルダで、*X* は、USB フラッシュドライブのドライブ文字 (例: A、B) です。

ドライブ上に `ldlinux.sys` ファイルが作成され、ブート可能になります。
- 10 ダウンロードした **HIA-version.zip** アrchiveファイルの内容を USB フラッシュドライブに展開 (解凍) します (*version* は Oracle Hardware Installation Assistant のバージョン番号です)。

- 11 USB フラッシュドライブを取り外すには、「**Safe to Remove Hardware** (ハードウェアの取り外し)」アイコンをクリックしてから、システムからフラッシュドライブを取り外します。
これで、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションをブートする USB フラッシュドライブの準備ができました。

次の手順 [133 ページの「USB フラッシュドライブをブートして Oracle Hardware Installation Assistant を起動する方法」](#)

▼ USB フラッシュドライブをブートして **Oracle Hardware Installation Assistant** を起動する方法

このセクションの手順は、OS をインストールするサーバーに対してのものです。

注-システムコンソールのブートメッセージが表示できる準備ができていない必要があります。

始める前に [124 ページの「Oracle Hardware Installation Assistant USB フラッシュドライブの作成」](#)を参照してください。

- 1 **Oracle Hardware Installation Assistant USB** フラッシュドライブを使用可能な **USB 2.0** ポートに挿入します。
- 2 システムを再起動し、ディスプレイに **BIOS** プロンプトが表示されたらその指示に従って **BIOS** セットアップユーティリティを実行します。
BIOS セットアップユーティリティのメイン画面が表示されます。
- 3 「**Advanced**」 > 「**USB Configuration**」 > 「**USB controller**」 セットアップ画面に移動し、「**USB 2.0 (high speed)**」モードのコントローラを設定します。
- 4 「**Boot**」 > 「**Hard Disk**」 セットアップ画面に移動して、**USB** フラッシュドライブを最初のブートデバイスに設定します。
USB フラッシュドライブは、最初にリストされたブートデバイスである必要があります。
- 5 変更を保存して **Oracle Hardware Installation Assistant** アプリケーションをブートするには、「**Save and Exit**」を選択します。
BIOS セットアップユーティリティが終了し、**Oracle Hardware Installation Assistant** USB フラッシュドライブからシステムがブートされます。

次の手順 [17 ページの「アプリケーションの起動とプロビジョニングタスクの実行」](#)

Service Tags のインストール

Oracle の Sun Service Tags を使用して、Oracle のシステム、ソフトウェア、およびサービス (ギア) を自動的に検出できます。サービスタグはタグが付けられた個々のギアを一意に識別し、ギアに関する静的情報を標準的な XML 形式でローカルネットワーク上で共有することを可能にします。この検出機能を活用して、分散したインベントリを管理するための管理ツールとして使用できます。

Sun Service Tags には次のようなメリットがあります。

- 軽量 (約 100 K バイト)。
- ギアごとに検出の設定が可能。
- システム管理者が Oracle に新しい装置を登録する際に使用可能。
- (システム管理者のアクセス許可のある) Oracle サービスによるトラブルシューティングに使用可能。
- クエリーがあった場合のみ実行 (バックグラウンドでは実行しない)。

また、Sun Service Tags は個人情報を含まず、自動的に情報を収集したり Oracle に送信したりすることはありません。Oracle に提供されるサービスタグ情報は、Sun ギアの識別と Oracle 顧客サポートの向上にのみ使用されます。登録データは、システム管理者がギアの検出を要求した場合にのみ収集されます。サービスタグの詳細は <http://wikis.sun.com/display/ServiceTag/Home> を参照してください。

Sun Service Tags は、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用して補助 OS のインストールを実行した際に、システムにコピーされます。ただし、インストールはされません。お使いの Sun ギアを登録して追跡を容易にするために、Sun Service Tags のインストールを推奨します。

Sun Service Tags をインストールするには、使用しているサーバーの OS に対応した次の手順に従います。

- 136 ページの「Linux に Service Tags をインストールする方法」
- 136 ページの「Windows に Service Tags をインストールする方法」

▼ Linux に Service Tags をインストールする方法

サービスタグによって、システム、ソフトウェア、サービス(ギア)の自動検出が使用可能になります。サービスタグはタグが付けられた個々のギアを一意に識別し、ギアに関する静的情報を標準的な XML 形式でローカルネットワーク上で共有することを可能にします。

- 始める前に
- Oracle の Hardware Installation Assistant を使用して、サポートされる Linux オペレーティングシステムをインストールしている必要があります。
 - xinetd をインストールしている必要があります。インストールしていない場合は、Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションがサービスタグをコピーした場所にあります。

- 1 Linux サーバー上で次のディレクトリに移動します。

```
/var/optional
```

- 2 次のコマンドを入力してハードウェア登録クライアントをインストールします。

```
rpm -i sun-hardware-reg-version.i386.rpm
```

ここで、*version* は .rpm ファイルのバージョン番号です。

- 3 次のコマンドを入力してサービスタグをインストールします。

```
rpm -i sun-servicetag-version.i386.rpm
```

ここで、*version* は .rpm ファイルのバージョン番号です。

注-サービスタグおよびドキュメントは、展開したディレクトリにあります。

▼ Windows に Service Tags をインストールする方法

サービスタグによって、システム、ソフトウェア、サービス(ギア)の自動検出が使用可能になります。サービスタグはタグが付けられた個々のギアを一意に識別し、ギアに関する静的情報を標準的な XML 形式でローカルネットワーク上で共有することを可能にします。

- 始める前に
- Oracle Hardware Installation Assistant アプリケーションを使用してサポートされる Windows オペレーティングシステムをインストールしている必要があります。

- 1 Windows サーバー上で、Windows エクスプローラを使用して次のフォルダに移動します。

```
C:\sun\optional
```

- 2 次のファイルをダブルクリックしてハードウェア登録クライアントをインストールします。

```
sun-hardware-reg-version.msi
```

ここで、*version* は .msi ファイルのバージョン番号です。

- 3 次のファイルをダブルクリックしてサービスタグをインストールします。

sun-servicetag-version.msi

ここで、*version* は .msi ファイルのバージョン番号です。

注-サービスタグおよびドキュメントは、展開したディレクトリにあります。

索引

B

- BIOS および Oracle ILOM のアップデート, 11
- BIOS のアップデート, 51-54
- BIOS の構成
 - 次回のブートデバイスの設定, 80-82
 - ブートデバイス順序の設定, 77-80
- BIOS の設定, 14

C

- CD, 入手, 15

H

- Hardware Management Pack, 「Oracle Hardware Management Pack」を参照
- HBA ファームウェアのアップデート, 11, 14, 56-58

I

- ISO イメージ, 12
 - 入手, 15

L

- Linux
 - OS インストール
 - 追加ドライバおよびソフトウェア, 49

Linux, OS インストール (続き)

- 無人, 108
- Service Tags のインストール, 136
- USB フラッシュドライブ, 124-128
- インストール, 43-49
- インストールの前提条件, 43-49
- 状態ファイルの例, 104

O

Oracle Hardware Installation Assistant

- CD、ISO、USB イメージの入手, 15
- ISO イメージ, 12
- OS のインストール, 11
- PXE ブート
 - イメージファイルの作成, 85
 - イメージファイルのダウンロード, 84
 - インフラストラクチャのセットアップ, 83
 - 概要, 89
 - 状態ファイルの作成, 94
 - 状態ファイルの表示, 94-95
 - 必要なファイル, 84
 - 無人 PXE ブートのイメージの作成, 110-111
 - 無人の要件, 93
 - 無人プロビジョニングタスク, 93-113
 - 有人インストールでのブート, 90-92
 - 有人インストール用のイメージの作成, 89-90
- VNC アクセスパスワードの設定, 116-117
- 概要, 11

Oracle Hardware Installation Assistant (続き)

起動

ローカルまたはリモートメディア, 20

機能とメリット, 12

サポート対象

オペレーティングシステム, 15

サーバー, 15

タスク, 11, 13

シリアルコンソールの使用, 118

説明, 11

タスクの実行, 21-26

デバッグ, 120-122

トラブルシューティング, 13, 119

ネットワーク情報の設定, 23

ファームウェアアップデート

無人, 109-110

ファームウェアのアップデート, 13

ブート

PXE サーバー, 89-90, 90-92

USB フラッシュドライブ, 133

無人, 111-113

無人

PXE ブートの準備, 110-111

ブート, 111-113

メディアの入手, 15

メディアブートオプション, 12

ログファイル, 120

Oracle Hardware Management Pack, 13

Oracle ILOM

設定, 14

ファームウェアのアップデート, 51-54

ユーザーアカウントの管理, 70-72

Oracle Hardware Installation Assistant のタスク一覧, 13

Oracle ILOM の設定, 11, 13

OS インストール

無人, 93-113

Linux, 108

Windows, 109

OS のインストール, 12, 14

P

PXE ブート

Oracle Hardware Installation Assistant

無人インストールでのブート, 111-113

有人インストールでのブート, 90-92

イメージファイルの作成, 85

イメージファイルのダウンロード, 84

インフラストラクチャのセットアップ, 83

概要, 89

状態ファイルの作成, 94

状態ファイルの表示, 94-95

必要なファイル, 84

無人の要件, 93

無人プロビジョニングタスク, 93-113

無人用イメージの作成, 110-111

有人インストール用のイメージの作成, 89-90

PXE ベースのインストール, 説明, 12

R

RAID

SAS と SATA の組み合わせ, 27

構成, 11, 12, 14

統合ミラー (IM), 27

統合ミラー拡張 (IME), 27

ボリュームの削除, 31-33

ボリュームの作成, 28-31

Red Hat Enterprise Linux のインストール, 43-49

「Release Note」タブ, 22

S

Service Tags

インストール

Linux, 136

Windows, 136-137

説明, 135-137

Service Tags によるハードウェアおよびソフトウェアの一覧作成, 135-137

Service Tags のインストール

Linux, 136

Windows, 136-137

Sun Installation Assistant, 11, 15

Sun Service Tag, 13
SUSE Linux Enterprise Server のインストール, 43-49
syslinux, 入手, 123-124

U

USB フラッシュドライブ, 12
Linux ブート用に作成, 124-128
Windows ブート用に作成, 131-133
サポート, 123
ソフトウェアの入手, 123-124
ブート, 133
USB フラッシュドライブイメージ, 入手, 15

V

VNC アクセスパスワードの設定, 117

W

Windows
OS インストール
無人, 109
USB フラッシュドライブ, 131-133
インストール, 35-42
Service Tags, 136-137
追加ドライバおよびソフトウェア, 42
状態ファイルの例, 105
Windows Server 2008, 40

あ

アップデート, 12
HBA ファームウェア, 51-58
Oracle Hardware Installation Assistant, 23
Oracle ILOM ファームウェア, 51-58
エクспанダファームウェア, 51-58
システム BIOS, 51-58

い

インストール CD/DVD, 15
インストール方法
Sun Blade サーバー, 19
Sun Fire サーバー, 18
インストールメディア
オプション, 12
オプション (リモートまたはローカル), 17
ローカルまたはリモート, 20

え

エクспанダファームウェアのアップデート, 14, 54-56
エラーメッセージ, 119

お

オペレーティングシステム
Linux のインストール, 43-49
Windows のインストール, 35-42
インストールメディア, 12
サポート対象, 12, 15

か

概要
Oracle Hardware Installation Assistant, 11
ドキュメント, 9-10

き

起動, Oracle Hardware Installation Assistant, 20

こ

構成
SP
ID の設定, 64-66
ネットワーク設定, 67-69

さ

- サーバー、サポート対象, 15
- サービスプロセッサ (SP)
 - ID の設定の構成, 64-66
 - Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理, 70-72
 - SP ネットワーク設定の構成, 67-69
 - 回復, 59-61
 - システムクロックの設定, 73-76
- サービスプロセッサ (SP) の回復, 14, 59-61
- サポート対象
 - オペレーティングシステム, 12
 - サーバー, 15

し

- システム BIOS と ILOM のアップグレード, 14
- システムクロック, 設定, 73-76
- システムファームウェアの回復, 11
- 状態ファイル
 - Linux の例, 104
 - Windows の例, 105
 - 考慮事項, 103
 - 作成, 94, 106-107
 - 内容の表示, 94-95
 - ファームウェアアップデートの例, 105
 - 変数リスト, 95
- シリアルコンソール, 接続の表示, 118

せ

- 設定, Oracle Hardware Installation Assistant のネットワーク設定, 23

た

- ダウンロード, PXE イメージファイル, 84
- タスク
 - Linux のインストール, 43-49
 - Oracle Hardware Installation Assistant を使用した Windows のインストール, 35-42
 - Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理, 70-72
 - RAID ボリュームの削除, 31-33

タスク (続き)

- RAID ボリュームの作成, 28-31
- SP ID の設定の構成, 64-66
- SP ネットワーク設定の構成, 67-69
- アップデート
 - HBA ファームウェア, 56-58
 - エクспанダファームウェア, 54-56
 - システムのファームウェア (BIOS および Oracle ILOM), 51-54
- サービスプロセッサの回復, 59-61
- 次のブートデバイスの設定, 80-82
- システムクロックの設定, 73-76
- ブートデバイス順序の設定, 77-80

と

- ドキュメント, ライブラリの URL, 15
- ドキュメントの概要, 9-10
- トラブルシューティング
 - エラーメッセージ, 119
 - デバッグ, 120-122
 - ログファイル, 120

は

- パスワード
 - VNC アクセスの設定, 116-117, 117

ふ

- ファームウェアアップデート
 - 状態ファイルの例, 105
 - 無人, 93-113
- ファームウェアのアップデート
 - HBA, 14, 56-58
 - Oracle Hardware Installation Assistant, 13
 - エクспанダ, 14, 54-56
- ブートデバイス
 - 次の設定, 80-82
 - 順序の設定, 77-80
 - 設定, 11
- フラッシュドライブのサポート, 123

む

無人 OS インストール

Linux, 108

Windows, 109

無人インストールおよびアップデート, 93-113

無人インストールの監視, 115-118

め

メディア、インストール

オプション, 12

オプション(リモートまたはローカル), 17

ローカルまたはリモート, 20

り

リモートインストールメディア, 17

ろ

ローカルインストールメディア, 17

ログファイル, 120

